

---

# リアル忍者 北郷

浦波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアル忍者 北郷

### 【Zコード】

Z2097U

### 【作者名】

浦波

### 【あらすじ】

様々な世界に転生や憑依、漂流している北郷が今度はNARUTOの世界に転生した。

ある意味最も忍者らしく動く北郷は何時も通り自分の幸福を求めて行動する。

目が覚めると知らない天井が見えた……。

またか…………。

体が縮んでいる事から今回も転生か憑依だな。自分の体を見る限り2歳~3歳くらいか?周囲は木造建築の一戸建てらしい。多分この体の家だろう。

少し歩いて鏡を発見したので見てみたら俺だった。アルバムで見たことのある俺の幼少期の顔だ。

もしかして現実世界に戻れたか?

とやつと戻れたと嬉しくなつて来たがそれを打ち碎く物があつた。洗面台の上に「でいあー 北郷君」と書いてある手紙を発見した。久しぶりに見る手紙だな。出来れば無視したいが仕方ないので読んだ。

でいあー 北郷一刀君。

やあ、久しぶりだね。元氣?

実はさ、今君がいる世界はNARUTOの世界なんだよねえ。

まあ何でNARUTOの世界にいるのかは僕の適当なんだけども。それでいつもみたいに今回もNARUTOの世界で頑張つてよ。大丈夫、君なら出来るや。

あ、それとその世界つてさ、ジャンプ物なのに簡単に人が死ぬし、周りはチートみたいな奴等がわんさかいるじゃん?

今までみたいにコピー能力だけだと簡単に死んで面白く無いから特典として前いたハンターハンターの能力も使えるようにしてあげた

よ。

でも全部使えたら面白く無いからけよつと制限。使えるのは『完全なる隠匿』と『都合の良い祝福』の2つだけね？ちなみに念能力は使えないよ？だってその世界に念は存在しないからね。

まあ何とかなるが、君なら出来る！今までのよつに僕を楽しませてよ。

それじゃー！幸運を祈つて。バイバイ～。

いつものながらムカつく文章だ。  
にしてもN A R U T Oかよ…。

まあ、前みたいに主人公にはならなかつたのは良しとするか。  
何せ前回はハンターハンターでゴンに憑依したからな。原作通りに進める必要が多少あつたから無理して行動するなど非常に面倒だつた。

しかし今回の立ち位置は恐らくサブ。

これなら原作に関わる必要はまず無い。

それに気配や姿を完全に消せるつていうか認識させない『完全なる隠匿』や死亡以外なら何でも治せる『都合の良い祝福』があるんだ。大抵は問題無い。

それに今まで通り「ペー能力は健在らしいから金や食料に困る」とも無い。

残念ながら今の年齢では一人立ちは出来ないからしばらくは大人しくするとして、今は何年なんだ？

原作と同じなのか？それとも後か？先か？

それがわからねえと対処のしようがねえ。

もしも直ぐに九尾暴走や木の葉襲撃があつたら不慮の事故や殺される危険性だつて高い。

先ずは情報収集だな。

にしても俺の親はどこだ？

まさか一人暮らしな訳無いよな？

## 注意書きと主人公紹介

この小説はアンチ小説です。

原作キャラを真っ向から否定する文章が多くあります。

この小説の主人公は前作の「狡猾なゴン」から転生した主人公です。

この主人公は最低です。

原作を崩壊させたり、あえて遵守したりなど矛盾した行動があります。

この小説は作者の妄想です。

基本的にご都合主義です。

たまに下ネタがあります。

これらの事が一つでも気にくわいという方や、原作をとても大事に思っている。  
という方は見ない事をお勧めします。

## 主人公紹介

名前 北郷一刀

恋姫無双の北郷一刀とは全く関係は無く、ただの同姓同名なだけ。性格は利己主義で自分が良ければ基本的にどうでも良い。学歴は中卒で高校受験失敗後はニートになり、遊び呆けていた。

ある日、突然神だか悪魔だか分からぬが誰かによつてコピー能力を与えた物、触れた物をコピー出来る。後には更に拡大してアジア全域とアフリカ北部を支配した後に寿命で死亡。

そしてまた別の世界に行かせられ、その繰り返しをしている。

### 能力説明

初期から所有している能力

能力名『コピー』（特に名称は無い）  
直接見た物、触れた物をコピー出来る。  
個数や大きさに制限は無い。

この能力を使用しても術者は疲労しない。

### 制約

生物をコピーする事は出来ない。（術者が生物と認識しないなら可能）

ちなみに忍術は主人公が生き物と認識していないのでコピー可能。コピーやコピーした技使えるのは本体のみ。

能力名 『都合の良い祝福』

ありとあらゆる怪我や病気を癒す。

念や忍術で受けたダメージや呪いにも有効。

任意での発動が可能。（使用後1月以内に仮死状態になつた場合に  
は自動で発動。）

制約

この能力は一度使用すると消去される。  
生きている者ではないと発動しない。  
自分以外には使えない。

能力名 『完全なる隠匿』

この能力を発動すると姿や気配、その他何もかもを認識されなくな  
る。

生物は勿論無生物にも認識されない。

円など念能力を使用しても認識出来ない。

忍術や罠にも認識出来ない。

この状態で攻撃された対象は攻撃された事は認識出来るが攻撃対象  
を認識出来ない。

制約

この能力は一度解除すると消去される。

姿形が消えるだけで攻撃を受ければダメージはそのまま受け  
る。

影分身で作った分身でも発動出来るが解除したらその分身はこの能  
力を使えなくなる。

## 2 現状把握（前書き）

この小説の北郷はあんまりテカイ事や田立つ事はしません。基本は忍者じしょ演技しながら日常生活を過いでいます。

あの後ようやく親を発見した。

どうやら俺は木の葉の忍者の家系に生まれたらしい。といっても血継限界ではなく、ただの忍者なの。

父親は上忍で母親は中忍。

両方ともそこそこ実力はあるらしいので俺にもその恩恵は多少備わっているだろう。

でも所詮原作には一切出なかつたモブだからあまり期待は出来ない。俺の名前も分かつた。何の因果か、北郷カズトといつ元の名前をこの世界風に書き換えただけらしい。

北郷つて現実世界では普通だけどこの世界じゃおかしくないか?まあ別に良いけど…。

にしても自分の名前を使うのは恋姫時代以来だな。何か嬉しい。

後年代も分かつた。

まだ九尾の襲撃跡が残つてるし、うちは一族も全滅していないことがら原作と同じが限りなく近い年代だ。流石に原作メンバーの歳は聞けない。会つたこと無いんだからな。

後分かつたのは俺の歳は3歳で兄弟はいない。

祖父母や親戚は九尾事件で全員死んだので両親以外の血縁関係は無い。

そんなに強くは無かつたが代々忍者の家系なので多分上忍になれるだけの資質はあるだろう。といつてもモブだけどね。出来るなら忍者にはならずに商人や農民、職人にでもなりたかったけど家系的に無理だな。

多分6歳ぐらいになつたら無理矢理にでもアカデミーに入れられるだろうな。面倒だが拒否は難しいだろう。

何せこつちはガキだ。

6歳のガキに決定権など存在しない。

「とりあえずアカデミーに通つてみて、その後決めれば良いぞ。」とか丸め込まれて終了だ。

まあでも原作組に関わらず、最初の試験に不合格すればアカデミーに戻れるし、そんなに悪くは無いか。

アカデミーなら所詮体育に力を入れてるだけの学校と同じだ。

とりあえず自分の立ち位置は理解出来た。後は今後を決めなくては…。

とりあえず里を抜けよう。

木の葉落としの時に偽装工作して死んだように見せかければ良い。最悪『完全なる隠匿』を使えば簡単に抜けれる。下忍にもなつてないアカデミー生が抜けた程度なら別に騒がないだろうし、追い忍も来ないだろう。

だとしたら『現実シェルター』も欲しかつたな。あれがあれば例え追い忍が来ても簡単に振り切れるし隠れられる。一番使つてた能力だから無いと面倒だ。

さてと、とりあえず行動方針は決まつたから早速行動開始だ。まだ何も知らないガキの振りをして親の部屋を漁る。

無いとは思うがアカデミーの教材みたいな初心者用のテキストを探す。途中で見つけた上級や中級忍術書も触つて「コピー」する。まだ使

えないが知識として役立つ。

しばらく漁り、やはり無いかと諦めかけていたら奥の方に多少ぐちやぐちやになつて、いたが昔のアカデミーのテキストを発見した。早く触り「コピーする。

アカデミーのテキストに載つてゐる術は変わり身や分身、変化といった基本から縄抜けや金縛りなど役立つ術も載つていて、結構使えるな。チャクラの記述などは微妙だったがな。まあ代わりに親父の持つてた資料で穴埋め出来るから良しとするか。後は実践あるのみだ。

そう思つてたら後ろから

「あらあらダメじゃないカズト。そこはお父さんの大事な本とかが一杯あるのよ。」

と母親が声をかけてきた。とりあえず先に決めていた通りにガキの振りをする。

「…」めんなさい。たくさん本があつたから見たかったの…。」  
上田遣いで涙田で言つ。

本心では「空氣読めよクソアマ。人が人生の第一歩を踏み出した時に邪魔しやがつて。」と思う。

母親は俺の態度を見て反省したと思つたのか

「分かつたら良いのよ。ただ次見たい時があつたらちゃんとお父さんに言うのよ？」

と軽く注意して終わつた。

俺も「はーい。」と答えとく。次からは『完全なる隠匿』を使うか。次は母親の部屋を荒らす予定だつたしな。

とりあえず今は影分身を覚えなくてはな。

あれがあれば修行効率は何十倍にもなるし、俺の身代わりにも出来る。

ただあれはたかだか3歳のガキが覚えるには無理だつ。誰かのをコピーする必要があるな。

親父を使うか？

### 3 基礎会得（前書き）

影分身についてはこんな感じで勘弁して下せ。

親父はあまり家にはいない。

まあ上忍だしな。任務とかで里外にいる事が多いのだろう。  
おかげでたまにしか会えない俺を溺愛している。これは好都合な  
でただの好奇心旺盛なガキの振りをして親父にねだる。

「ねえねえお父さん。」

俺が話しかけると

「うん? どうしたんだカズト?」

と笑顔で返してくる。そこまで俺が好きか。

「お父さんから貸して貰つた本に分身の術つてあつたんだけど、ど  
んなのか見せて?」

とねだる。

あの後親父に謝り、正式にお願いしたら簡単にアカデミーのテキス  
トを貸してくれた。息子に立派な忍になつて欲しかつたからかな?  
そんなに息子を少年兵にしたいか? ヒテエ親だな。

「分身の術か?」

カズトは凄いな、分身の術の記述はテキストの後半なのに。もうそ  
こまで読んだのか?」

と聞いてきた。ちょっと卑すぎか? でも影分身を覚えるためだから  
な。いちいちアカデミーまで待つてらんねーし。

「うん! でも分身の術つてイメージしづらいから一回見せて?」

と頼み親父と一緒に庭に出た。今更だがウチつて家は普通だけど敷  
地は広いよな。

やつぱりそこそこ歴史ある家だからか?

「それじゃあ見てろよ?」

「分身の術!」

印を組んで3人に親父は分身した。勿論「ペー」をせて貰つたけど。

「うわあ！スゴーイ！」

分身の親父に近付き、触ろうとするが通り抜けた。

「あれ？」

と俺は首をかしげる。ガキの振りつて大変だよな。

「ああ、分身の術で増えた分身は実体が無いから触れないんだ。」と親父は解説してくれた。

「じゃあ増えたお父さんには触れないんだね。」

と寂しげな目を親父に向ける。流石に「じゃあ影分身やつて。」なんて言えないからな。テキストには載つてないし。

「うう……そんなことは無いぞ！」

と分身を解いた親父は違つ印を組んで

「影分身の術！」

と狙い通りの術をしてくれた。マジコイツ単純。

「ほらあ、カズト。今度は触れるぞ。」

と出した影分身と本体で俺の頭を撫でる。2方向からのナーテナーテつて不気味なんだけど。

「スゴーイ！これは分身の術と違うんだね！」

不思議そうな眼差しを向ける。それに気分を良くしたのか親父は「これは影分身の術といって実体まで分身するんだ。凄いだろ？。」と皿慢気に言つてくる親父。息子に誇るのは良いが別にお前の術じやねえだろ？

「凄い凄い！お父さんって凄いんだね？」

一応持ち上げとく。親父は俺の思惑など分からぬのか素直に喜んでいる。忍の癖に感情表現が分かりやす過ぎないか？それとも仕事の反動のせいか？

まあ良い。この上機嫌を利用して貰おう。

「ねえお父さん、他の術も見せて。」

とねだると「おう、良いとも良いとも。」と軽く了承してくれたの

でテキストに載つてゐる変化や金縛りなど基本型を全て見せて貰つた。

流石に攻撃系の術は見させてくれなかつたけどな。

「カズトにはまだ早いよ。そのテキストの術を全部出来るようになつたら教えて上げるよ。」

とかわされた。まあそうだろな。

流石にこの年のガキに火遁とかの術を教えても無意味だし、万が一覚えられて使われたら被害が出る危険性が高い。

とりあえず当初の予定の影分身は覚えられたし、ついでに初級忍術も覚えられたから良しとするか。

ちなみに影分身とかをそのまま「コピー」と「コピーした奴の影分身」が出る。

でも術を「コピー」と「メカニズム」とかを理解出来るようになるから自分の影分身も出せるようになる。

初めて影分身を出した時はとんでもないチャクラを必要としたが何とか成功させた。まあ、メカニズムさえ解れば後は「コピー」したチャクラを注ぎまくれば良いだけだから本体の俺には何らダメージは無いがな。

次はチャクラコントロールを身につけなくては。

影分身を留守番に使つて本体の俺は『完全なる隠匿』を使って隠れながらチャクラを体に行き渡らせる修行をする。これが出来ないと身体能力が上がらないからただの3歳児と同じだ。

もし木登りの修行をやつたなら失敗して落下する時に首を折つて自殺することになつちまつ。

先ずはチャクラを体に浸透させて体を鍛えなくては。影分身と隠匿を併用して何百人単位で修行だ。

疲労がたまつたら祝福で回復する。改めてスゲエチートだと分かる。ある意味無限に修行が可能だからな。

チャクラコントロール班と体を鍛える班に分けて修行をやらせる。体を鍛えるとは言つものの、まだ3歳の体だから精々ランニングや腕立てなどトレーニングレベルでしかない。

地道に鍛えるしか無いからな。

ただ術だけ覚えても逃げるためには身体能力が必要だし、体術は重要だ。

幸い、血筋のせいか体力や頑丈さは常人以上だ。少なくとも6歳レベルはあるだろう。

まあ原作組には負けるがな。

アイツ等たかだか一月か二月で倍以上強くなるからな。どんだけのインフレだよ。

マジアイツ等人間とは思えねえ。もしかしてアイツ等転生者で神から特典でも貰つてゐるんじやねえか？

そのほうが納得出来る。

## 4 厳しい現実

1年が経過し、ようやくチャクラコントロールやアカデミーで習つ  
エラソングの忍術を全て自分で使えるようになった。

ここまで長かつた。

てつりアカデミーのランクなら簡単に覚えるだろつと思つてい  
たがチャクラコントロールに手間取り、1年もの歳月を費やす結果  
になつた。

まあおかげで基礎はしっかり身に付いたから良しとするか。

それに、時間をかけて体を鍛えたから基礎体力も向上した。  
今なら100mを14秒で走れそうだ。

一般的に考えるとちょっと早い程度だが、俺はまだ4歳だ。それを  
考えると驚愕の運動能力だな。

それでは第2段階に入るか。

子供用の忍具をコピーしてこれからは武器の使用訓練と更なるチャ  
クラコントロールを会得する。

にしても子供用の忍具があるとは思わなかつた。見つけたのは5歳  
児用で少し大きいが問題無い。

5歳のガキに刃物を持たせて良いのかよ? コピーしたクナイや手裏  
剣は普通に鋭く、人間を切り裂くには十分だ。

ある意味この世界はハンターハンターの世界より危ねえな。

とりあえず武器の扱いは教本を読んだり下忍や中忍の訓練風景を観  
察して覚えるか。まだ実戦には早すぎるしな。

次にチャクラコントロールだが、今までにはチャクラの移動や体内浸

透で身体強化を主にしていたが、これからは実戦に入る。受け身の取り方や体も頑丈になつて来たから手を使わない木登りを開始する。

開始する。

チャクラコントロールは1年みつちりやつたから木登りに自信があつたが、現実は厳しかつた。

原作でサクラが一発で成功していたが、あれは異常だ。

それどころかサスケやナルトも1週間で見事に会得したのもあり得ない。

だつて俺は木に足を吸い付けるだけで1週間。更に1週間経つてようやく登れるようになり、頂上に到達するには合計1ヶ月もかかつた。

何この差？原作補正？才能の差？

それともただ単に俺が4歳だから？

……多分全部だらうな。非常にムカつくが。

キルアに修行をつけていた頃を思い出す。まだ会つた事も無い原作組を無性に殺したくなるのは仕方ないだらう？

リーの気持ちが分かるわ。まあ、アイツも大概チートだけだ。

ちなみに現在は木登りの発展版である水面歩行の修行をしている。ナルトみたいに60°の熱湯の上でやるみたいな事はしないが、普通の川でやるのも俺にとつては命がけだ。何せ大抵の川では身長の問題で足が着かない。もし筋肉が痙攣でも起こしたら溺死してしまう。

だから影分身の補助と見張りを立てて万全の状態でやるという非常に面倒な手順を踏む。

ちなみに俺が水面歩行をやつてる途中でも影分身がトレーニングや

新たな忍術会得などをしている。俺にチャクラ切れの心配なんて必要無いからな。

例え俺のチャクラが切れても万全な状態の影分身を「コピーすれば24時間修行が可能だ。

やっぱ俺が一番チートか？

遂に原作組に遭遇。

我らが主人公、うずまきナルトがいた。

まあ、遭遇つていうか見つけただけだけだけどね。

ちなみに現在ナルトはハブられています。

ナルトはうすくまつっていて、里の住人達が石を投げてる。

見た目俺と変わらないという事はやはり原作に限りなく近い世界なんだと改めて分かった。

にしても4、5歳のガキに大人が石を投げつけるのはスゲエ光景だな。

こんなことされてナルトが火影になつて里の奴等を見返すとはスゲエ考えだな。

俺だったら強くなつて里を滅ぼすと誓つだろつ。

ていうかここまでされたら里から逃げないとマジでヤバイぞ？  
しばらく観察したけど食料を売つてくれないし、ていうか近付くとシャッターを下ろされる始末だ。まるで死神か疫病神扱いだな。  
滅多にしない俺まで同情するぜ。

ちなみにウチの両親もナルト排斥派。

親子で歩いていたら偶然ナルトを見つけて  
「カズト、あの子に近付いてはダメよ？」  
と母親から言われた。

「なんで？」

何も知らない風に聞いたら

「何でもよ。良いわね？絶対に近付いたり話したりしちゃダメよ？」  
と理由は言わずに念押しして来た。やっぱり理由は話さないのか。  
まあ、自分の両親や親戚、親友を粗方九尾に殺されたらしいからな。  
こうなつても無理は無いか。

「うん、分かった。」

と返事をしどぐ。別に俺はナルトがどうなるがどうでも良い。  
他のオリ主達はナルト救済に向かうが、俺は興味無い。  
少なくともまだ九尾の力が使えないナルトに価値は無い。  
だったらカブトでも尾行して怪しい研究やチャクラメスでも「コピー  
する方が何倍も有益になる。

カブトを能力を使って尾行して秘密研究所にも潜入してくまなく調べたが、大したモノは見つからなかつた。

精々実験途中の解体された死体やまだ生きてるが腹を開けられてる  
人間など別にコピーする価値も無いモノばかりだ。

カブトが形質変化させて内部だけを切るチャクラのメスぐらいしか  
成果は無い。多少は忍術の本や医療関係の本もコピー出来たから良  
しとするか。

まあ、上級忍術とかの印や使い方が分かつてもチャクラがまだ全然  
足りないし、コントロールも未熟だから無駄知識にしかならない。  
影分身を一度に何百体と使い、そして吸収してからチャクラの總  
量はかなり上がってるけどまだ全然足りない。

精々まだ中忍レベルだ。

まだ成長期だからこれから伸びるんだろうが、それをゆっくり待つ  
てられないから無理矢理鍛える。

このまま行けばアカデミー入学時には上忍レベルにまでチャクラ総

量は増えてるかもな。

そうなれば「Pマーしなくても自分で覚えられる可能性もある。

この世界で好き勝手生きるには圧倒的な力は必要不可欠だ。

最終目標は万が一暁や面倒な組織に狙われても軽くあしらえるぐら

いの強さだ。

## 5 ハード

水面歩行や忍具修行を始めて1年。

5歳になつた頃、ようやく水面に長時間立てるようになったし、全速力で走れるようになつた。

これでチャクラコントロール力は更に上がつた筈だ。

一方、忍具関係はまだまだ発展途上。

流石に1年じゃ極められないから修行は継続中だ。

チャクラ総量は影分身修行のおかげかかなり上がつてゐる。今では上忍の下位ぐらいにまでなつた。まあ、最悪コピーした術を使えば良いだけだからそんなにいらないが、ありすぎて困るものじゃないからこれからも上げ続ける。

さあて、ようやく本格的な忍術の修行といくか。

このチャクラ総量とチャクラコントロールならランクCやランクBの忍術も覚えるかも知れない。

コピーすれば手つ取り早く楽なんだけど、俺がコピーしたい忍術をわざわざ俺の前で使ってくれる訳無いし、そもそも里の中では被害がデカイ上級忍術は使わない。

だからと言つて俺が里の外にいつて勝負を仕掛けたりするのはまだ早すぎる。いくらこの年代では強いと言つてもまだまだ下忍レベル。こんな状態で里から出たら格好のマトになるのがオチ。だから使いたい術は自分で覚えるぐらいしかない。

まあ、それでもコピーを諦めた訳じゃない。

親父の部屋にあつたチャクラを流すと反応する紙を「コピー」してチャクラを流してみたら紙が燃えた。どうやら俺のチャクラは火属性らしい。

火属性という事は格好の獲物がある。

天下に名高きうちは一族だ。

うちはの大虐殺が確かもつすぐ起こるから去年から度々うちは一族の土地に侵入して観察していた。

やはりとんでもない広大な土地を有しているからだろうか、敷地内で被害がデカイ火遁系忍術をバンバン使っていた。

豪火球や豪龍炎など様々な火遁系の術をコピーさせて貰った。

ちなみにイタチも見つけた。

まだ万華鏡写輪眼は無いからか普通に修行してたけど威力とかマジでスゲエ。

アイツと戦うとかサスケの根性は信じられん。あんなの見せられたら俺なら復讐など諦めるか余程の確信を持つるまでは仕掛けられない。

ていうか大虐殺の時にみんなと一緒にサスケも殺した方がサスケのためでは?

だつてそうすれば後の殺伐として酷い人生を送らずに済んだろうに。可哀想にねえ?

とりあえず火遁系の術はそこそここの数を覚えられたから他の属性の術も覚えよう。

火遁系ほど強くはならないかも知れないけど色んな属性の術を使えた方が良いに決まってる。

行動方針としては「コピー」した教本や術式の本を見ながら地道に修行しながら、里の訓練所や訓練している奴等を見つけてそいつらの技をコピーする。

「コピー」するにはオリジナルの俺が直接見る必要があるから影分身が

優良株の発見を報告してきたら俺が見て「ペリーする。  
基本はそれでいく。

次はチャクラコントロールだ。

水面歩行が出来たから更なる段階である滝登りだ。

流れる滝に逆らいながらチャクラをコントロールして登るというか  
なり難しいが、出来るようになれば更にチャクラコントロール力は  
上がる。

死ぬ危険性があるから影分身にやらせるけどね。

それと体術の修行だ。

身体能力もそこそこ上がって来たから体術も本格的に鍛える事にする。

しかし相手が精々自分の影分身ぐらいしかいなかからどうしても効率が悪いな。

俺に師匠でもいれば手早く済むんだけど俺にそんな都合の良い存在はいない。

リーミみたいとは言わないがそれなりの体術を身につけたら里を出で他国の忍を襲うか？

流石に木の葉でそんな事をやればバレる可能性が高いしな。  
まあ、影分身でやれば俺が死ぬ事は無いから良いか。変化で化ければ他国ならバレないとと思うし。

このようなハードスケジュールをやりながら非常に面倒だが家族団  
欒も欠かさない。

「これ美味しいねー！」

とかベタなセリフを言いながら家族で鍋をつつくとかマジ疲れる。  
親父や母親の「友達は出来たか?」みたいなくだらない質問に答えるのがウザつた。しかし木の葉にいる限りコイツ等は必要だから理想の家族を演じてやっている。  
ある意味修行よつこつちの方が疲れる。

## 6 アカデミー入学

6歳になり、アカデミー入学可能の歳になつた。

両親は勿論アカデミーへの入学を勧める。といつよりもう決まつていた。

いつの間にか入学願書は提出されたりしく、いきなり「来月からアカデミーが始まるぞ。」

と親父が言つて来やがつた。子供に何の相談も無しかよ？確かに6歳の子供に将来に関する重大な決定を下させるのは難しいが、殺し、殺されるのが当たり前の世界ににこやかに送り出す親つてどう？

気分は赤紙を突きつけられた気分だ。赤紙同様、拒否は出来ないからな。

「うわあー遂にアカデミーに入れるんだね？」  
と喜んどぐ。面倒な軋轢は最小限にしたい。

「カズトはアカデミーに入る前から勉強してたからきっと一番になれるぞ。」

と自信満々に親父が俺に言つ。

確かに普通なら一番になれるだろうが今年はバグの年だ。  
座学ではトップになる春野サクラや全科目トップのうちサスケがいるんだからな。

どう頑張ってもサスケと同率1位にしかなれない。別にならないけど。

だつてトップになつたらサスケと比較されたりして面倒だし。そんなに目立つ必要は無い。  
精々トップ10に入るぐらいで良い。

それぐらいならそこそこ優秀だからある程度の誤魔化しも効くし、

バカにはされない。

一番楽なポジションだ。

長つたらしい入学式が終わり、教室に入ると原作組が勢ぞろいしてた。

うずまきナルト、うちはサスケ、奈良シカマル、犬塚キバなどなどチートメンバーが腐る程いる。今はタダのガキだが、6年後には化物に進化してる。

ちなみにナルトは原作どおりイタズラ小僧だ。

担任教師に罷を仕掛けたり、落書き、サボり、器物破損などなどザつたい限りだ。相手にして貰えないなら諦めるか開き直れよ。だからお前は何もかもが中途半端なんだよ。

アカデミー当初は本体である俺が通っていたが、やはりレベルが低すぎる。

アカデミーの授業レベルなら3歳の時に終了したからな。高校生が小学校に入学するのと同じだ。

つまらん。シカマルがよくサボるのも頷ける。暇つぶしにならないからな。

早々に見切りをつけて影分身に授業を行わせる事にした。レベルを大幅に落として常に学年5~10位を目指せと命じて俺は修行に移つた。

俺は更なる忍術や知識を求めて『完全なる隠匿』を使い、火影の屋

敷に潜入した。

見張りや罠などは俺を認識出来ないから堂々と侵入して禁術や禁書保管庫に入つた。

にしても原作でナルトは何でこの屋敷に簡単に侵入出来たんだろう?  
?少なくともこここの警備はかなり厳重だ。たかだかアカデミー卒業間近の生徒の侵入など許す筈は無い。

火影がわざと入れたのか?

まあ良いか。とりあえず今は禁書や禁術書も何もかもを手当たり次第にコピーだ。

初代火影が封印したという封印の書や医療忍術の書、拷問の書、表には明かせない書など全てをコピーして堂々と帰つた。

これで火影が知つている術や情報などは文書化されたものは全て知る事が出来た。

多分まだ暗部とか「根」には術や情報があるだろうから侵入したいが、場所が分からぬ。

とりあえず今は場所を探ろう。分かつたら侵入して「コピーだ。それが終わればこの里が知りうる情報全てを俺も知れる。

情報は無いよりは多い方が良いからな。

原作でナルトは封印の書一番初めの「多重影分身の術」しか出来なかつたと言つていたが、それだけで十分異常だ。

何せ僅か一時間足らずで会得出来たんだからな。

俺も試しにやつてみたが、自力で多重影分身を出来るには1ヶ月かかった。オマケに出せたのは3体。

一応の才能や今まで努力をしてきた俺でさえこれだ。  
時々やるせなくなつてくるがこれは諦めるしかない。何せナルトは主人公。この世界に愛されてるんだからな。

封印の書には多重影分身の他にも様々な術が載っていたがほとんど使えない。どうやら俺のレベルが足りないらしい。  
まあ、これは追々会得すれば良い。

原作開始まであと6年あるんだ。何とでもなる。

体術や忍具の修行も順調だ。

チャクラを体に浸透させるのもかなりコントロール出来るようになつたから超人的な運動能力を有するようになつた。  
流石にリーみたいに体術のみに注いだ奴には適わないだろうが、下忍レベルなら対等かそれ以上には戦える筈だ。

忍具についても手裏剣や飛び道具の扱いもかなり完成してきた。  
この世界で銃が生まれない訳だ。明らかに銃弾より早く投げられる  
し弾道？を曲げる事も出来る。

ていうか忍のせいで近代兵器の大部分が生まれないだろうな。

チャクラを浸透させて理想的な投擲姿勢で投げればとんでもない早さで手裏剣やクナイが飛ぶ。

俺でさえこの早さだ。上忍レベルなら最早田で追えないだろうな。

チャクラコントロールも大分出来てきたからそろそろ性質変化に入るか。

チャクラも武器として扱えれば戦術の幅はかなり広まる。

チャクラでクナイや手裏剣を覆えば頑丈に、強力になるし、例え武器が無くなつても戦える。まあ、俺の武器が無くなる事は無いがな。

会得するにはかなりの修練を積む必要があるから長い修行になりそ

うだ。

そうなるとアスマのチャクラ刀が欲しいな。

コピーしよう。

アカデミーに入つて2年目。

ようやくアカデミーでも忍術の実習に入つた。

今まで遠足みたいなサバイバル実習や忍術理論や戦術の座学ばっかりだつたから周りは浮かれている。

まあ、忍術をしたい気分は分かるがな。

今まで出来なかつた事が出来るようになるのは誰でも嬉しいものだ。俺も始めて変化の術が出来た時は嬉しかつた。3歳の時だつたがな。

アカデミーでは7歳になつてようやく縄抜け、隠れ蓑、変化など基本的な術を教えるらしい。

普通に考えれば十分早いか？

何せ現実世界で言えば小学1年生と同じ歳だ。そんなイタズラ盛りのガキ共に術を教えるのはどうかと思つがな。

教師が術の説明をしている途中でうちはサスケは勝手に印を組み出し、見事に成功させた。

周りは「スゲエ！」や「流石サスケ君！」みたいにもてはやす。確かにスゲエけど教師の面目丸潰れだぜ？

ほら、実習担当の教師が若干青筋立ててる。

自分が教える前にやられるつてマジ迷惑でしかないもんな。サスケも教師の顔を立てて説明が終わつた後にすれば良かつたのに。まあ、たかだか7歳に空氣を読むことを求めるのが間違いだらうがな。

な。

それに対抗心を抱いたのかうずまきナルトが

「なんだよ！なんだよ！俺にだつて出来るつてばよーー！」

と意氣がつて印を組むが見事に失敗。周りから笑われている。

ナルトの才能が開くのは12歳以降だからな。九尾のチャクラを自在に操れないナルトはドベでしかない。

教師が改めて説明をして、話が終わつたので皆我先に印を組み、術をしようとするが大抵は失敗する。最初から成功する訳無いから当たり前だがな。

ちなみに俺も一度失敗してから2度目で成功させた。これならここまで目立つ事は無い。

周りの奴等から「教えてくれ。」と頼まれたので暇つぶしとして指導する。と言つても教師の説明を分かりやすくしただけで大した指導はしていないがな。

授業が終わる頃にはほぼ全員が術を成功させたが、ナルトだけは一度も成功しなかつた。そのせいで再度落ちこぼれのレッテルを張られた。

つーかアイツ簡単な術にチャクラ込めすぎ。あれは上級忍術に使う量ぐらい込めてるぜ。

その代わりにチャクラコントロールが下手すぎで無意味に終わつてる。アイツがコントロール技術を持つたらどんな強くなるからな

今はその片鱗さえ見せないが。

尾行や調査をした結果、ようやく暗部や「根」の本拠地を見つけた。暗部は変な仮面を着けてるから簡単に尾行出来たけど「根」の奴等は尾行を撒くためか瞬身とかの移動系術を使いやがるから中々苦労させられた。

根の本拠地に入ると至るところに侵入者避けのトラップや見張りがうようよいやがる。火影の屋敷より警備が厳重だな。

でも『完全なる隠匿』を発動させてる俺には何の意味も無い。普通に田の前を通りすぎても全くバレないし罠も発動しない。

図書室にあつた禁書や禁術、ダンゾウの部屋にあつた危険性が高い術式が書いてある巻物も簡単にコピー出来た。

巻物の中には飛雷神の術みたいな超便利な術が沢山書いてあるが、俺のレベルで発動する訳無いので無用の長物だ。

まあでも暗部構成員とか血継限界についての知識が更に得られたから良しとするか。

滝登りの修行を終え、これでチャクラコントロールは上忍の域に達しただろう。

しかし形態変化はまだまだだ。

チャクラを棒状にして敵を切り裂くなど簡単な形状なら出来るが、チャクラメスのような難しいのは安定しない。

皮は切らずに内部だけを切るというのは結構難しい。でも出来ればかなり楽になるからな。

コピーで既に出来るが、自分で出来るようになれば誤魔化しも効くから自力達成を目指す。

逆に医療系は結構上手くいってる。

掌仙術などチャクラを込めることで傷を治癒する術などは成功した。まあ、『都合の良い祝福』があるからこんなのはいるないが、人前で治療する必要があつた場合に備えて覚えといた。

無いとは思うが知らないよりは良い。

性質変化については順調だ。

チャクラ量と制御レベルが上がったおかげで火遁系以外の術も使えるようになってきた。

火遁と相性が良い土遁が多いな。逆に水遁は難しいが。それでも初級や中級忍術ぐらいなら何とか会得出来た。精々補助ぐらいだが。

体術や忍具もレベルは上がってるだろ？が、実戦経験が無いから不完全に終わってる。

そろそろ一通りの強さは手に入れたから実戦に移るか。とりあえず実戦を見据えてフェイントなど騙す技術を更に上げる。これが終わったら初の実戦だ。

アカデミーも3年生になり、手裏剣やクナイといった凶器の扱いが増えて来た。

たかだか9歳のガキ共に危なく無いのか？たまに手を切る事故も起きてるし。

イジメに使われたらシャレにならないぞ？

他にもサバイバル実習の難易度も少しづつ上がって来て、1日自給自足で山で過ごすなど忍者らしい授業も増えて来た。まあまだ子供騙しの面が強いがな。

俺の学園生活はとりあえず順調だ。

狙い通りに学年10位ぐらいをキープしてるからそこそこ優秀な生徒と認識されてるし、なるべく原作組には近寄らずに当たり障りの無い友人関係も築いている。

アイツ等に近寄ると口クな事は無いだろうからな。出来れば一生関わりあいたく無い。

原作組はまあ、原作通りに過ごしている。

うちはサスケは忍術の授業では相変わらず教師が説明している横で術を成功させるし、戦術の授業では教師ですらうなる戦術を披露する。

他の科目でも全てトップで、他のアカデミー生を引き離している。どうせ偉大なるクソ兄貴が異常な程優秀だったから負けないために努力しているのだろうが、どう見ても才能ではうちはイタチに負けてるから劣化コピーにしか見えない。

逆に見てて哀れなぐらいだ。

一方うずまきナルトはそんなサスケに対抗心を出しで追い付こうとしているが、逆に失敗して毎回笑われるか呆れられている。空回りしてるのが分からないのか？

面倒だねえ子供のプライドって。

後の奴等も原作通りだ。

春野サクラは唯一座学だけはサスケと並んでトップ。他は平凡だけど。

奈良シカマルはサボりの常習犯だし、秋道チョウジは何時も何か食つてる。どこからあのお菓子は出でくるんだ？

田向ヒナタは時々ナルトをジッと見たり見なかつたり。リアルで見ると不気味だな。まるでヤンデレみたい。

とにかく原作通りだ。

ようやく実戦デビューの口が来た。

この日のために戦う技術は勿論、逃げる技や煙に撒く技術などござ  
といふときの技術も鍛えていた。

今回の実戦は主に体術や忍具の経験を得るためにだ。必要になつたら  
忍術も使うけど。

今回向かうのは隣国、岩の国だ。

岩の国を選んだ理由は特に無い。

ただ単に砂の国は砂漠だからヤダし、海を越えて霧の国に行く必要  
は無いし、だから岩の国になつた。

岩の国に向かうのはそこらへんのガキに変化した影分身だ。流石に  
本体が行って万が一があつたらヤダしな。

アカデミー生でも無い、12歳ぐらいのガキだから忍者の証である  
額当てもしてない。これならどこかの国の偵察か威力偵察程度にし

か思われないだろつ。万が一戦争が起きると面倒だしな。

火の国を出て2週間。ようやく岩隱れの里の国境線に着いた。

今回は見つかる事が前提なのでそのまま国境に入った。

岩隱れの里に向かいしばらく進んでいると前方から誰かが来た。

国境警備のためか一人だけ。

岩のマークが入った額当てをしてることから岩の忍に間違い無い。  
「止まれ！」

停止命令が出たのでとりあえず停止。忍と対峙する構図になつた。

「（）は岩隱れの里の領内だ。何のようだ？」

と聞いてきた。少し困惑もしているようだ。何せ侵入者が忍者に見えないガキだからな。

「おお、すいませんねえ。いつの間にか国境を越えちゃつたみたいで。

でもせつかくだから岩隱れの里を見学したいなあ。お願ひ出来ませんか？」

とりあえず平和的に交渉する。

「ダメだ。許可なく他国人間を里には入れられない。」

「そうですか。じゃあ残念で……」

会話途中で忍にクナイで切りかかった。

しかしそれは軽く避けられた。ちょっとショック。

「……どういうつもりだ？」

睨み付けながら忍が聞いてくる。

「いやあ、すいません。何となく貴方の顔が気にくわないのでつい。自分まだガキなんで勘弁して下さい。」

全く謝る気が無いように謝る。謝る気無いしな。

「ふざけやがつて……。連行して（）の国の忍者か聞きだしてやるー。と忍も襲いかかって来た。早さから多分中忍か下位の上忍かな？」

「ほつ！危ないなあ。ダメですよ？子供に襲いかかるなんて。まるで子供好きの異常者に見られますよ？」

軽口を叩きながら攻撃を避ける。逃げや避けるのには自信があつたから避けられた。

「つるさい！さつさと捕まれ！！」

と忍の攻撃も苛烈化してきた。

まだお互い忍術は使つていないがそれなりに熾烈な戦いになつた。にしてもやはり実戦は全然違うな。当てる気満々の攻撃も軽く避けられるし、相手の攻撃もフェイントが織り交ぜられていてかわしにくい。

最初は善戦していたがやはり経験の差か少しづつ押され始め、傷が増えて来た。

「降参したらどうだ？」

忍が勧めて来た。確かにこのままではジリ貧になつて何れは負ける。「はあ、はあ……残念、子供は諦めが悪いんだよ。」と強がる。

その言葉に忍も本気になつたのかクナイを構え、決めようとした。

そこに背後から農民と商人に変化した2体の影分身が忍に飛びかかつて来た。それに忍はビックリしたが、すぐに立て直して構え直す。実は初めから3体でスリーマンセルを取り、気配を消して機会を伺つていたのだ。

いきなり3対1と忍が不利になつたためか形勢逆転。

一気に忍が不利になつた。

ある程度実戦経験を得られたから増援が来る前に引き上げても良いんだけど、念のためにこの忍は殺しとく。無いとは思つが少しでも不安要素は消し去る。

少年と商人に化けた影分身が忍を囲み、農民に化けた影分身が印を

「土遁！土流槍の術！」

をかけた。

2体の影分身は忍の体を押さえつける。忍は何をする気か分かったのか必死に逃れようとするが間に合わず、土で出来た槍で影分身諸とも串刺しにされた。

影分身は消え、忍は重症を受けたがかりうじて生きていた。スゲエ生命力だな。

「…貴様どこの忍か知らないが…タダで済むと思っているのか！？」死ぬ間際のベタなセリフを聞き終えた後に残った農民に化けた影分身が忍の頭を飛ばし、忍のために潰した。

前方から増援が来たのか気配がするから影分身を解いて逃げた。

よし、初めての実戦だからかなり手間取つたが、無事終了だ。念のために影分身が持つていた装備は岩隠れの装備をコピーした物だから木の葉の忍がやつた証拠は無いし、火遁系ではなく土遁系の術を使つた事から内部か抜け忍の犯行と勘違いするだろう。目撃者である忍は串刺しにした後に首をハネたから確実に死んだ。万が一にもバレない筈だ。

にしてもアイツ強かつたな。

中忍だと思うけど、実戦は結構厳しいな。一人だけで行つてたら絶対負けてたし。

結局は数の暴力でしかない。まあ、勝てばどうでも良いけど。

さあ、今回得た戦訓を基に修行してまた実戦。その繰り返しだ。

岩隠れは多分しばらく警戒体制を取るだろうから、次は雲の国の雲隠れの里にでも行くかな。

実戦初体験から1年が経ち、10歳となり、アカデミーは4年目に突入して変化の術など使える忍術をようやく教え始めた。

やはりこれもうちにはサスケは一発で成功させ、得意気な顔をする。言つちやあ悪いが、お前の兄貴は多分6歳の頃には使えただろうからそんなに得意気にならない方が良いと思うが？

確かに普通に考えれば、驚異の才能だけじお前の目標はかなり高いから無意味だぜ。

まあ別に良いけど。他人の復讐に興味無いし。

俺は何時も通り1、2回ワザと失敗してから成功させる。これでも十分優秀なんだけどな。

大抵の奴等は1、2時間やつてようやく出来るんだから。

ナルトは何時までも出来なかつたがな。

まあ、でも原作の年には変化は出来ていたから何れは出来るんだろう。

何故がイルカに呼び出された。何かやつたか？

特に心当たりは無いが呼び出されたので職員室にいった。

「カズト～。お前もうちょっとヤル氣出せよ。」

と言われた。何に？

「どういう意味ですか？」

「お前、わざと毎回術に失敗したりテストで間違えたりしてるだろ？」

いきなり当てられたので少し驚いた。やっぱり毎回毎回失敗するのはあからさまだったか？

「いいえ、全て真剣にやつてますよ？だからトップ10に入る成績を維持出来るんですから。」

正直に言う必要は無いので惚ける。

「それにしては一度も満点や術を一回で成功させた事が無いよなあ。真剣にやつてるなら一度くらいあつてもおかしくないんじやないか？」

「中々痛いとこ突くな。

「それこそ誤解ですよ。俺は真剣に一生懸命やつた結果がこれなんですから。これ以上何を頑張れと言うんですか？」

それともこの成績だと何か問題でもあるんですか？」

逆に問い合わせ口調にする。後はこの無限ループをすれば良い。何せ特に問題無いんだからな。

「ん~…。確かに今の成績は十分優秀だから特に問題無いがな。どうも俺にはお前が手を抜いているようにしか見えないんだが？」

とイルカが俺を見ながら言つて。

しかし俺は

「手を抜くなんてとんでもない。俺は一生懸命やつています。それを疑われるのは心外ですね。」

とあくまで惚ける。

それを聞いてイルカも何を言つても無駄だと悟つたのか

「…はあ。もう分かつた行つても良い。」

折れた。

ようやく終わりかと職員室を出ようとしたら

「でもなカズト。世の中にはどんなに頑張つても出来ない奴等もいるんだ。

だから本当はもつと出来るのこづかと出来ない振りなんてそいつらに失礼だぞ？」

と道徳的な事を言つてきた。

確かに教師としては素晴らしい説教だが俺にはウザつたいだけだ。

「先程も言いましたが、俺は俺なりに精一杯やっています。」

と言い放ち、職員室を出た。

この俺に説教をかますとはスゲエな。

幾つもの世界を体験し、好き勝手に生きてきた俺に「他人の事も考えろ。」とは素晴らしいお言葉だな。

しかし残念ながら普通のオリ主なら多少考え方を変えるかも知れないが、俺は小搖るぎもしない。

あの程度で変わらる考えなら今まで生きてこれなかつただろう。

初めは戦乱の世界、次は魔法世界、その次は人外魔境、そして今は忍者の世界だぜ？

道徳なんて考えてたらとっくの昔に死んでるか心が壊れて自暴自棄になる。

初めから無かつた氣もするがな。

実戦経験を得るために岩以外の国にも侵入して国境警備の忍と戦つてた。

木の葉だけ何も無いと怪しまれるから木の葉にも侵入して多分中忍の忍を殺つた。

国境を越えられ、更に警備の忍も殺されるという不祥事は勿論隠されたが、上層部や他国では公然の秘密となつていて、国境警備の人數を増やしたり上忍などレベルが高い奴等を警備につけるようになりやがつた。

これは非常に困つた。

何せ忍5大国全てに侵入して経験を得られた。つまり実戦経験は5回しか得られていない。

最低でも10回以上は欲しい所だが、流石に上忍や大人数を相手に

するのは難しい。万が一にもバレたらヤバイ。

上忍と戦うという経験は欲しいが、警戒心MAXの上忍とやるのはかなりの難易度だ。

恐らく戦いは長時間になり、そうなつたら相手は増援を呼ぶだろう。目撃者が増えるのは避けたい。

最悪、能力でサイレントキリングすれば良いんだが、その場合一撃で全員を決めないと逃げられる可能性が高い。

大技はまだ会得していないから大人数を一撃で仕留めるのは至難の技だ。

……いや？ いっそ上忍に積極的に仕掛けるか？

体術や忍具から忍術戦に変えれば相手も忍術で返してくる可能性が高い。上忍ならランクAやSの忍術を知ってる可能性があるからもしかして大技をコピー出来るかも。

失敗したら速攻ずらかればリスクは少ない。

しかしこれには重大な欠点がある。

何かをコピーするには本体である俺自身が見なくてはならない。影分身では経験を得られるだけだ。

つまり俺は影分身が上忍と戦つてる所を見てなくてはならない。

『完全なる隠匿』を使えば気配や姿は認識されないが、大技をされた場合、俺も飲み込まれて死ぬ危険性が高い。

危険性が低い遠距離からの視認では大技以外のコピーが難しい。小技でも重要な術は沢山あるからな。

命の危険性が高いがリターンは運要素が強過ぎる。

どうしたものか……。

5大国の侵入者警戒が強まってから1年。

11歳になり、アカデミーでは5年生になった。

あの後考えた結果、やはり5大国に再び侵入して上忍と戦うのはあまりにリスクが高すぎるとして却下。

代わりに援軍は来ず、殺つても問題の無い奴等である抜け忍や、強力な戦力は少ないのであらう小国に侵入して経験を得る事にした。

抜け忍を見つけるのはかなりの手間がかかる。

何せ簡単に見つかるなら既に追い忍に殺られてるからな。

木の葉の暗部の資料などで大体の位置は特定出来るが、そこから見つけるのは至難の技だ。

変化した影分身を多數放つているがほとんど見つからない。現在見つけられて殺したのはたった二人。効率悪すぎ。

だから主目標を小国に切り替えた。

滝隠れや草隠れ、雨隠れなど大戦に負けた小国は忍の数が少ないからそこまで脅威じゃない。

しかし中忍や上忍はいるから十分実戦経験にはなる。

それぞれの里で体術、忍術、幻術などなど使い分けて実戦経験を得れた。

まあ、どれも最後は皆殺しにしたけどね。

岩の時みたいに影分身で相手を取り囲んで押さえつけて全方位から槍や刀で影分身ごと突き刺して殺したり、『完全なる隠匿』を使って潜んでた影分身で暗殺したりなど田撃者は皆殺しにした。おかげで大陸中で

「各里を襲い、国境警備の忍を次々殺して回つてゐる奴、もしくは奴等がいる。」

つて噂にまで発展したからな。

しばらくは大人しくしてよう。

アカデミーでは本格的な忍術実習をするようになつてきた。何日も山に籠つたり、体術や忍具の扱いを詳しく教えるようになつたし、忍術では分身などアカデミーでは高度な術も教えるようになつた。

しかし面倒なのも増えた。

例えば、体術の時間では勝ち抜き方式の試合とかが多くなり、原作組と戦う事もしばしばだ。

ほとんど楽勝に勝てるけど、一つだけ面倒があつた。

うちはサスケだ。

サスケは溢れんばかりの才能を生かしてこの試合でも連戦連勝をしているが、そのサスケとかち当たる事になつた。

幾ら強いとは言つても所詮下忍レベルだから軽く倒せるが、コイツを倒すと一気に注目度がハネ上がるから勝つ訳にはいかない。

そのため、適当に相手してワザと蹴られて終了。

ワザと負けるつて結構難しいんだよな。

あまりにも手を抜くとこのプライドの塊はキレて「本気を出せ……」とか言い出すだらうし。

だから何回かサスケに当たるような攻撃を見せたりして誤魔化してから攻撃を食らう。

ここで殺しておけば俺のストレスは減るが、代わりに追われる身に

なるから我慢して負けてやる。

それなのに「キャーー、サスケ君スゴーイ！！」という女子の声援に「ふつ。」と軽く答えるその顔をえぐりたくなつたが我慢だ。

「惜しかつたな。」や「次やれば勝てるぞ。」など慰めてくれる友人達の元に行き、サスケの無双を見学する。

結局サスケは無敗のまま授業を終えた。

途中でナルトが乱入してサスケに襲いかかつたが、軽くいなされて床に沈められた。

飽きないねお前。

勝負しかけるならちやんと努力した後に行けよ。だから成長しねえんだよ。

親父が国境警備につく事になつた。

親父は上忍だからな。警備強化のために駆り出されたらしい。

しばらく家には帰らないと母親は俺につげた。

「これは秘密の話なんだけどね。最近大陸中の里で襲撃事件が頻発しているらしいの。

襲撃犯達は国境警備の忍に襲いかかり、皆殺しにしてるんだって。だから国境警備の強化のためにお父さんも呼ばれたの。

無いとは思つけど、カズト、絶対に国境付近には近付いちゃダメよ

？」

母親が注意してきた。ていうかそれって一応極秘事項だろ？·いくら息子とは言え、喋つて良いのかよ。

「ああ、大丈夫。絶対近付かないよ。」

と笑顔で言う。

元凶が襲われる訳ねえだろ。

いつそ親父を狩るか?とも考えたが騒ぎになるし、葬儀も面倒だからやめた。

まだこの生活を崩す気は無い。少なくとも後1年は。

## 1.1 原作開始（前書き）

いよいよ原作へ介入です。  
ここから北郷は空氣になります。

更に1年が経ち、12歳となり、原作開始のアカデミー最終学年になった。

アカデミー卒業式前日、原作通り歴代火影の顔面に落書き事件が発生した。

ていうかよくやるな…。

あんな高い所からロープで固定しているとは言え、平氣で落書きをするというのはそれなりに勇気が必要だ。

チャクラで筋に張り付いてる訳でも無いのにやるのはある意味で賞賛物だ。

しかしその勇気は称えられず、イルカに捕まり、現在は教室にて同学生徒全員から呆れられた目でナルトは見られてる。

「明日は忍者学校の卒業試験だぞ！！

お前は前回もその前も試験に落ちてる！！

外でいたずらしてるとかや二バカヤロ――――！」

もう何回目か分からぬが何時も通りイルカがナルトに説教をかます。

しかしナルトは「はい、はい。」と軽く返すだけ。

イルカはナルトのその態度が頭に来たのか

「今日の授業は変化の術の復習テストだ！！全員並べ――――！」

と理不尽な抜き打ちテストを開始した。

勿論生徒達は「え――――――！」と抗議するが

「先生そつくりに化けること――！」

イルカは無視して早く並べと促す。

生徒達も納得いかないが仕方ないので全員並ぶ。

生徒達は次々変化を成功させていく。まあ変化なんてかなり前に習つた術だから出来なきゃヤバイしな。

勿論俺も軽く成功させ、席に戻つて終わつてない奴等の見てる。

「次！うすまきナルト。」とナルトの番になる。

「お前のせいだぞ！！」とか後ろの奴等から愚痴られるがナルトは「知るかよ。」と返すだけ。

そしてナルトは印を結び「変化！！！」と術をかけたらイルカではなく、全裸の女性に化けた。

それを見てイルカは鼻血を出し倒れる。

確かに面白い術だけどそこまでか？まあ個人の好みがあるが、俺は全く何とも思わなかつた。何か中途半端だしな。

「ギャハハハ！！名づけておいろけの術！！」

とナルトは術を解いて得意気に言つ。

しかし起き上がり、ティッシュを鼻に詰めたイルカは

「この大バカもの――！勝手にくだらん術を作るなつ――！」と激怒。結局ナルトはまた説教を食らう羽目になつた。

1日経ち、遂に卒業試験の日になつた。

「……で、卒業試験は分身の術にする。呼ばれた者は一人ずつ隣の教室にくるよ。うに。」

イルカが試験科目を発表する。

生徒達は次々呼ばれて、隣の部屋に入り、分身の術を見せる。

出てくる者達は全員合格の証である木の葉のマークが入つた額当てをして喜んでいる。分身の術だからな。普通に授業を受けていれば楽勝だろう。

「次！北郷カズト。」

俺も呼ばれたので隣の教室に入る。

「よし、じゃあ分身の術をやれ。」

イルカが言つてきたので「分身の術。」と軽く言つて3体の分身体を出した。

「よし、合格！」

おめでとう。」

と額当てを渡された。

「ありがとうございました。」

と頭を下げる教室に戻る。

教室の中では互いに額当てを見せ合つて盛り上がりっていた。そんなに嬉しいか？

たつた12歳で軍人にさせられたんだぜ？

まるでジハードのために戦う少年兵の集まりに見えるな。

卒業試験が終わり、我が子の合否を待つていた親の元に生徒達は行く。勿論俺も。

いらないと言つたんだが「カズトのせつかくの晴れ姿を見ない訳にはいかないわ。」と俺の母親も来ていた。

「良くやつた、さすがオレの子だ……」とか「卒業おめでとう……！ 今夜はママごちそう作るね……！」とか周りでは我が子を親達が祝福している。

俺の母親も「おめでとう、カズト……！」と喜んでいる一人だ。

そしてこの光景を少し離れた木に吊るされたブランコに乗りながらナルトが聞いていた。

「ねエ、あの子……。」

「例の子よ。一人だけ落ちたらしいわ！」

「フン……いい気味だわ……。」

「あんなのが忍になつたら大変よ。だつて本当はあの子……。」  
などなどヒテエ事をわざわざ聞こえるように言つてゐる。正に人間らしい行動だな。

ちなみに俺の母親も「カズト、あの子を見ちゃダメよ。汚らわしい。」と中々辛辣な事を言つてゐる。

これで原作ともおさらばだ。

多分俺は前半のモブ達で構成される班に配属されるだろうからそれで不合格になれば良い。どうせ7班から前は合格しないんだからな。後は中忍試験までまたアカデミーでのんびり過ごしてれば良い。木の葉崩しが起きればかなり混乱するだろうから死を偽装するのは簡単だ。

国境を越えて他国に逃げるなり別の大陸を目指すなり後は自由だ。

その後、忍者登録書を作るために証明写真を撮り、提出する。勿論普通にな。誰かさんみたいにとんでもないマイクやポーズをするような事は無い。

そして遂に説明会。

教室にはやはりナルトが額当てをつけて座っていた。原作通り多重影分身でもやつたんだろう。にしても多重影分身をあんなに早く会得するつてマジあり得ない。主人公様は素晴らしいですね。

ちなみに現在その主人公様はうちはサスケの目の前に座り込み、ガ

ンつけあつてゐる。そこまで近付くのはスゲェな。

そして更に前の席の奴に押されてサスケとキスをするとこいつトロウマも受けた。

更にそのあと春野サクラにボコられるといつ悲惨っぷり。正に漫画だな。

「今日から君達はめでたく一人前の忍者になつたわけだが…。

しかしあまだ新米の下忍。本当に大変なのはこれからだ。」

イルカ先生による最後の講義が始まった。ちなみにナルトはまだダウンしている。

「えーー…。これから君達には里から任務が与えられるわけだが、今後は3人1組のスリーマンセルを作り…各班ごとに一人ずつ上忍の先生が付き、その先生の指導のもと任務をこなしていくことになる。」

そうそう、スリーマンセル。つまり3人で1グループ。だから既に決まっている原作グループに入る事は無い。改めて安心だ。

「班は力のバランスが均等になるようこっちで決めた。」

イルカの宣言に「えーーーー！」と苦情が来るがイルカは受け流し、班の発表をする。

1班、入つてない。2班、入つてない。3班、入つてない。

あれ、6班まで終わつたけどまだ呼ばれてない。

もしかして俺だけ1人で1-1班とか？まあそれでも良いけど。

もしかして原作組に入れられる事は無いよな？それが7班だつたら最悪だ。

あの班は下忍のグループなのにランクAの任務をやらされたりしてあり得ないんだからな。

普通の奴等なら速攻死んでる。

「じゃ、次7班。

春野サクラ…うずまきナルト！」

その言葉にナルトは歓喜の声を上げている。

しかし今の俺はそれを見る余裕は無い。何としても7班には選ば

れたくない。最悪7班以外ならどこでも良い。とにかくアイツ等と一緒に嫌だ。

「それと…うちはサスケ。」

よし、それで終れ！！終わってくれ！！お願いします。誰でも良いからお願いします。そのまま次の班に移つて下さい。

いつの間にか俺は祈りのポーズをしていた。端から見れば7班に入りたがって祈つているように見える。

「そして北郷カズト。」

……終わった……。

ガックリとして机に頭をぶつける。

ドンッ！！！というテカイ音が教室に鳴り響いて全員が机に頭をぶつける俺を見る。

「…どうした？カズト。」

イルカが聞いてきた。諸悪の根源の癖に。

俺はゆっくりと頭を上げて

「何故7班だけフォーマンセルなんですか？確かに木の葉はスリーマンセルが決まりなのでは？」

せめて理由を…。それ次第ではまだ回避出来るかも知れない。

「まあ、卒業生が全員で28人で一人余ったからどうしようかと悩んでいたら、成績が一番ドベのナルトに常に一番の成績であるサスケと座学ではサスケと同率1位のサクラ、そこに常にトップ10位以内に入っていたお前を入れれば丁度良いかな？と判断したからだ。

確かにそれならバランスが取れるかも知れない。

トップのサスケとドベのナルトでは差がありすぎるからそこにサクラを入れて、全体的なバランスを取るために安定した成績を持つ俺を入れたって訳か。

何てイレギュラーだ。こんなんだつたら俺もドベの振りをすれば良かった。そうだったらナルトの班には入らなかつただろうに…。

俺が世の中の理不尽さを嘆いていたら班の発表を終わり

「じゃ、みんな午後から上忍の先生達を紹介するから。それまで解散！」

イルカの解散宣言が聞こえたのでとりあえず教室を出て森に向かった。

周りに誰もいないことを確認してから

「チキショウ！…！」

太い木を思いつきり殴り倒す。

「こんなイレギュラーは始めてだ……。

キルアを引き取った時も焦ったが、今回は比較にならない。

……何でよりによつて原作組。更に7班…。俺に死ねつてか？「しばらく気分直しに周りの木々をなぎ倒しながら何かを罵倒する。何に文句を言えば良いか分からないからな。

よしよし、段々と落ち着いて来た。

取り乱すな、まだ終わつた訳では無い。

ザブザと大蛇丸の襲撃を何とか突破すればまだ可能性はある。スゲエ難易度上がつたが…。

とりあえずは明日の試験のことを考えよう。

あの試験内容では俺が足引つ張りまくつても多分合格するだろ？。

ただ単純に弁当食わせれば良いんだからな。

だつたら素直にやれば良い。

力は下忍レベルに落として鈴取りしよう。別に取れなくても良いしな。

意外に不意をつけば結構やれそうだけど。

飯を食い終わり、どうせ力カカシは遅刻するだろ？が待つてないとおかしいので時間通り教室に戻った。

次々と他の班の担当上忍達が来るのにつづいて、班の担当上忍だけはいつこうに来る気配が無い。あんまりにも暇だから俺は読書中だ。しかし他の3人は何も持ってきて無いのかイライラしながら待っている。

「ナルトー！じつとしどきなさいよーー！」

扉を開けて廊下を見ているナルトをサクラが注意する。

「何でオレ達7班の先生だけこんなに来んのが遅せーんだってばよオー！」

ナルトはイライラが限界に達したのか大声を上げる。

気持ちは分からなくは無いがな。

ていうか忍が時間に遅れるつてあり得ないだろ？任務の時は違うと願いたい。

「ほかの班はみんな新しい先生とどつか行つちまつたし、イルカ先生は帰つちまうし！」

周りをイライラしながら見ていたナルトが黒板消しを見て名案を閃いたみたいに笑う。

「ちよつとーー！何やつてんのナルトーー！」

扉に古典的な黒板消しトラップを仕掛けているナルトをサクラが注意する。

「ニシシシ。遅刻して来る奴がわりーんだつてばよーー！」

仕掛けが完了してナルトはやや満足気。

「私！知らないからねーー！」

サクラは優等生的な発言をしているが止めない事から楽しんでいる

事がわかる。

「フン。上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ。サスケはぐだらなそうに見ているだけ。俺は読書を続けてスルーしていた。」

少し経ち、カカシが扉に手をかけ、扉を開いたら黒板消しが見事頭に命中した。あんまりにも出来すぎぎてワザとらし過ぎ。

「ぎやははは！」

引っかかった！…引っかかった！…

それが分からぬナルトは指を指しながら爆笑している。

「先生、ごめんなさい。私は止めたんですがナルト君が…。」  
サクラはしおらしい演技をしてナルトに全責任を押しつける。ヒテエ女だ。

サスケはカカシがあんまりにも簡単に引っかかったから疑わし気にカカシを見る。

「んーーー…なんて言つのかな、お前らの第一印象はあ……嫌いだ！！」カカシが嫌い宣言をする。周りの雰囲気が陰鬱なものになる。そりや2時間以上遅刻されればトラップも仕掛けたくなるものだ。俺も起爆札が発動するトラップを仕掛けるか悩んだしな。

カカシに連れられて外に行つた。

「そうだな…まずは自己紹介してもらおう。」

「…どんなことを言えばいいの？」

「そりやあ好きなもの嫌いなもの…将来の夢とか趣味とか…ま…そんなんだ。」

「あのさーあのさーそれより先に先生、自分のこと紹介してくれよ！」

「そうね…見た目、ちょっと怪しいし。」

カカシはナルトとサクラから悲惨な評価を受ける。確かに理由が分からぬ奴は片目を隠してるのが変に見えるしな。

「あ……オレか？」

オレは「はたけ・カカシ」って名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！

将来の夢…って言われてもなあ…。まー趣味は色々だ……。  
自己紹介と言えるか疑問な紹介をカカシは言つ。まあ面接を受ける訳じゃないからな。

「ねエ…結局分かったの……名前だけじゃない?……」

サクラが言つ。忍に詳しく自己紹介をされても困るだけだと思うがな。

「じゃ、次はお前らだ。右から順に。」

俺は左端に座つてるので最後か。

「オレさー！オレさー！名前はうずまきナルト！」

好きなものはカツチラーメン。もっと好きなものはイルカ先生に��拶つてもうつた一樂のラーメン！嫌いなものはお湯を入れてからの3分間。将来の夢はア、火影を超す！…ンでもつて里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ！！

趣味…はイタズラかな

無理だと思うがな。

九尾に親類や友人を殺された奴等はどうあつてもお前を憎むだろ？  
そうすれば楽だからな。

多分ナルトが認められるのは死んだ後だらう。

「次！」

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが好きなものは別にない。

それから…夢なんて言葉で終わらす気はないが野望ならある！一族の復興とある男を必ず…殺すことだ。」

格好つけてるつもりなのかわざわざ言つ。

別に言う必要無いことと思うが?

「よし、次。」

「私は春野サクラ。好きなものはあ……ってゆーかあ、好きな人はえーとお……将来の夢も言ひちやおつかなあ……」

「キヤーーーーー！」

非常にウザい。なんなら今言えば100%断られるだろ?から。

「嫌いなものはナルトです！」

それを聞いてナルトはガックシする。それを無視してサクラはサスケを見ている。

「趣味はあ……」

何で「トイツ忍者になつたんだろう?

普通の家庭に生まれたんだから普通に暮らしセヨ。出来るなら家を交換して欲しい。

そうすれば忍者になんかなりずにまだガキらしく遊び惚けられたの!」

「よし……じゃ最後。」

「俺の名前は北郷カズト。」

好き嫌いは色々。将来の夢は……じゃあ上忍になるつてことで。趣味は……読書で良いや。」

恐ろしく適当な自己紹介をする。嘘は言つて無い。一応上忍(並みの強さ)を田指してるし読書も好きだ。

「何か……えらく適当だな。」

カカシが呆れている。周囲も呆れた田で俺を見ている。

「貴方に言われたくはありません。」

「よしー自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるだ。」

カカシが話を打ち切り、別な話題に転換させた。

「はつ、どんな任務でありますか！？」

ナルトがわざわざ敬礼して聞いてくる。そんなに任務がやりたいか？俺は一生したくない。

何で12で働くかなくちゃならないんだよ？就労年齢低すぎ。

「まずはこの五人だけであることをやる。」

「なに？ なに？」

「サバイバル演習だ。」

カカシの言葉にナルトとサクラら不満気な顔をする。

「サバイバル演習？」

「なんで任務で演習やんのよ？ 演習なら忍者学校でさぞやんやつたわよ！」

「…。」

サスケはただ黙つてる。俺もだけビ。

「相手はオレだが、ただの演習じゃない。」

カカシの言葉に3人は「？」となるだけ。俺はぼ～っとしてただけ。

「じゃあさーじゃあさーどんな演習なの？」

ナルトの言葉にカカシは「ククク…。」と笑つて答える。

「ちょっと…何がおかしいのよ先生！？」

「いや……ま！ ただな……オレがこれ言つたらお前ら絶対引くから。」

「…。」

「引くウ……？ は？」

カカシの言葉にナルトは疑問を露にする。

「卒業生28人中下忍と認められる者はわずか10名。残り18名は再びアカデミーへ戻される。」

この演習は脱落率66%以上の超難関試験だ！」

やつぱり俺がいる分人数が増えてるな。

俺はその18人に入りたいよ。棄権とか無理かな？ 無理だろうなあ。3人は唖然としている。俺はただ無言なだけ。

「ハハハ、ホラ引いた。

カカシは満足気。  
俺は普通にしてただけなんんですけど。

「とにかく、明日は演習場でお前の合否を判断する。忍び道具一式持つべき。

それと朝めしはぬいて來い……吐くぞ！

くわしい」とはプリントに書いといたから明日遅れて来ないよーに

「アーヴィング、アーヴィング、アーヴィング！」

「吐くつて！？そんなにキツイの！？」

サクラが頭を抱える。確かにやりようによっては吐く可能性があるな。目的は全然違うが。

翌日、プリントに書かれた通りの時間に全員集合したが、やはりカカシは来ない。

3人共張り切つていたのかカカシの遅刻にイライラしている。  
俺はまた読書。ちなみに朝食は普通に食つてきた。

じばりへじて

タルそうに歩きながらカカシがやつて来た。

おもてなし！」

ナルトとサクランボは怒鳴る。あんだけ時間に遅れるなつつて、といでこの大遅刻だ。腹も減つてゐるだろから相乗効果で倍ムカつくなつう。

少し移動した後

「よし！ 12時セツトヨタ！」

カカシが目覚ましをセットしていた。

3人は何がしたいのか分からぬから「？」を浮かべる。

「ここにスズが3つある…。これをオレから昼まで奪い取ることが課題だ。

もし昼までにオレからスズを奪えなかつた奴は昼メシぬきーあの丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当を食つから。」

4つの丸太を指差しながらカカシは言つ。

3人の腹がぎゅるるる。と鳴る。俺のは鳴らなかつたけど3人に紛れて分からなかつたのか誰も突つ込まない。

「スズは一人1つでいい。3つしかないから…必然的に一人丸太行きになる。

「で！スズを取れない奴は任務失敗つてことで失格だ！つまりこの中で最低一人は学校へ戻つてもらうことになるわけだ…。」

3人の顔に真剣な色が浮かぶ。そんなにアカデミーに戻るのが嫌か？仲間が沢山いるつてのに。

「手裏剣も使つていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな。」

カカシの言葉は最もだが、世間知らずのサクラは「でも…危ないわよ先生…！」

と言う。

「そう、そう！黒板消しもよけられねーほどドンくせーのにイ…！…本当に殺しちまうつてばよ…！」

ナルトも追従する。

「世間じゃさあ…実力のない奴にかぎつてホエたがる。ま…ドベはほつといてよーいスタートの合図で…」

ドベと言われた事が余程腹が立つたのかナルトはクナイを取り出し、カカシの方に投げようとしたが、その前にカカシに後ろを取られ、手と頭を拘束されて逆に自分の頭の後ろにクナイを向けられた。にしてもたかだかドベつて言われたぐらいで殺しにかかるとはビデエな。倫理観はこの世界には無いのか？

「そうあわてんなよ。まだスタートは言つてないだろ。」

あまりの早さにサクラとサスケは驚く。確かに下忍に反応出来る早さじゃないしな。

俺なら多分避けられただろう。絶対とは言えないがな

「でも、ま、オレを殺るつもりで来る気になつたようだな…。やつとオレを認めてくれたかな？」

ククク…なんだかな。やつとお前らを好きになれそつだ…。  
…じゃ始めるぞ！…よーい…スタート！！！」

カカシの合図に一斉に散る。

完全に隠れると不自然だから調整して下忍に出来る範囲で気配を消す。

「こぞり、尋常に勝………負…！」

何故かナルトはわざわざ出てきた。お前は侍でも目指してんのか？

「しょーぶつたらしょーぶ…！」

ナルトはまだ言つ。

「…………あのセア…お前ちつとズレとるのオ……。」

カカシが呆れている。忍びが正々堂々と勝負なんてあり得ないからな。

「ズレてんのはその髪型のセンスだろーーーー！」

ナルトがカカシに突つ込んで行くとカカシはポーチに手を入れた。

「うつ…」

それを見てナルトは止まる。

「忍戦術の心得その1、体術！！…を教えてやる。」

そう言いながらカカシはポーチから何かを取り出す。

イチャイチャパラダイス中巻と書かれた本を読み出した。

「！？」

ナルトはまさか本だとは思わなかつたのか停止状態。

「…………どうした早くかかつて来いつて。」

カカシが言つた

「でもあのせ?あのさ?なんで本なんか?」

ナルトが聞くと

なんでもう本の続きを読まなくなつたからだよ。

別に氣にすんな……。お前らとじや本読んでも関係ないから。」

「ボクがボクらしくなるまで」

と思いつきり振りかぶつて殴りにかかるが軽く防がれる。

卷之三

「アーチーのアーチー」

アーティスト用語集

か後ろを取られる。

「忍者が何度も後ろ取られんなバカ」

! !

サクラはわざわざ姿を表してまでナルトに敬告する。

一ノ、其後の三表の返事の三

「遅い！」

カカシが指を組んだまま突き出し

ノ葉隣村種代代行奥義  
二年殺し

うな。

ナルトは川に落ちた。そんな威力だつたらケツの穴が壊れて内蔵も  
イカれてるんじやないか？

しかし水中から手裏剣が一枚出てきてカカシを狙う。どうやら無事

らしい。

その手裏剣は本をみて笑つてゐる力カシに軽く取られた。

少しした後にナルトが川から上がりってきた。

「ゲホ！…ゲホ！」

「ホラどうした。昼までにスズを取らないと一人だけ昼めし抜きだぞ。」

力カシがナルトに近付く。

「ンなの分かつてるつてばよ…！」

「火影を超すつて言つてたわりに元氣ないねお前…。」

力カシの挑発に

「くつそ！くつそ！腹がへつても戦はできるぞ…！」

ナルトが精神論を述べる。

「さつきはチット油断しただけだつてばよオ…！」

「世間じや油断大敵つて言うんだよね。」

力カシがナルトに背を向けて歩く。

その瞬間、川から7人のナルトが出てきた。

「ん？」

力カシが軽く反応する。

「へへ――ん！…お得意の多重影分身の術だ…！油断大敵！今度は一人じゃないつてばよオ…！」

ナルトが自信満々に言い放つ。

「ん！分身じやなくて影分身か…。残像ではなく実体を複数作り出す術…。」

お前の実力からしてその術、1分が限界つてところだろ…。御託ならべて大見得切つたつてしませんナルト…まだその術じやオレはやれないね。」

力カシが冷静に分析してゐる途中に力カシは後ろから衝撃を受けた。後ろを見るとナルトの影分身が力カシを押さえつけていた。

「な…なにイ…！…後ろ…！…？」

「へへ…忍者ってのは後ろ取られちゃダメなんだろ…カカシ先生つてばよオ！！！」

ナルトが勝ち誇った顔で言う。

「影分身の術で一人だけ川下からここへそり上がりつて裏手に回り込んでいたんだってばよ！」

…さつきケツやられたぶん！せつかくだからここへ一発…なぐらせてもらひつてばよ！！」

ナルトが思いつきり振りかぶつて殴つたのは同じナルトだった。

「いつてエーーーーー！」

殴られたナルトは倒れこむ。

「お前つてばカカシ先生だな！変化の術で化けてんだろ！！」

主人格？のナルトが言う。

「お前こそー」「イヤー！お前だ！」「オレじやないつてばよー」「お前、先生と同じオヤジの臭いすつぞー」「するかあーーー！」

などなど言い合い、殴り合つ。

少し経つた後に

「あのさーあのさーとりあえず術といてみるつてば。そしたら一人になる…。それで分かる。」

ナルトの一人が提案する。

「あ！もつと早く気づけバカ！」

「お前はオレだバカ！」

ボンッ！術を解いたらナルト一人だけだった。  
ちょっとナルトの背中に哀愁を感じた。

よし、そろそろ動くか。

俺は気配を消しながらサクラに近付く。

「サクラ。」

俺に全く気がつかなかつたのかビビりまくつてサクラは後ろを見た。

俺と分かつてホツとしたのか

「何だカズトかア、驚かせないでよ。」

「悪いな、ところで協力してスズ取らないか?」

「協力?」

「ああ、さつきの見た限り1人だとキツイから協力して取りに行こうぜ。」

俺の協力要請にサクラは

「ゴメン、私サスケ君と組みたいんだ。」

断られた。

「でもサスケの居場所分かるのか?」

「ううん。でも見つけてみせる。そうすればスズも取れるはず。だつてサスケ君はアカデミーNO.1だもん!」

どこから来るか分からぬがサスケに絶対的信頼感があるらしい。仮にサスケがスズを取れてもお前の分まで取ってくれると思えないけどな。

これ以上何を言おうがサスケ君なら大丈夫!という宗教まがいの信頼感を見せられそうだから素直に引く。

「そうか、分かつた。幸運を祈る。」

そう言つてその場を後にした。まあ、本当に協力関係を結ばれても困るしな。

一応声はかけた。という事実が欲しかつただけだ。

どうせ受かるなら受かるべくして受かりたいからな。最初から分かつていた感を出せば後々楽になる。

次はサスケだ。

サスケはさつきワザとスキを見せたカカシを襲撃したせいで居場所がバレたから移動中だ。

そこに偶然出会つたように姿を見せる。

「サスケ、無事だつたか。」

俺が姿を見せたら手裏剣を投げられかけたが俺と分かれり止めた。

「お前か…。」

若干警戒してんのはもしかして力カシが俺に化けてるか疑つてゐるのかな？

「安心しろ、俺は力カシじやねえよ。」

一応言つとく。あんまり効果は無さそうだが。

「何の用だ？」

「ああ、実はさ、俺と協力しないか？」

俺の協力要請にサスケは「協力？」と言つだけ。

「ああ、さつき見た限り力カシはかなり強い。1人だと難しいだろうから協力してスズを取ろうぜ？」

割りと友好的に勧誘したんだがサスケの返事は

「断る。」

即答だつた。

「何故？」

俺の質問に

「オレは1人でも問題無い。」

それにお前と組んだところで足手まといになる可能性がある。」

どこからその自信は生まれるのか是非解体して確かめたくなつたが我慢だ。

「いやあ、でも1人より2人の方が戦術の幅は広がるぜ？」

再度勧誘したが

「くどい。俺は1人で合格する。」

そう言つてサスケは行つてしまつた。

計画通りなんだがやつぱムカつく。

サスケの性格上、まず無理だと思っていたが案の定無駄だつた。まあサクラ同様、頷かれて微妙に困るがな。

サクラよりかは使えるが言うこと聞きそうに無いからな。精々その

自信を力カシに打ち砕かれると良いだろ。」

再び気配を消して隠れないと

「あぎやあああああああ！」

「デカイ悲鳴が聞こえた。サクラが幻術をかけられたんだろう。ざまあ見ろ。」

しばらく隠れないと今度は

「ボゴウ！！！」というデカイ音と光が見えた。豪火球の術をやつたか。」

「という事はサスケも終わつたな。」

そろそろ行くか。

力カシは弁当を盗み食いしようとしていたナルトを丸太に縛り上げた後、俺を探している。

まだ俺は何もしてないし何もされてないからな。

気配を消して隠れているがこの程度の隠蔽では簡単なのか力カシは真っ直ぐ俺のいる方角に来る。

俺はクナイを持ち、近くに仕掛けたロープを切る。

その後にデカイ丸太やクナイが飛んで来て、力カシに襲いかかる。しかし力カシは簡単に丸太を避けてクナイは丸太で防いだ。しかしクナイには起爆札が仕掛けられていてジジツという札が燃える音がした直後に大爆発して丸太ごと力カシがぶつ飛んだ。

力カシが死んだように見えるが俺はクナイを構えたまま警戒を解かない。

すると後ろから

「いやあ～～やつてくれるね。」

「無傷の力カシが出てきた。」

「そういうアナタこそ、無傷なんて傷つきますね。せめて腕が吹っ

飛んしてくれれば助かりますのに。」

皮肉を返す。

「それは勘弁して欲しいな。

：：： にしてもやり方や殺る気が下忍とは思えないな。 やつぱりお前は実力を隠していたか。」

「ほう、 どうですかね？ この程度ならアカデミー上がりでも考え… 会話途中での強襲もカカシに簡単にいなされる。

クナイを持ちフェイントをかけながらサスケより速い動きで急所を狙うが避けられる。

やつぱり下忍レベルに落とした体術ではカスリもしないな。

「避けないで下さいよ。 殺せないじゃないですか。」

攻撃を続けながら軽口を叩く。

「避けなきやお前、 完全に殺す気でしょ？ ていうか目的忘れて無い？」

「貴方が死んだのを確認した後にスズを貰います。」

カカシの首を狙つて攻撃する。

「そういう訳にはいかないのよね。」

カカシは下忍では見切れないような速さで避けて俺の背後にまわる。そしてカカシは俺を昏倒させるために首に手刀を叩き込む。しかしその瞬間ボンツという煙りを出しながら俺が消えた。

「な、影分身！」

カカシが俺が影分身を使った事にほんの一瞬だけ驚いたのを見計らつて後ろで待機していた本体の俺がスズを取つた。

「よし、 これで任務完了。」

スズを揺らして鳴らしながらカカシを見る。

「… はあ… まさかお前も影分身の術を使えたなんてね。」

カカシが呆れたような目を向ける。

「まあ、 俺はナルトみたいに8人なんて数は無理ですけどね。 1人で精一杯なんですよ。 これでも必死に努力したんですけどね。 まさ

か下忍で他に使える奴がいるなんて…。」

俺も呆れたように言つ。

「まあ、影分身の使い方とかはお前の方が優れているから良いんじゃない？」

力カシが慰めるように言つ。

「それはどうも。必死に修行しましたからね。

にしてもアイツ等が協力してくれたらもっと簡単に終わつたんだけどな。」

愚痴を溢すと

「ほう…協力しようとしたのか？」

「ええ、ていうかそれがこの試験の正解なんでしょう？」

俺の正解発表に力カシは少し驚く。

「…答えが分かつてたのか？」

「はい、普通に考えて上忍相手に下忍が個人で勝てる訳無いですかね。ワザとチームワークを乱すような条件つけてたし、ちょっと考えたら分かりますよ。」

「…確かに分かつていたらしいな。ワザとチームワークを乱したのも見抜いてるようだし。」

感心したように俺を見る。

やり過ぎかな？でもこの程度なら下忍でも十分出来るし、分かるだろ？から大丈夫だろう。

「ナルトは協力要請する前に独走して捕まるし、サクラはサスケ君と組むと聞かないし、そのサスケには足手まといと断られるし。だから最終的に自分でやるしかないからとつておきの影分身を使って自分でチームプレイをしたんですよ。何とか成功しましたけど。」

再びスズを持ち上げる。

これで合格だろ？。後はナルトに弁当食わせれば文句無いだろ？。」

「何とも…大変だつたんだな。」

力カシに同情された目で見られた。

それもこれもこの班に選ばれたくせいだけだ。俺はモブになりたかったのに今では何か準主人公的な活躍してねえか？  
やっぱり普通に戦つて負けとけば良かつたかな？

ジリリリリリリッ！！

目覚まし時計が鳴つた。

俺はカカシと共に丸太の前に戻つた。

そこには丸太に縛られてるナルトと座り込んでいるサスケとサクラがいた。

「おーおー、腹の虫が鳴つとるね…君達。

ところで、この演習についてだが、まーお前らは忍者アカデミーに戻る必要も無いな。」

カカシの言葉に合格したと思ったのか3人とも喜色の色が浮かぶ。

「じゃあさーじゃあさーってことは4人とも…」

ナルトが確認のために聞こうとしたら

「……そうカズト以外の3人とも…忍者をやめろ！」

「！？」

いきなりの勧告に3人とも絶句する。

「忍者やめろってビーグーことだよオー！」

そりやさーそりやさー確かにスズは取れなかつたけど！ていうか何でカズトだけ合格なんだよ！？

怒りのためか普段の口調を忘れるナルト。

「だつて俺、スズ取つたし。」

スズを3人に見せる。

それを見て3人は驚愕する。

「カズト、スズ取れたの！？」

サクラが信じられないようなものを見るように聞いてくる。

「ああ、と言つてもほとんど運だつたけどな。」

結構ギリギリだつたしな。カカシが驚かなければ無理だつた。

「～～つ確かにカズトはスズを取つたみたいだから合格で良いとして、なんでやめるまで言われなくちゃなんねエんだよ！！」

縛られながらナルトが暴れる。

「どいつもこいつも忍者になる資格もねエガキだつてことだよ。」カカシが言い切るとサスケがキレたのかカカシに突っ込んで行つた。しかし逆に上に乗られて頭を踏まれている。

「！－サスケ君を踏むなんてダメ－－－－！」

泣いてんのか怒つてんのか分からぬ顔をしてサクラが抗議する。それをカカシが睨み付けて

「お前ら忍者なめてんのか？あ！？」

何の為に班ごとのチームに分けて演習やつてると思つてゐ。」

「え！？…ど－ゆ－こと？」

サクラは未だ分からない様子だ。お前は頭しか取り柄無いんだからここで分からぬなんて存在価値無いぞ？

「つまり……。お前らはこの試験の答えをまるで理解してない……。」

「答え……！？」

ナルトはまだ分かつてないのか首をかしげる。

「そうだ、この試験の合否を判断する答えだ。」

「だから……。さつきからそれが聞きたいんです！－！」

サクラは何故か開き直る。

「……つたく。」

カカシが再度呆れる。

「あ～～～も～～～！だから、答えつて何なんだつてばよオー！？」

「チームワークだよ。」

俺が答えた。

「！」

3人ともその単語に反応する。

「1人では無理だが、4人全員ならスズを取れただろう……。」

「なんでスズ3つしかないのにチームワークなわけエー！？4人で必死にスズ取つたとして1人我慢しなきやならないなんてチームワークどころか仲間割れよ！」

俺の言葉にサクラが反論する。

「当たり前だ！これはわざと仲間割れするよつ仕組んだ試験だ。」カカシの言葉にサクラとナルトは「え！？」と反応する。

「この仕組まれた試験内容の状況下でも、なお自分の利害に關係なくチームワークを優先できる者を選抜するのが目的だつた。だからカズトは合格したんだ。」

その言葉にサクラとサスケは思い出す。カズトが協力関係を結ぼうと言つてきたことを。ナルトは分からぬが。

「それなのにお前らときたら……。」

…サクラ…お前は目の前のナルトやカズトじゃなく、**どこの**に居るのか分からぬサスケのことばかり。

ナルト！お前は一人で独走するだけ。

サスケ！お前は3人を足手まといだと決めつけ個人プレイ。」

各々思い当たる節があるので何も言えない。

「任務は班で行う！たしかに忍者にとつて卓越した個人技能は必要だ。が、それ以上に重要視されるのは「チームワーク」

チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、「殺すことになる。

…例えだ…

カカシがポーチへと手を伸ばし、クナイを掴みサスケの首に添える。

「サクラ！ナルトを殺せ、さもないとサスケが死ぬぞ。」

カカシの行動にサクラは動搖し、ナルトは「え！？」とビビつている。

「と…」つなる。人質を取られた挙げ句、無理な2択を迫られ殺される。

任務は命がけの仕事ばかりだ！」

カカシはクナイをサスケの首から外し、サスケを解放して立ち上がる。

サクラは嘘だと分かりホツとして、ナルトはもしかして殺されるんじゃ？と思つていたのかかなりホツとしている。

カカシは丸太の後ろにあつた石碑に近付く。

「これを見ろ、この石に刻んである無数の名前。これは全て里で英雄と呼ばれている忍者達だ。」

それを聞いてナルトが反応する。

「それそれそれーっ！ それいーっ！ ！

オレもそこに名を刻むつてことを今決めたーっ！ ！

英雄！英雄！犬死になんてするかつてばよーーー！」

ナルトが高らかに自殺宣言をした。

確かに名を刻むだけならさほど難しくは無いな。

「…が、ただの英雄じやない…。」

「へーーーえーーー。じゃあどんな英雄達なんだつてばよオーー！」

「…。

「ねえ！ねえ！」

ナルトが笑顔で聞く。

「任務中、殉職した英雄達だ。」

カカシの言葉を聞くと流石のナルトも黙る。サクラやサスケも同様だ。

「これは慰靈碑。この中にはオレの親友の名も刻まれている……。」

カカシが沈鬱な感じで言つ。

「…お前ら…！最後にもう一度だけチャンスをやる。ただし昼からはもつと過酷なスズ取り合戦だ！」

挑戦したい奴だけ弁当を食え、ただしナルトには食わせるな。」

「え？」

ナルトが言う。流石に朝昼飯抜きはキツイからな。

「ルール破つて一人昼めし食おうとしたバツだ。もし食わせたりしたらそいつをその時点で試験失格にする。

ここではオレがルールだ。分かつたな？」

それとカズト、お前はめしを食つたら帰つて良い。明日から任務だ。

「そう言い、力カシは瞬身でどつか行つた。

「へつ！オレってば別にめしなんか食わなくつたってへーきだつ…」

強がりを言つてる途中でぎゅるると腹の虫が鳴く。

サクラやサスケが飯を食つてる最中に俺は包みを開け、ナルトに差し出す。

「！」

ナルトとサクラが反応する。サスケはどうしようか迷つていたようだから別に驚いていない。

「ちょ…ちょっとカズト！さつき力カシ先生が…！」

サクラが止めに入るが。

「さあ、俺はダメなんて言われて無いし、それにこれで失格になつたらまたスズを取るさ。

それに、これもチームワークだろ？」

さつさと帰りたいので手早く終わらせる。普段の俺なら死んでも使いそうに無い言葉だ。

「…そうだな。今はアイツの気配はない。昼からは全員でスズを取りに行く。」

サスケも弁当をナルトに差し出す。

それを見てサクラは弁当を名残惜しそうに一警し、ナルトに差し出す。

それを見たナルトは笑顔で  
「へへへ、ありがと……。」  
と礼を言つ。

さあ縄を切ろうとしたらボン……と田の前にトカイ煙りが上がり  
「お前らああああ！」  
カカシが大声上げながら出てきた。  
「……」、「うわあああ……」、「きやああああ……」、「……」  
各々声を上げる。俺は無言だけど。  
そしてカカシが近付き笑顔で「うーかつくー」と言つ。  
「えー？」、「は？」、「……。」、「……。」  
全員固まる。

「合格！？なんで！？」

サクラが聞くと

「お前らが始めてだ。

今までの奴らは素直にオレの言つことをきくだけのボンクラどもばかりだつたからな。

……忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴らはクズ呼ばわりされる。

……けどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ。」  
じゃあ俺はクズ認定か？ヒテエ。

ただ自分の命を最優先してるだけなのに。

「アハ……。」、「……。」、「フン……。」、「……モグモグ。」

サクラは喜び、ナルトは呆然、サスケは知つてたかのような態度を取り、俺は弁当を食つてる。だつてこの後帰るだけだし。

「これにて演習終わり、全員合格！！

よオーレイ！第7班は明日より任務開始だア！！」「

カカシがサムズアツ普しながら決め台詞を言つてゐる。

や、たああ、ではよお！！！オレ、忍者！忍者！！忍者！！！」

「唯恐」。

卷之三

11

ナルト

ナルトが絶叫している。五月蠅いのて放置しようとでも思つたがそ  
の方が五月蠅いから縄を切つてやつた。

セシル・オバヤハの前に現れた女は、一見して

ナルトは喜びながら3人の下に向かう。

終へたか…

おおきなおおきな等に如田舎を出だかに目にさする方

次は波の国か…。いきなり死亡フラグじやん。

正式に下忍になつて数日経つた。

現在は広大な山に逃げたペットを探すという非常に面倒な任務の途中だ。

ていうか山に逃げたんなら諦めろよな。飼い主の責任だろ？

なんで俺等が半日以上かけて山の中探ししまわんかやならん。

『目標との距離は？』

無線機から力カシの声が聞こえた。たかだかペット探しに無線機なんて必要か？

『5m！ いつでもいけるつてばよ！』、『オレもいいぜ』、『私も』

、『…俺も』

一応返事しどく、別に4人も待機する必要は無いと思つが？

『よし！ やれ』

力カシからの捕獲命令が出たので全員で一斉に猫に襲いかかる。

『うりやああ！！

つつかまえたあ―――つ―――！』

ナルトが右耳に不自然にリボンがついているネコを捕獲した。

『ニヤ―――！』

ネコは必死に逃げようとする。余程帰りたくないのだろうか…。

『右耳にリボン…。目標のトラに間違いか？』

力カシが念のため聞いてくる。

『ターゲットに間違いない。』

それにサスケが答えた。

『よし、迷子ペット「トラ」捕獲任務終了！』

力カシが疲れたような声で告げる。力カシがやるような仕事じゃないからな。

そこには地獄があつた。

「ああ！私のかわいいトラちゃん。死ぬほど心配したのよオ～。

トライの飼い主のいかにも中年女性のよつやなマダム・しじみにてトライは頬擦りされてる。

ん――… 老中様のほひねやんの手仕事に隣町までのおつかい、イ

モホリの三侯いか……」

イモほりやおつかいはまだしも、子守りは勘弁してくれ。ガキの世

詰なぐかして泣かれたの岡にて泣き止ませを

ホントにビビる奴だ、この奴がH=任務がやつてのH=のH=

! ! !

ナルトがケチつける。

たかだか下忍の分際で火影に反論するなんてあり得ないんだけど。  
ていうか任務を拒否できる忍者なんかいねエし。

「バカヤローーーー！お前はまだペーぺーの新米だろーが！

「誰でも初めは簡単な任務から場数を踏んでくり上がってくんだ！」

「だつてだつて！」の前からずつとショボイ任務ばつかじゃん！！

「いいかげんにしとけ、リリーブル。

流石に力カシが止める。殴つてだが。まあ、体罰が普通の世界だか

ら特に問題無い。

その後は火影が任務の大切さやランクについて教える。そんなのア

カーテニーの時に教えとけよ。

「分かつた。お前がそこまで言つならCランクの任務をやってもらう。

「ある人物の護衛任務だ。」

「遂に初めての死亡フラグが来たか。出来るならやりたくないが立場上拒否など不可能だ。」

「だれ？だれ？大名様！？それともお姫様！？」

ナルトはワクワクしながら聞く。そんなにやりたいのか？

国家存亡をかけたSランク任務を……。

「そう慌てるな、今から紹介する！入つてきてもらえますかな……。」

火影が声をかけると扉を開け、酒瓶片手の両腕が傷だらけの老人が現れた。と言つても足腰はしつかりし、肌も若々しく筋肉もそこそこある。

「なんだア？超ガキばっかじゃねーかよ！」

メンバーが不満なのか酒を飲みながら俺等を見る。

「…とくにそこの一番ちつこい超アホ面、お前、それ本当に忍者かあ！？お前エ！」

「アハハ、誰だ？一番ちつこいアホ面つて……。」

ナルトが俺達を見る。ちなみに俺は一番背が高い。

そして自分が一番低いと分かつたナルトは

「ぶつ殺す！……！」

依頼人に突進しようとしたが

「これから護衛するじいさん殺してどーするアホ。」

カカシが襟を掴んで止める。

「わしは橋作りの超名人、タズナというもんじやわい。

わしが国に帰つて橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛してもらう！」

「ランク分の報酬しか寄越さね癖に偉そうに。てめえの娘でも売つて依頼料稼いで来いよ。

各自一旦家に帰り装備を整える。

両親にも「任務で里を出る。しばらく帰れない。」と伝えた。  
まあ、両親共忍者だから「分かった、注意するんだぞ。」ぐらいで  
終わつた。もう少し心配しろよ。

これから中忍や上忍と戦いにいくんだぜ?

旅行用のカバンに着替えや食料、嗜好品などを積める。

コピーを使えば荷物なんかいらないけどバレるからちゃんと必要な  
道具を積める。

荷物を持つなんて久しぶりだな。

そして門に向かう。既に全員いたので驚いた。まだ集合時間前な  
に。

「出発——っ！」

ナルトがハイテンションで叫ぶ。

「何をはしゃいじゃつてんのアンタ。」

サクラが白けた目を向ける。

「だつてオレつてば一度も里の外にでたことねエーからよ。」

ナルトは辺りをキヨロキヨロしてゐるまるでお上りさんだ。まあ、お  
前が里から出れる訳無かつたからな。ある意味歩く戦略兵器だし。  
「おい！……本当にこんなガキで大丈夫なのかよオ！」

タズナがナルトを見て不安がる。何せ忍に命を狙われてゐるのに護衛  
がこんなガキ丸出しだからな。

「ハハ…上忍の私がついてます。そう心配いりませんよ。」

カカシは責任者として依頼人を安心させる。大変だよね大人つて。

しかしそんなカカシの苦労が分からぬナルトは

「コラ、じじい！あんまり忍者をなめんじゃねエーゼ！

オレってばスゲーんだからなあ！」

根拠の無い自信を見せるナルト。

「いざれ火影の名を語る超エリート忍者…名をうずまきナルトという！－！覚えとけ！－！」

「火影つていや一里一番の超忍者だろ？お前みたいのがなれるとは思えんが？」

タズナは酒を飲みながら軽く笑う。

「だーうつさい！！火影になるためにオレってばどんな努力もする覚悟だつてーの！－！オレが火影になつたらオッサンだつてオレのことを認めざるをえねエーんだぞ！－！」

「認めやしねーよガキ…。火影になれたとしてもな。」

それを聞いて再びナルトはぶちギレる。

「ぶつ殺－－－す！－－！」

「だからやめろバカ、コイツ。」

そして再びカカシに止められる。学習しねえのかてめえは。

しばらく歩き、不意に

「ねえ…タズナさん。」

「何だ？」

「タズナさんの国つて「波の国」でしょ？」

「それがどうした？」

「ねえ…カカシ先生…。その国にも忍者つているの？」

「いたらわざわざ木の葉に依頼しに来る訳ねえだろ？」

「いや、波の国に忍者はいない…が、たいていの他の国には文化や風習こそ違うが隠れ里が存在し、忍者がいる。」

カカシによる忍び五大陸や火影についての説明が始まった。

ていうかその程度なら町の図書館で調べられるレベルだろうが。そんなんのも知らねえのかよ。

「へー、火影様つてすごいんだあ！」

サクラがワザとらしく言つ。心の中で絶対えバカにしてるな。

「……お前ら、今火影様疑つただろ。」

カカシが見事見抜く。3人ともギクッと反応する。

「ま……安心しろ、Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ。」

カカシがサクラの頭に手を置いて安心させる。

「じゃあ外国の忍者と接触する心配はないんだア……。」

サクラは安心する。

「もちろんだよアハハハ！」

カカシが笑うがタズナは微かに反応した。

それをサスケが見つけたが確信が無いのか黙つてる。

また歩いていると遂に最初の死亡フラグ、水溜まりを見つけた。にしてもマジで目立つな。何で水溜まりなんかにしたんだろう。地面や虫にでも化ければ良かつたのに。

もしかして水溜まりにしかならないとか？霧の忍者だからな。

カカシは水溜まりを一瞥する。

「あれ、良いのかよ？」

俺がカカシに近づいて聞くが

「うん？どうした？カズト。」

と惚けやがつた。

何をしたいのか分かつた俺は頷いて離れる。カカシは満足気に俺を見ていた。

そして水溜まりを通り過ぎたら徐々に一つの気配が生まれてきた。

そして後ろから1人が飛んで来た。

そいつは鎖の部分が刃物になつてゐる鎖を持ち、カカシに巻き付ける。

もう1人も鎖を持ち「一匹目。」という片方の声と同時に鎖を引く。鎖に巻き付けられていたカカシはバラバラになる。

まあ、幻術で本物に見せかけているだけで実際はただの丸太だけだな。

流石上忍、俺でも本当に死んだように見える。今は幻術を解除したから丸太に見えるが。

「キヤーーーーー！」、「力…カカシ先生エ…！」

サクラとナルトは突然の事に混乱して止まつている。

そして敵は瞬時にナルトに近付き「2匹目。」とカカシ同様、鎖で巻こうとしたがその前にサスケが反応してジャンプして手裏剣を飛ばす。

その手裏剣はナルトを縛ろうと円状に飛んでいる鎖を木に縫い付け、更にクナイを投げて手裏剣の穴に通して木に刺して固定する。

敵は鎖を引っ張るが動かない。

サスケはその隙に敵2人の爪がついた籠手のような装備に飛び乗り、引っ張ろうとする動きを止め、敵の腕を掴みながら両足で2人の顔を蹴る。

蹴られた2人は「グツ！」とうめき声を上げた後に邪魔になつている鎖を籠手部分を回転させてネジ切り、自由になる。

そして別々に狙いを変えた。

背の高い方はタズナの方に、背の小さい方は何故か俺の方に来た。あれ？原作ではナルトを狙うんじゃねえの？それとも別に何もしなくとも終わると思ってボーッとしてたから俺に狙いを変えた？敵は俺の疑問なんて考慮してくれねえから接近してきた。どうやら完全に俺に狙いを定めたらしいのでクナイを持ち、迎え撃つ。

先ずは手裏剣を敵の顔めがけて投げる。

案の定、爪で手裏剣を弾く。しかしその瞬間顔が爪で隠れるからそ

のスキについて死角が出来た方向に逃げて後ろを取る。

そして敵が振り返らない内に首を落とした。最初はチャクラの形態変化で切り落とそうか悩んだが別にコイツ等ならクナイで十分かと思、クナイでハネた。結果は成功。

首は別な方向に飛んで胴体はそのまま倒れた。

あっちの方ではサスケがサクラとタズナを守ろうと盾になろうとしていたが、その前にカカシがラリアットかまして敵を昏倒させた。「ナルト…すぐに助けてやらなくて悪かつたな。ケガさしちまつたな。…お前がここまで動けないとは思つてなかつたからな。とりあえずサスケ、カズトよくやつた。

カズトはほとんど1人で仕留めてたが。

「まあ、ていうか出てくるの遅いですよ。」

カカシに軽く言い返す。

人を殺しといて平然としている俺をカカシが見ている。やっぱいきなり殺すのは不自然か？

でも忍者として間違つて無い筈だ。片方生きてんだから情報は得られるし。

## カカシサイド

担任だつたイルカの報告書によると元々カズトは実力を隠していたらしい。まあ成績を見る限り安定し過ぎだし、一定の法則により成績が上下しているから実力を隠しているのは納得出来る。

そしてそれが確信出来たのはあの演習の時だ。

カズトは最後まで何ら行動を見せず、最後に残るはカズトだけになり、このままではラチがあかないと思い、わざわざカズトが隠れて

いる方向に向かつたらトラップにあった。

最初は丸太やクナイだけのアカデミー上がりでも思いつくトラップかと思いきや、そのクナイには起爆札が仕込まれていて少し行動が遅れいたら大怪我を負つていただろう。

それをかわし、次は直接戦闘になつたら体術や忍具の使い方は下忍でもトップクラス、速さではサスケをもしのいでいた。

時間も無かつたし、さつさと決めるかと下忍では無理な速さで後ろに周り、手刀をいれようと思ったらそれは影分身で、いつの間にか背後にいた本体にスズを取られていた。

影分身に殺氣を出させて本体の気配を誤魔化していたのだろう。

それだけで下忍とは思えない戦術だった。実戦ならもしかしてオレを殺れたかも知れない。

そして最後にさつきの戦闘だ。

ワザと死んだ振りをして敵がどう動くか確かめていたら流石サスケは初の実戦にも関わらず冷静に動き、見事ナルトを守つた。ナルトはまあ……何にもせず、ただ呆然としていただけだったな。サクラはちゃんと最後には依頼人を守ろうとした。

ここまででは予想通りだつたが、1つだけ予想を外した。

カズトが敵の忍びを殺したことだ。流石のカズトも殺すのは躊躇うだろうと思っていたが何の躊躇いも無くアツサリと殺した。殺した後に軽く話しかけたが普通に軽口を叩いて来る。精神状態も何ら変化無しか…。

明らかにカズトの実力は下忍ではトップクラスだろうし、速さや決断力、実行力は既に中忍クラスだ。

何故実力を隠してたんだ？あの実力ならアカデミーでもサスケを軽く抜いてトップになれただろうに。

まあ、良い。今はそれよりも重視しなくてはならない事がある。

## カズトサイド

「よオ…ケガはねーかよビビり君。」

わざわざサスケがナルトを挑発する。何で挑発するかねえ。興味が無いなら無視するなりすれば良いのに。

「…！」

ナルトがまたぶちギレそうになつたが

「ナルト！ケンカはあとだ。

こいつらの爪には毒が塗つてある。お前は早く毒ぬきする必要がある。傷口を開いて毒血をぬかなくちゃならない。あまり動くな、毒がまわる。」

ナルトに注意した後にタズナを睨み付けて

「タズナさん。」

「な…何じや…！」

カカシが話しかけるとタズナは明らかに動搖しているような口調になる。

「ちょっとお話をあります。」

そう言つた後にとりあえずまだ生きてる敵を木に縛りつけた。

「こいつら霧隠れの中忍つてとこか……。こいつらはいかなる犠牲を払つても戦い続けることで知られる忍だ。」

カカシが全員に説明する。

「…なぜ我々の動きを見られた。」

起きた敵が聞いてくる。マジで聞いてるのかよ？もしかして下忍か？

「数日雨も降つてない今日みたいな晴れの日に水たまりなんてないでしょ。」

カカシの全て分かつていたという説明にタズナが噛みついた。

「あんた、それ知つてて何でガキにやらせた?」「

「めえが文句言つなや。てめえが正規の依頼をひやんとしてれば上忍が行つてた任務だつたのに。」

「私がその気になればこいつらぐらいい瞬殺できます。……が、私には知る必要があつたのですよ……。」この敵のターゲットが誰であるのかを……。」

改めてタズナを見る。

「……？」

「つまり、狙われてるのはあなたなのか、それとも我々忍のうちの誰かなのか……ということです。」

我々はアナタが忍に狙われてるなんて話は聞いてないない。依頼内容はギャングや盗賊など、ただの武装集団からの護衛だつたはず……。これだとBランク以上の任務だ……。依頼は橋を作るまでの支援護衛とこう呟いたはずです。」

「……。」

「敵が忍者であるならば……迷わず高額な「Bランク」任務に設定されていたはず……。

なにか訳ありみたいですが依頼でウソをつかれると困ります。これだと我々の任務以外つてことになりますね。」

カカシの説明を聞き、さつきみたいな事がまた起きたかも知れないのでサクラは怖くなり

「この任務、まだ私達には早いわ……。やめましょ……。」

ナルトの傷口を開いて毒血を抜くにも麻酔が要るし……里に帰つて医者に見せないと……。」

ナルトを口実にして里に帰らうと促す。それが一番賢い選択だ。出来るなら俺もやつしたい。でもそんならうのがこの世界だ。

「ん――――。」

カカシはナルトを見ながら考える。

「……こりや荷が重いな！」

ナルトの治療ついでに里へ戻るか。」

カカシはそう決断した。担当上忍として正しい選択だ。さつきより強い敵が現れたら誰か死んでもおかしく無い。

そもそもランクが違いすぎる。下忍がやっていいランクでは無い。

空氣的には帰還一色だが、ここに異を唱える者が現れた。我らが主人公様だ。

ザクツといきなりナルトが傷にクナイを刺した。

「！」「！」

全員が驚愕する。俺は「あーあ。」と言つだけだが。

「ナルト、何やつてんのよ！アンタ！！」

サクラがナルトの奇行を咎めるがナルトは何故か笑顔を浮かべて

「オレが、このクナイで……。

オッサンは守る。任務続行だ！！！」

何を偉そうに。

たかだか傷口を刺して毒血を抜いただけで何を意氣がつてんだ？お前は何も変わつてない癖に。

コイツマジ意味分かんねえ。

何で忍者やつてんだろう？

…たまたま忍者の里で生まれたからだろうな。

もし条件が同じで侍の国に生まれてたら侍になつていただろうし。環境が悪すぎたんだな。

せめて侍だつたら「コイツの考えはあながち悪く無いが、忍者には最悪だ。

正々堂々戦い、勝機が薄く、断れる任務を敢えてやるなんて忍者の考え方じゃない。

まあ、少年マンガでリアル忍者じゃ人気出ないからな。  
忍者の仕事の大半は情報収集や雑用だ。  
暗殺とかはほとんど無いからな。

## 14 完全にAランク以上

あの後、タズナから依頼の真相を聞かされ、下手な泣き落としみたいなのを聞かされて忍者の癖にお人好しのカカシは依頼を受託。

Cランクから強制的にAランク任務に上がった。

ぶつちやけ波の国が滅ぶとかどうでも良いじやん。何で他国の存亡危機を救わなくちゃならない。

鬱だ……。

陸を歩き、波の国への国境に近付いたら今度はバレないようにエンジンを切つた手漕ぎ船で入国する。

まさか不法入国者みたいに入国するとはな。

「うひょう！ でけエ————！」

見えてきた建設中の橋を見てナルトが叫ぶ。  
そんなにデカイか？ この世界の橋にしてはデカイとは思うが、現実世界やハンターハンターの世界にはこの何倍もの橋はざらにあつたからそんなに驚く程では無い。

「こ…こら！ 静かにしてくれ！

この霧に隠れて船出してんだ。エンジン切つて手漕ぎでな。ガトーに見つかつたら大変なことになる。」

船主がナルトを注意する。

ガトーねえ。

確かにガトーの会社、ガトーカンパニーは超巨大企業だけどやり方があまりにもマフィアじみてて長続きしないのは見え見えだ。バカだよ。

人を従わせるには恐怖は最適だけど、恐怖ばかりでは人は逆らう。恐怖をえたら餉も与えないと人は従わない。

それにやり方が中途半端だしな。

反乱指導者を殺すのは良いが、その家族も始末しないと反乱の温床は残る。

ついでに家族も殺しどきやこの依頼も無かつたるひつ。

しばらく橋沿いに進んでいたら波の国が見えてきた。

見つかる事を避けて上陸するのはマングローブのある街水道を通る事にしたようだ。

マングローブ地帯を抜けて古い木の桟橋に到着した。

「オレはここまでだ。それじゃあな、氣イつけ。」

「ああ、超悪かつたな。」

船主はオールを外してエンジンをかけて、一旦散に逃げていった。何で逃げる時はエンジン使うん?

最後までバレないよう手漕ぎにすれば良いのに。

「よーしイーワシを家まで無事、送り届けてくれよ。」

偉そうに言いやがる。どうせならてめえの首を土産にガトーに会つた方が金になるだろ?」

「はいはい。」

カカシは面倒くさそうに返事する。何せ次はさつきみたいな雑魚とは違ひ、上忍だからな。

「そこかあ————つ!!」

キヨロキヨロしてたナルトが突然大声を叫びながら手裏剣を草むらに投げる。せめて投げるなら無言で投げろよ。し——ーーんつと何も起きない。

「フ…なんだネズミか。」

ナルシストみたいに格好つけるナルト。

「つて、何かつこつけてんの!! そんなとこ初めから何もしゃしな

いわよ！」

大声で注意するサクラ。お前が一番つるせーよ。

「口…口…お前がやたらめつたら手裏剣使つな…。マジでアブナイ…！」

力カシが注意するがナルトは聞いてない。また何かを探しあじめていた。

その時、何か視線を感じた。

力カシも反応したがその後にはまたナルトが「そこかアーーーーーー！」

また手裏剣を草むらに投げた。確かにその方向から視線を感じたから間違つて無い。何気にスゲエな。

「だからやめるーーーーーー！」

「ぐがアーーーーーー！」

二度目にぶちギレたのかサクラがナルトを殴る。

「ホ…ホントに誰かがこっちをずっと狙つてたんだってばよ…」「はい、ウソ！」

ナルトが真実を言つがサクラは信じない。

力カシは視線が気になつたのでナルトが手裏剣を投げた辺りを探すと、そこには手裏剣にビビついていた白い毛並みのウサギがいた。

「ナルト！なんてことすんのよオ！」

サクラはウサギにした事を怒る。そんなの気にはすんなよ。

しかし力カシは警戒を更に強めた。あれは変わり身用のコキウサギだからな。

その瞬間、後方からブン！ブン！と何かが飛んで来る音が聞こえたので直ぐ様伏せる。

その後に力カシが

「全員ふせろーーーーーー！」

と命令する。数瞬後には「テカイ何かが飛んで来た。

全員間一髪避け、その飛んできた物は木に刺さり、「テカイ包丁みたいな刃物と分かつた。

そしてその刃物の柄に上半身裸で口元に包帯を巻いた男が現れた。一目でヤバい事が分かる。今まで相手にしてきた国境警備の忍じや話にならない。

「へーー、じりやじりや、霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか。」

暗部のビンゴブックに乗ってる有名人だからな。

空気の読めないナルトは無謀にも再不斬に挑もうとするが直ぐに力カシが止める。「コイツは洒落にならないからな。

「邪魔だ、下がつてお前ひ。じつはさつきの奴らとはケタが違う。」

そしてカカシは額当てを触り

「このままじゃあ…ちとキツイか…。」

と写輪眼の準備をする。

「写輪眼の力カシと見受けろ…。悪いが、じじーを渡してもらおうか。」

再不斬とカカシがにらみ合ひ。何で俺こんなところにいるんだろう? こういう危ない事はしないように生きてたのに。

「元の陣だ。タズナさんを守れ…お前達は戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ。」

カカシが命令する。何でこの爺を守んなきやいけねえんだよ。置いていって逃げれば良い。

「…再不斬、まずは…オレと戦え。」

カカシが額当てを上げて左目を出す。そこには3つの勾玉みたいな紋様が浮かんでる目が現れた。

出来るなら写輪眼もコピーしたいがそれは不可能だ。

どうやら術なら血縁限界でもコピー出来るが、写輪眼や白眼みたいな

な人体の血縁限界は「コピー不可らしい。

死体の目なら「コピー出来そうだが、その目を俺の物にするなら移植しないといけない。

それに、俺はその血縁限界の血筋じやないから拒否反応が酷いだろう。

力カシも「写輪眼を使うと物凄い疲れるらしいし。そこまで苦労するならいらない。

「ほーーーー、噂に聞く「写輪眼を早速見れるとは…光榮だね。」

再不斬がそんなのこれっぽっちも思つてない癖に言つ。

「さつきからシャリンガン、シャリンガンって…何だそれ？」「ナルトがわざわざ聞く。それ今聞かなきやダメか？後で良いじゃん。後があればな。

あまりにウザかつたのかサスケが説明した。

「クク…御名答。ただそれだけじゃない。それ以上に怖いのはその目で相手を見極め「コピー」してしまうことだ。

オレ様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃携帯していた手配帳にお前の情報が載つてたぜ。それにはこうも記されていた。

千以上の術を「コピー」した男…「コピー忍者の力カシ。」

わざわざ説明するなんて意外と善人だよね。ていうかこの時点で白を使えば簡単にタズナを仕留められるぜ？

力カシはお前から目を離せないんだから。何でこの世界の忍者は微妙に正々堂々に拘るんだろう？

「さてと……お話はこれぐらいにしておーぜ。オレはここのはじじいを殺んなくちゃならねえ」

その言葉に俺達4人はタズナを取り囲み、守る体制を取る。

「つつても力カシ！お前を倒さなきゃならぬーようだな。」

そつ言つた直後に包丁を引き抜き、水の上に移動して印を結んでる。

「あそこだ！…」

「しかも水の上！？」

ナルト、サスケ、サクラは驚く。人が水の上に立つてゐるんだからな。

「忍法……霧隠れの術。」

その言葉の直後に再不斬の周りの霧が急に濃くなり、消えた。

「消えた！？」

「まずはオレを消しに来るだろ？が……桃地再不斬、こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術として知られた男だ。

気がついたらあの世だつたなんてことになりかねない。オレも写輪眼を全てうまく使いこなせるわけじゃない……お前達も気を抜くな！」

カカシがわざわざ説明する。だつたら喋るな。と命令しどけよ。深い霧の中で音を立てるのは自殺行為。まあ、こいつらには無理だろうが。

「どんどん霧が濃くなつてこくなつてばよー！」  
ほらやつぱり。

「8ヶ所。」

「……え？」

「なつ……何なの！？」

「咽頭、脊柱、肺、肝臓、頸静脈に鎖骨下動脈、腎臓、心臓……さて……どの急所がいい？クク……」

脳は無いのか？一番手つ取り早いと思うが。

その言葉が終わつた瞬間、猛烈な殺気が襲つてきた。  
まあ俺は様々な世界で殺氣を受けて來たからそこまでビビらない。  
他の3人は震えてるがな。

「サスケ……安心しろ。お前達はオレが死んでも守つてやる。

オレの仲間は絶対殺させやしないよ！」

カカシが軽く言つてサスケを安心させる。

「それはどうかな……？」

いつの間にか再不斬が俺達とタズナの間にいた。

「終わりだ。」

再不斬がタズナを殺そうと包丁を振ろうとしたがその前にカカシが再不斬の腹にクナイを刺す。

再び轉の勝に少しおを薦す

しかし、その腹から流れるのは血ではなく水。

「先生——後ろ——！」

## 腹を刺された再不斬が

腹を刺された再不軌か水になりガルトの言葉にカカシは反応しよ  
うとするがカカシは胴体を真つ一つにされる。

それを見てサクテは叫ぶ。

筋に並んでる。

何で声かける？何も言わずに首を切れば良いのに。

「ス…スッゲー————!!！」

ナルトやサクラも安心する。しかし

再不斬は笑う

再不斬は笑う。自分が圧倒的有利なままなようだ。

「ククク……。終わりだと……。分かつてねエーな。

ナレマネギ一二をやあ二の才ノ様は倒せぬ。免れ二ふ。

「クク… しかしやるじゃねエーか！ あの時すでに… オレの水分身の柄はロードせれてたつて訳か。」

分身の方にいかにもうしごヤツツをしゃべらせる」と、オレの注意を引いた。だが、彼が「アレアレ」とか「オレ」の発音を

うかがつてたつて寸法か。  
「

「けどな。」

オレもそう甘かあねーんだよ。」

また再不斬が後ろにいて前にいた再不斬は水に変わった。

「そいつも水分身ーーーーー？」

ナルトが再び叫ぶ。

再不斬が包丁を振り回し、カカシを切断しようとするがカカシはそれを避ける。

再不斬は包丁の回転を利用してカカシに蹴りを入れる。カカシもそれは避けられなかつたのか食らい、海にぶつ飛んだ。

再不斬は追撃しようとすると足に痛みを感じ、見てみるとまきびしがバラまかれていた。

「…ぐだらねエ。」

再不斬は瞬身を使いカカシの元に移動する。

「！せんせーーーーー！」

ナルトが叫ぶ。お前叫ぶしか脳が無いのか？

カカシは水から上がろうとしてるが何故か水がまとわりつく。

「フン…バカが。」

再不斬は印を結び、水牢を作り、カカシを閉じ込めた。

「！！！なに！？」

カカシが驚愕する。

アホか…。水遁を得意とする忍びを相手に水中に逃げ込むなんて。

「ククク…。脱出不可能の特別牢獄だ！！お前に動かれるとやりに

くいんでな。

…さてと…カカシ、お前との決着は後回しだ。…まずはアイツらを片付けさせてもらつぜ。」

再不斬は印を結び水分身を作る。

ズズズ…。と水際から再不斬の分身が出てきた。

「…」、「！」

3人とも恐怖の顔色を浮かべる。俺はビビつてるよつと見せかけて少しづつ下がる。

「ククッ…。偉そーに額あてまでして忍者氣どりか…。だがな、本当の忍者つてのはいくつもの死線を越えた者のことを言ひつんだよ。つまり…オレ様の手配書にのる程度になつて初めて忍者と呼べる…。お前らみたいのは忍者とは呼ばねエ…。」

そう言つて水分身は消える。そしていつの間にかナルトの前にいてナルトを蹴り飛ばす。

「ナルトオ！！」

サクラが叫ぶ。死ぬわけ無えだろ？主人公様だぜ。

「だだのガキだ。」

本体が言つ。今ので殺しどけば良かつたのに。戦いで遊ぶと痛い目見る。

「ぐつ！お前らア！！タズナさんを連れて早く逃げるんだ…。コイツとやりあつても勝ち田はない！！

オレをこの水牢に閉じ込めている限りコイツはここから動けない！水分身も本体からある程度離れれば使えないハズだ…。とにかく今は逃げる！」

カカシが懸命に言つ。だからタズナは置いといた方が生存率は多少上がると思うが？一応目標はタズナだからな。

まあどうせ全員、口封じに殺されるだろうがな。

その言葉に全員が焦る。

特にナルトは恐怖から逃げようとしたが転げた。

そして自分で抉つた傷跡を見た後、再不斬に踏まれてる自分の額当てを見る。

うわあ、何かマンガ的なこと考えてるな。ていうか再不斬もさつさと殺れば良いのに。

ナルトは立ち上がり

「うおおおお！！！」

叫び、再不斬に突進する。

そして再びドカ！！と蹴り飛ばされる。

「1人で突っ込んで何考えてんのよ！いぐらいいきがつたつて下忍の私達に勝ち目なんてあるわけ…」

サクラが正論を言つてるとナルトは立ち上がり、その手には額当てを持つていた。

「おい… そこのマコ無し。」

ナルトの言葉に再不斬が僅かに反応する。気にしてたのか？

「…お前の手配書に新しくのせとけ！ いづれ木の葉隠れの火影になる男

木の葉流忍者！ うずまきナルトつてな！！」

薄笑いを浮かべながら額当てを結ぶナルト。言つてる事はかつこいいけど行動が伴わなきや無意味なんだよ。

「サスケ、カズト！ ちょっと耳貸せ。」

…え？ 僕も？

「何だ？」

サスケが答える。何で俺も一緒になんだよ？

「作戦がある。」

「フン、あのお前がチームワークかよ…。」

「さーて、暴れるぜえ…。」

「…いやあ、その必要は無いと思つ。」

俺の言葉にナルトは

「！？ 何でだよカズト！？」

と怒る。何故かサスケも同様に。お前もやりたかったのか？  
いきなりな発言に自分を注目させ

「だつてさ…」

最後まで言い切る前に突然水牢を維持していた再不斬の近くで俺の影分身が飛び上がり、再不斬に向かつてクナイを投げる。

「！！」

急な攻撃に再不斬は避けるために水牢から手を離す。  
そして影分身が投げたクナイは再不斬の頬を僅かに擦り、小さいが  
再不斬に傷を与えた。

「！」、「！」、「！」

3人は驚愕する。

ほんの少しだけの傷とは言え、傷つけられたのがムカついたのか再  
不斬は影分身に向かつて包丁を振りかぶるがその前に水牢から脱出  
した力カシが手で止めた。

そして影分身は消える。

「力…力カシ先生！！！」

サクラは純粋に喜ぶ。ナルトとサスケは微妙に俺を睨む。見せどこ  
ろを取られたせいいか？

「……カズト…作戦見事だつたぞ……。」

「…まあ、ナルトが上手く全員の注意を引き付けてくれたおかげで  
すよ。おかげで影分身を簡単に配置出来ましたから。  
後は俺（本体）が突飛な事を言つて今度は俺に注意を引き付け、奇  
襲した。ナルトのおかげですよ。」

一応ナルトも持ち上げる。本当は霧隠れの術の時に影分身に『完全  
なる隠匿』を使わせて隠れさせ、タイミングを見計らつて解除した  
影分身で攻撃しただけ。

別にナルトはいなくても良かつた。

しかしそんなことは知らないナルトは自分のおかげだと言われて「  
へへ…それほどでも。」と照れる。

「へつ…カツとして水牢の術をといちまうとはな…。」

「違うな！術はといたんじやなくてとかされたんだろ。」

力カシの言葉に再不斬はピクつく。

「言つておぐが、オレに2度同じ術は通用しない。さて、どうする

？」

「フン！」

お互に一斉に離れた。

そして再不斬が印を組み始めたら力カシは写輪眼で見ながら少し遅れたが、段々追いつき、同時に印を組み終わる。

「水遁、水龍弾の術！！」

同時に術を発動した。

そして互いに周りの水が龍のようになりお互い相殺し合つ。その余波が俺達の方にも来た。

「うおお！！」、「キャーーーーー！」、「ぐつ！」

ザブオ！！と龍の接触地点にデカイ水柱が出来た。

まあこれで水龍弾の術はコピー出来た。久々に大技をコピー出来たから気分良い。まあこれが見たいがためにこの任務も受けたからな。それが無きやサボるか何らかの理由で任務を休む予定だった。

力カシ達の方を見ると力カシと再不斬が全く同じ動きを取つていた。再不斬にとつて物凄い不快だろつ。

そして互いに印を結んでいたが、突然再不斬の動きが鈍り、術の発動が遅れた。

その隙に力カシが水遁、大瀑布の術を発動させて再不斬を吹つ飛ばす。

にしてもスゲエ威力だな。まさに天災だ。これもしつかりコピーさせて貰つたがな。

流された再不斬は木に叩きつけられ、更に両手足をクナイで刺されて身動き取れない状態にされた。

甘いよ、一撃で殺れば良かつたのに。

「ぐつ…。」

「終わりだ…。」

何故か再不斬に背を向けて枝の上にいる力カシ。意味分かんない。

「……ナゼだ……お前には未来が見えるのか……？」  
再不斬は恐怖が入り交じった目でカカシを見る。

「ああ……お前は死ぬ。」

カカシがクナイを構え、決めようとしたらその瞬間、いきなり細長い針である千本が飛んで来て再不斬の首をザクツザクツと刺す。再不斬は倒れ込み、動かなくなつた。

「フフ……本當だ。死んじゃつた。」

いつの間にかカカシの反対側の木の枝には仮面をつけた俺達と変わらない年であろう人間がいた。

カカシは瞬身で再不斬の下に移動して首筋に手を当て脈を確認する。念のために首を切り落とせば良いのに。

「ありがとうございました。ボクはずつと……確実にザブザを殺す機会をうかがつていた者です。」

白は頭を下げて言つ。

内心は腸煮えくり返つてゐるだろうな。何せ大事なご主人様を殺されかけたからな。

「確かに、その面……お前は霧隠れの追い忍だな……。」

「……さすが……よく知つていらつしやる。」

「追い忍？」

ナルトが悔しそうな顔で聞く。

「そう、ボクは抜け忍狩りを任務とする霧隠れの追い忍部隊の者です。」

何も知らない人間なら疑いもしない程落ち着いてるな。

そこでナルトが仮死の再不斬と白を何度も見返す。

白も「？」となる。

「なんなんだつてばよ……お前は……？」

白を指差してナルトは叫ぶ。全くウザい。

「安心しろナルト、敵じゃないよ。」

カカシが安心させるために言うがナルトは止まらない。

「ンなこと聞いてんじゃねーの！オレってばー！」

あのザブザが…あのザブザが殺されたんだぞ…！あんなに強えー奴が…オレと変わんねエガキに簡単に殺されちまつたんだぞ…！オレ達バカみてーーじゃん！

納得できるかア…！」

別にお前が納得する必要は無い。ただの足手まといの分際の癖に。

「ま！信じられない気持ちも分かるが…が、これも事実だ。」

カカシはナルトの頭に手を乗せて諭す。大変だねえ。

「この世界にやお前より年下でオレより強いガキもいる。」

ナルトはとりあえず黙つた。納得はしないようだが。

白は瞬身で再不斬に近付き、手を肩に回して担ぐ。

「…あなた方の鬪いもひとまずここで終わりでしょ。ボクはこの死体を処理しなければなりません。」

なにかと秘密の多い死体なもので…。…それじゃ失礼します。」

また瞬身を使い消えた。

「フーーー。」

カカシはため息をつき、額当てを戻し写輪眼を解除する。

「さ！オレ達もタズナさんを家まで連れていかなきやならない。元気よく行くぞ！」

カカシの号令によつやく雰囲気が戻る。

「ハハハッ！…皆、超すまんかったのオ！」

ま！ワシの家でゆつくりしていけ！」

タズナが笑いながら言つた後にカカシが倒れた。

「なに！…え…！…？どうしたの！…？」

「カカシ先生！…！」

全員が慌て出す。もしかして何か大怪我したのか？と心配するが。

「…スマン、写輪眼の使いすぎで体が動かない…誰かおぶつて

くれ…。」

その情けない言葉に誰が力カシをおぶるかで一行は揉め始めたのだった。

やれやれ、もし力カシがこんな状態じゃ無かつたら無理矢理にでもザブザと白を殺しにかかったのに。

流石の再不斬も仮死状態だから何も出来ないし、白一人ならそこで脅威にはならない。力カシ一人で殺れる。

まあ、今は結局身長からタズナが力カシを担ぐ事になり、タズナが愚痴りながら歩く。

帰りてえ…。

タズナの家に着き、現在力カシを布団に寝かせた状態だ。

「大丈夫かい？先生！」

タズナの娘のツナミが言つ。

「いや……！一週間ほど動けないんです……。」

弱々しく言つ力カシ。ピクリとも動かないからな。

「なあーによ！写輪眼つてスゴイけど体にそんなに負担がかかるんじゃ考えものよね！……」

サクラが呆れたように言つ。まあ力カシはうちは一族じゃないから負担がデカいんだろう。

だから写輪眼をコピーする利点は低い。コピーなら元々出来るし、透視眼は魅力的だがリスクがでかすぎるしな。

「でも、ま！今回、あんな強い忍者を倒したんじゃ。おかげでもうしばらくは安心じやろう！」

力カシを背負つてきたからか汗を拭きながら言つタズナ。

「それにしてもさつきのお面の子つて何者なのかな？」

その後は力カシが追い忍についてと忍者の始末法について説明する。力カシやサスケは死後、多分解体されるか完全に燃やされるんだろう。血繼限界の悲しい末路だ。

その後、力カシは疲れたのか眠つたので全員も休息を取る。

各々座つたり、携帯食料を食べたり、装備の確認をするなど暇つぶしをしている。俺はまだ読み終わつて無い小説を読んで時間を潰す。しばらくダラケてたらナルトが

「……なあ、力カシ先生が寝てるついでマスクの下見ねエ？」

と笑顔で言つてきた。

「何言つてるのよ？」

非難する口調だがサクラも気になるのか大して止めない。

「いいじゃん！いいじゃん！カカシ先生は疲れて寝てるから気付かねエーつて！」

笑いながらナルトはカカシに近付く。

「んもう、仕方ないわねエ。」

とサクラもカカシに近付く。何だかんだ言つても気になるらしい。そぐそぐとナルトはカカシのマスクに手をやろうとしたら突然カカシが目を開いた。

「！」「ギャーーーーー！」

いきなりカカシが起きたからナルトとサクラはビビった。

その声に座りながら寝てたサスケも起きた。

「あら、カカシ先生。起きたの？」

丁度帰ってきたツナミがカカシに声をかけるがカカシは無視し、頭に手を当てて何かを考えている。

カカシはアゴに手を当ててまだ考える。その雰囲気のせいか全員黙り、カカシを見る。

「どうしたんだってばよー先生？」

「ん？ああ…。」

死体処理班つてのは殺した者の死体はすぐその場で処理するものなんだ……。」

まあ当たり前だろうな。わざわざ死体を運ぶなんて疲れるし。

「それが何なの？」

「分からぬいか？あの仮面の少年は再不斬の死体をどう処理した？」  
「は？知るわけないじゃない！だつてあのお面が持つて帰ったのよ。」

「そうだ…殺した証拠なら首だけ持ち帰れば事足りるのに…だ。それと問題は追い忍の少年が再不斬を殺したあの武器だ…。」  
確かに千本じや難しいよな。毒でも塗つてあるなら別だが。

「……まさか……」

サスケがようやく気付いた。

「あーーーあ…。そのまさかだな。」

カカシが頭を抱える。何せ厄介な敵が生きてる事がほぼ確定したんだからな。

「？」

ナルトとサクラはまだ分からぬのかサスケとカカシを見ている。

「さつきからグチグチ何を言つとるんじや、お前たち…………！」

タズナも分からぬようだ。ちょっと考えれば分かるだろ？？それとも分かっていても分かりたくないのか。

「おそらく、再不斬は生きてる！」

カカシの言葉にナルト、サクラ、タズナは驚愕する。ツナミは再不斬を知らないので分からぬ顔をする。

「どーゆーことだつてばよ！？」

「カカシ先生、再不斬が死んだのちゃんと確認したじやない！！！」

ナルトとサクラはカカシを問い合わせる。信じたくない事実だからな。

「確かに確認はした……が、あれはおそらく…仮死状態にしただけだらう…。」

カカシは白の持つていた千本と不自然さをからお面の少年は再不斬の味方だと説明した。

「……超考えすぎじゃないのか？追い忍は抜け忍を狩るもんじやろ！」

タズナはまだ否定する。そう信じたいんだらう。何せターゲットは自分だ。

「いや…クサイとあたりをつけたなら出遅れる前に準備しておぐ…

：それも忍の鉄則！

ま！再不斬が生きてるにせよ死んでるにせよ。ガトーの手下にせらうに強力な忍がいないとも限らん……。」

カカシの説明にナルトは何故か少し笑顔でフルフル震えている。その様子はワクワクしているにしか見えん。

コイツ情況を分かつてゐるのか？カカシが再不斬に勝てたのはほとんど偶然だぜ？

やり方によつては再不斬が勝つ可能性のほうが高い。だからバトルジャンキーは困る。

一人で死ねば良いのに。

「先生！出遅れる前の準備つて何しておくの？先生と一ぶん動けないのに…。」

サクラが聞くとカカシは突然含み笑いをして

「お前達に修行を課す！！」

と言つた。

「えつ！……修行つて……！！

先生！！私達が今ちょっと修行したところでたかが知れてるわよ！相手は写輪眼のカカシ先生が苦戦するほどの忍者よ！！」

サクラが正論を言つ。確かに普通ならたかが一週間程度の修行ではほとんど変わらない。

でもお前等は主人公組。

一週間どころか場合によつては1日で劇的に強くなれる可能性すらある。

例えばナルトの九尾の力を多少解放するなど。

「サクラ……その苦戦しているオレを救つたのは誰だつた…。お前等は急激に成長している。

とくにナルト！！お前が一番伸びてるよ！！」

ナルト何かしたつけ？

まあ、カカシの言葉のおかげでナルトは嬉しそうな顔をしている。上手く乗せたな。

俺を指摘しなかつたのは俺の実力が分からぬからだろう。

基準が分からぬんじや伸びてるかなんて分からぬからな。

「とは言つてもだ。おれが回復するまでの間の修行だ……。まあ、お前らだけじゃ勝てない相手に違ひはないからな……。」

「でも先生！！再不斬が生きてるとして、いつまた襲つてくるかも分からぬのに修行なんて……。」

「その点についてだが……いつたん仮死状態になつた人間が元通りの体になるまでかなりの時間がかかることは間違ひない。」

「だったらその間に逃げれば良いじゃん。タズナが任務偽証したんだから帰つたとしても何ら問題無いのに。」

「その間に修行つてわけだな！面白くなつて来たつてばよー。」

何も面白く無いよ。」

その後はあのガキがやつて来て悲劇のヒロイン気取つてたが別に興味無かつたので無視して本読んでた。

そして今は松葉杖を突いている力カシに森まで連れて来られてチャクラについての説明をしている。

ナルトは無知の癖に偉ぶるからな。無知だから偉ぶるのか？

「木登りー！ー？」

力カシから告げられた修行内容が木登りだったため、3人は疑わしきな目で力カシを見る。

「そんなことやって修行になんの？」

サクラは言葉にもする。

「まあ、話は最後まで聞け。」

ただの木登りじゃない！手を使わいで登る。」

力カシの言葉にナルトは面白そうとも思つてゐるのだらう。笑顔だ。

「?どうやって……？」

サクラはまだ疑わしげ。

「まー…見てる。」

力カシがわざわざ印を結んでチャクラを足に移動させる。

そしてスタ、スタと歩き、そのまま木の表面も歩く。まるで重力を感じてないかのように。

でも実際はかなりの重力を感じる筈だ。あの状態でそこまで樂々登るのは…。改めてスゲェと分かつた。

「登つてる…。」、「足だけで垂直に…。」

3人は呆然。

サスケは知つてもおかしくないとと思うが？

うちは一族なんだから既に親に教えられててもおかしく無いのに。

「…と、まあこんな感じだ。チャクラを足の裏に集めて木の幹に吸着させる。

チャクラは上手く使えばこんなことも出来る。」

笑顔で逆さになりながら話す力カシ。頭に血は昇らないのか？

「ちょっと待つて！木登りを覚えて何で強くなれるのよ！」

サクラが抗議する。

アホか？木登りが簡単になれば逃げるのにかなり役立つ。

それにチャクラコントロールが口クに出来ない奴は口クな忍術も使えない。ていうかこれが出来なきや一生下忍だな。

力カシがこの修行の有効性を説明した後に

「…と、まあオレが「ちや」ちや言ったところでどーこーなる訳でもないし…。体で直接覚えてもらうしかないんだけどね。」

力カシは俺達4人の前にクナイを投げる。俺は出来るんですけど。

「今、自分の力で登りきれる高さの所に印としてそのクナイでキズを打て。

そしてその次はその印よりもさらに上に印を刻むよう心がける。お前らは初めから歩いて登るほどうまくはいかないから走つて勢いにのりだんだんとならしていく……いいな！」

「ンな修行、オレにとっちゃ朝めし前だつてばよ！」

なんせオレつてば今一番伸びてる男！」

ナルトが自信満々に言つ。何の根拠も無い癖によくそこまで信じられるな。

「ごたくはいいから。お前ら、早くどの木でもいいから登つてみる。」

カカシの言葉に3人は印を結び、チャクラを足に集中させる。

「よつしゃーーー！ いつくぞオーーーー！」

ナルトが勢いよく行くのと同時にサスケとサクラも木に向かう。そしてナルトは一步目から滑り、転けた。

サスケは木の表面を破壊しながら進むが、中腹で限界が来て木に傷を打ち、着地した。

ナルトはチャクラが少なすぎて吸着出来ず、サスケは逆に多すぎて弾かれて木を破壊しながら進むだけ。

しかしそこに「案外カンタンね！」という声が上から聞こえて来た。そこには一番高いであろう枝に腰掛けたサクラがいた。

「サクラちゃん！」

「今一番チャクラのコントロールがうまいのはどうやら女のコのサクラみたいだな…。」

これにはサスケは「チツ。」と舌打ち、ナルトは「スッゲエーーー！ サクラちゃんつてば！ さすがはオレが見込んだ女！」とサクラを賛美する。

しかしサクラはサスケに誉めて欲しかったのかガックリとする。

「いやーーー！ チャ克拉の知識もわかることながらコントロール、スタミナともになかなかのもんだ。」

この分だと火影に一番近いのはサクラかなア…。誰かさんとは違つてね。それにうちは一族つてのも案外大したことないのね。」

カカシが見えすいた挑発をする。一人はその挑発にまんまとかかつたようだが。

「そう言えばカズトはどうしたんだ？早く登れよ？」

カカシが気付いたかのよつに俺に声をかける。

俺つて影薄いのか？まあ、周りが周りだからな。

何故か3人とも俺を注視する。そんなに気になるか？

どうするべきか多少悩んだが別に良いか。という結論に達した。

この程度なら基礎の基礎だし。知つてもそこまで不思議は無い筈だ。

カカシのよつにスタスタ歩き、そのまま木の表面を歩く。

「あら。」、「な！？」、「ウソ！？」、「！？」

カカシは見当はついていたのかそんなに驚かず、逆にナルト、サクラ、サスケは驚いていた。

そして俺は一番高い枝に腰かける。

「…木登り、出来たのか？カズト。」

「ええ、まあチャクラコントロールは基本中の基本ですから。父さんにも教えて貰つていましたから。」

これは本当。やはり幼少期の頃から勉強をしていたからこの木登りも聞けば教えてくれた。誤魔化しのためにね。

「ああ、そつか！確かにカズトの父親は上忍で母親は中忍だったな。だつたらこの程度なら知つても不思議は無いか。」

こんな感じに納得してくれる。たまにはあの両親も使えるな。

「え、マジ！？カズトの両親つて忍者なのか！？」

何故かナルトが驚く。

「ああ、そう言えばカズトの家である北郷家はそれなりに優秀な忍者を輩出している家系だしな。」

カカシが補足してくれる。

優秀な忍者は代々では無くたまにだがな。

「なるほど…。だからカズトは強いんだア。」

サクラは納得する。お前の家系は普通だからな。むしろ何でお前は

忍者になつたのかが聞きたいくらいだ。

ナルトとサスケは微妙な表情をする。何たつて俺は両親が健在だからな。

更に両方忍者なんて羨ましいんだろ？ サスケもナルトも確かに両親は忍者だつたからな。

あの後、俺はカカシからタズナの護衛につけと命じられたので現在1人で橋の建築現場で暇つぶしに本を読んでいる。

「ヒマそうじやのう。」

タズナが話しかけてきた。

「そりやね。別に襲撃も無いし。工事は順調そうだしな。

むしろ俺が忙しかつたらお前ら大変だぜ。」

俺の軽口に「そりやそうじやな。」と笑いながら作業に戻つた。しばらくしていたら突然悲鳴が鳴り響いた。面倒くさいが一応仕事だから悲鳴の音源に行つたら何か格好はおかしいけど日本刀を持つた男二人がいた。

多分ガトーの私軍の1人だろう。名前さえ出てこないモブか。

「てめえらウゼエんだよ！」

「いい加減諦めろよな！」

工事を邪魔しにきたらしい。随分小さい行動だが効果的でもあるな。現に工員達がビビつてゐる。

1人は老人に刀を向けているので

「あの方、オジサン達、こんな老人苛めて楽しい？」

老人と侍？ の間に立つ。

「何だガキ？ 邪魔すんじやねえ。」

もう1人が俺にも刀を向けて來た。

「こんな子供にまで刀を向けるなんて。アンタ等一応は侍だろ？ 恥

ずかしいとは思わねえのか？」

この世界の侍がどんなのか知らないけど。

「つるせえガキ！！テメエに関係ねえだろ！！」

何かが感に触つたのか1人が切りかかってきた。

これで反撃出来る。一方的にこっちから攻撃すると犯罪者になりかねんからな。

俺は軽くかわし、クナイで切りかかつってきた奴の刀を握っている右手を切断した。

「ギヤー——！」

腕が吹つ飛んだからか悲鳴を上げる。

「ヒイツ！！化け物！！」

残つた方は俺に敵わない事が分かつたのか右手が無くなつた相棒を連れて逃げるよう帰つていつた。

工員達は人の手が吹つ飛ぶ光景を見せられたからか唖然としていた。俺はそれを無視して元の位置に戻り、読書を再開した。

しばらくして工事は再開した。てっきり今日は中止かと思つたが意外に根性あるな。

タズナが頑張つて説得したから皆一応作業に戻つていつた。

何人かは俺を恐怖の目で見ていたがガン無視だ。

サクラがタズナの護衛に行き、俺はタズナの家族の護衛と力カシの補佐（介護）するためにタズナの家で再び読書。

しばらく寝ていた力カシが目を覚まし、起き上がり俺に声をかけた。

「カズト、ちょっとといいか？」

「ん？ 何だトイレか？」

力カシはまだ全然回復してないからトイレに行くにも補助が必要だ。

「いや違う。聞きたい事があるんだ。」

「何だ？」

「お前の実力についてだ。」

面倒な展開になつてきたな。やっぱ田立ち過ぎか？

「実力？」

とりあえず惚けとく。

「ああ、アカデミーの成績表を見るとお前はどの教科でも必ずトップ10に入り、安定した成績を取つていたが、あまりに安定し過ぎていて作為的に感じた。」

やっぱどこか苦手教科を作つたりたまに悪い成績も取つとくべきだつたか…。面倒だつたからなあ。

「それに現実にお前の実力を見て見るどビツ考へても首席を取つたサスケよりも上回る。

更にアカデミー上がりには難しい忍の考え方もお前は普通に実践しているし、木登りで見たチャクラコントロールでも下忍とは思えない程安定していた。」

やっぱカカシクラスだとそれぐらい見破るか。親父は全く疑わなかつたのにな。

「お前は低く例えても下忍のトップクラス。既に中忍の域にも達していると言つても良い。

そこで疑問だ。何故実力を隠していたんだ？」

カカシが俺の目を見ながら聞く。

ウソを見破るつもり何だろうが、甘いと言つしか無い。

この俺に心理戦をふつかけるなんてな。

精神年齢は既に200歳は軽く越え、様々な修羅場や権力闘争、騙し合いの中で生きてきたこの俺のウソを見破るなど不可能だ。何せコイツ等に見せてきた北郷カズトは全部偽物。本音が無いんだからウソか本当かの見分けなど不可能だ。

「……だってさ、忍者の中で突出すると面倒じやん。」

「…面倒？」

「ああ、先生が良い例だよ。

カカシ先生は才能があり、その才能を小さい頃から遺憾無く發揮した。そのせいで直ぐに下忍、中忍、上忍になつた筈だ。だろ？」知つてるが一応聞いとく。あんまりに知つてると疑われるからな。

「ああ、そうだ。」

カカシは昔を思い出したように少し手を細めた。

「カカシ先生の時代は大全期だから更に顕著だつたろうけど、今の時代だつて優秀な忍者は直ぐに出来させて重要な任務につけさせる体制は変わつてない筈だ。」

カカシを見ると頷く。

「だからさ、あんまりにも突出すると直ぐに出来させられて危険な任務に就かされるじやん？だから敢えてそこまで優秀では無い忍を演じた。」

「……つまり、危険な任務に就きたくないから隠していたのか？」  
「うーーん…まあそれもあつたけど、一番は若い内に出来したくなかったというのが強いね。」

カカシは分からぬのか顔をしかめる。

「先生さ、子供の頃に遊んだ記憶ある？」

いきなりの俺の質問に少し驚いたようだけど直ぐに冷静になり答えた。

「……いや、あまり無いな。」

「だろうな。任務、任務の日々で口クに遊んだことなんて無かつただろう。

だから今、その反動で遅刻やエッチな本を読むようになつたんじやない？」

それを言われてカカシは黙る。心当たりがあつたのか？

「俺の夢はさ。何れは父さんみたいに上忍になることだけだ。直ぐにはなりたくない。

一杯遊んだり、学んだり経験しながらじっくり時間をかけて出来したい。

そして上忍か中忍になつてある程度の収入が手に入るよくなつたら結婚して子供を作つて、子供が独立したら隠居してのんびり暮らしたい。

孫に「俺の人生は充実している。」と誇らしく色々聞かせてやりたい。

これが俺の夢や。忍者らしく無いけど…。」

カカシは真剣な顔で聞いている。どっちだろ？

疑つてゐるのか信じてゐるのか。北郷カズトのキャラ的にはあつてる筈なんだが。

「先生をして言つのは何だけど…。息子や孫に語る話が任務のことばつかりつてのはキツイ。それに極秘事項が沢山あるからほとんど喋れないだろ？」

忍者に相応しくないと思われるだろが、「充実した人生を送りたい。」これだけは誰に言われようが曲げない！俺の忍道だ。」

最後になんだかこの世界が好きそうな言葉で締めくくる。

現実世界なら「あつそ。」や「じゃあ忍者辞めた方が良くね？」と言われるだけだろ？がこの世界なら多分通用する筈だ。

「…………。」

しばらくカカシは黙つていたが

「…………そうか、聞いて悪かつたな。」

と言つてまた横になり寝出した。

信じた！？

まさかこれで信じるとは…。

ダメだつた場合に備えて幾つか他の回答も用意していたが、思つたより単純で助かつたな。

だつてどうやつてこの強さを獲得したかとかどうやって忍らしい考

えや明らかにある実戦経験についてとか何も話して無いもん。流石にこれを聞かれたらどうしようか悩んだんだけ簡単につわったな。

まあ、良いや。今はただ冷静にさつきと変わらずに読書してれば良い。変な行動は取らずに北郷カズトを演じるんだ。

ナルトとサスケも木登りをマスターした事でタズナの護衛に就くことになった。

その時にあのガキが面倒くさいことをほざいていたが無視だ。聞いて意味がある訳じゃ無いし、主人公達が勝手にやつてくれるから俺がどうこうする事は無い。

翌日、ナルトは前日の木登りで体力を限界近くまで使ったから末だに寝ていた。

「しようがない。ナルトは置いてくか」  
ナルトをタズナの家に置いてカカシは4人で行くことを決断した。  
しかしそこに俺が意見した。

「じゃあ俺も残ります」

いきなりの残る宣言にカカシは聞く。

「何でだ？ カズト」

「何か嫌な予感がするんです。

ナルトは動けないから護衛にならないんで俺が残つてこの家を守ります。

それに、今までカカシ先生がこの家にいたから何も無かつたんですけど、もしかしてガトーヌがツナミさんやイナリ君を人質に取りに来るかも知れませんから。

まあ、杞憂だとは思いますが、忍びはクサイとあたりをつけたら出遅れる前に準備しておくのが鉄則ですから

「カズトの言葉も一理あるとカカシは考える。

確かに今まで自分と4人の内誰かはいたからタズナの家族に危害は及ばなかつたが、今は自分が動けるようになったからこの家は無防備になる。

「それに、そっちにはようやく復活したカカシ先生がいるんですから俺が抜けても大した問題は無いでしょう」  
その言葉にカカシもそれもそうか。と納得した。

「分かつた。

「じゃあカズト。ツナミさんとイナリ君、それとナルトのことも頼んだぞ」

そう言つてカカシとサスケ、サクラはタズナの護衛について行つた。

「カズト君、護衛よろしくね」

自分達が狙われるなんて露程も思つてないからか、ツナミは笑顔で俺に言つ。

アンタ等結構危ない地位にいるんだぜ？

タズナが家族をあんまり大事に思つてないんだつたらそんなに心配はいらないがどう見てもタズナは家族を大事にしている。だつたら人質に取るに決まつてゐる。  
まあ、どうでも良いか。

一番の目的は再不斬と白に遭わない事だし。

流石にアイツ等を相手にするのはリスクが高すぎる。だから敢えて残つた。

これで死ぬ危険性は限りなく低い。後はナルトの用意めを待つだけだ。

しばらく時間が経つとナルトが起きた。

「あーーーー寝過ごしたアーーーー」

ナルトが大声を上げながら飛び起きた。よく寝起きにそんなに大声出せるな。

「ナルト、起きたか」

「あれ、カズト！ カズトがいるって事はまだ皆いるのか？」

希望を見つけたような目をしているが打ち砕く。

「いや、もう皆行つたよ。俺はツナミさんとイナリ君の護衛のために残つただけだ」

「何―――！やつぱな！やつぱな！オレ置いて行きやがつた！！」ナルトが俺の前で着替え始めた。何でお前の着替えシーンなんか見なきやいけねえんだよ。

「何だ？ ナルトもカカシ先生の所に行くのか？」

「おう！あつたりまえだつてばよ！」

「カカシ先生はお前は今日はゆっくり休めと言つてたけど……お前の様子を見る限り大丈夫そうだな」

「見てのとおり！元気一杯だつてばよー！」

「……じゃあお前はカカシ先生と合流しどけ。こここの護衛に一人もいらないから俺だけで十分だからな」

「よーし、それじゃ行くつてばよ！カズトも護衛頼んだつてばよー！」

そう言って元気良くナルトは出でていった。

これで原作通りに進む。何せナルトがいかないとサスケが死ぬからな。それもそれで良いけど。

しばらくして、気配を感じたから『完全なる隠匿』を使って家の裏口に移動したらガターの専属ボディーボードのゾウリとフラジがいた。

にしてもこいつら侍には見えないよな。この世界の侍や忍者って服装や髪型とか自由過ぎ。

家の中から「イナリーちょっと洗い物手伝つてーーー」「うーーん。

今トイレー！」という平和的な会話が聞こえ、二人が中にいる事が分かったからかゾウリとフラジはニヤツとして刀を構える。

「アンタ等何やってんの？」

いきなり後ろから声をかけられたからか、振り返りながら居合いをしようと二人は刀に手をかけたが、かけた瞬間に二人とも首を落とされて絶命した。

首は飛び、体は地面に倒れこんだ。

弱！

まあ、所詮侍。

一般人相手なら十分脅威だが、人間を越えている忍には敵わない。侍は人間だからな。  
死体を海に投げて処分した。後は偉大なる自然によつて分解されて母なる海に帰るだろう。

まさにエコ。

これによつて魚の餌が増えて多少は漁獲量が上がるかも知れない。死体は海に捨てるのが一番だ。

楽だし、臭わない。何より魚が肥えるから一石三鳥だ。

家に入りまた読書を再開する。

「何か音がしたんだけどどうしたの？カズト君

ツナミが聞いてきた。

「ええ、先程ガトーの手先がこの家のすぐ近くにいたので処分してきました。

ですがご心配なく、もう大丈夫です」

俺の処分発言に多少青ざめるが「そ、そう。ありがとう」とイナリに悟られないためか気丈な態度を見せる。

なかなか良い母親だな。母親の不安は子供に伝わるからな。毅然とした態度を取つてれば子供は安心する。

その後、イナリがトイレから出てきた時にはツナミは平然としていた。母親とはスゲエな。

さて、これでここはもう大丈夫だ。

後は念のために影分身を残して本体の俺は『完全なる隠匿』を発動させて橋に向かう。

ナルトはやはり来なかつた。まあ俺がいると分かつてたからな。無理に引き返すより一刻も早くカカシと合流したかつただろう。そのせいでイナリが島民を引き連れるイベントが消えたからな。代わりに俺が行かなくてはならない。

幾ら侍の群れと言つても忍なら殲滅はそんなに難しく無い。まあ殲滅する必要は無いがな。多少でも希望を持たせれば後は原作よろしく主人公組がなんとかしてくれる。本つ当、アイツ等こういうのは役に立つな。

俺が橋に着いた時は丁度ナルトが無意味にド派手な登場シーンをやつてる時だつた。

「うずまきナルト！ ただいま見参！！」

カツコイイとでも思つてんのか？ 思つてんだろうな。

「オレが来たからにはもう大丈夫だつてばよ！」

物語の主人公つてのは大体こーゆーパターンで出て来てあつちゅーまにイー敵をやつつけるのだアー！」

クソ長いセリフをワメくバカ。

そのせいで再不斬から手裏剣を投げられるが白が千本で撃ち落とす。相変わらず甘いなアイツ。

そして何故かナルトは白の術の外にいるというアドバンテージを捨てて術の中に入った。

何故術の中に入ってきたとサスケに怒られ、言い争いが勃発。アイツマジ役に立たたねえ。

その後、サスケが豪火球の術をして氷の鏡を溶かそうと試みるが無意味に終わり、ナルトと一緒になぶられる。

まあ、アイツ等じゃ普通に勝つのは無理だろ？。白を完璧に殺す氣にでもならないとな。

何故か木の葉の里は忍の国の癖に平和ボケしてるからな。まるで現代日本みたいに。

霧隠れみたいに同級生同士で殺し合わせるぐらいはしないと忍としては不完全過ぎる。

力カシみたいにかなりの経験を積めば別だけど…。

力カシと再不斬の戦闘も始まった。

力カシが写輪眼を発動しようとしたらその前に再不斬がクナイで斬りかかり、それを力カシが手の平で止める。

何か会話した後に結局は力カシが写輪眼を発動させるが再不斬が霧隠れの術を使い視界を遮る。

ていうか俺にも見えない。残念ながら俺の両目は普通だし、透視能力も無いから見えない。

シュルルル、シュルルル。キン、キン、キン。とか手裏剣の飛ぶ音や弾く音と微かな会話しか聞こえない。

多分、再不斬が写輪眼のメカニズムを説明してるんだろうな。写輪眼は目を見なきやそこまで脅威じやないからな。

万華鏡写輪眼は別だが…。

「きやああああ！」

サクラの悲鳴が聞こえ、霧が開けてみるとそこにはサクラとタズナを守った力カシが再不斬に袈裟斬り食らった場面だった。

よくあれで立てるな。普通なら痛みでのたうち回るぞ？

しかしその情況は最悪で、力カシも既にほとんど諦めた顔をしている。形勢が悪すぎるからな。

しかし

「サスケ君はあんな奴に簡単にやられたりなんかしないわ！！ナルトだつて！！」

というサクラの声で何故か力カシの目に希望が生まれた。  
意識はしてないだろうがサクラは良い仕事をした。あの言葉で力カシが希望を思い出したからな。

その時、どこからか禍々しいチャクラを感じた。

これが九尾のチャクラか…。

チャクラが具現化するなんてどんだけだよ。傷も完治していくし。ご都合主義過ぎ。

それをヤバいと見た力カシはポーチから巻物を出し、胸の傷に親指を当てて血をつけて巻物に線を引く。

そして印を結び口寄せをした。

口寄せって結構便利だよな。

俺はコピー能力があるから物を口寄せする必要は無いが生き物を呼べるのはデカイ。

残念ながら俺と契約してくれる奴がいるのか分からなが。

霧に隠れててよく見えないが何か「ゴゴゴゴゴ」という音がしたと思ったらドゴツとデカイ音がして何かが現れたらしい。

そして霧が晴れると再不斬に木の葉の額当てを着けた様々な種類の犬が再不斬に噛みついていた。

ありやあ痛えな。

もしも狂犬病とか病気を持つてれば大惨事だし。

止めとしてかカカシが印を結び、右手にチャクラを集中させてい  
る。

そしてチャクラが見える程に集中して雷のよう弾ける。

チチチと聞こえるからやはり千鳥だろ？。とりあえず「ヒュー」した。  
でもあの技、接近戦用だからあんま使えないな。わざわざ敵に近付  
くとか危ないし。

何かしばらく話してたけど遂に力カシが動き出した。

千鳥を再不斬に突き出し、そのまま再不斬の心臓を貫くかと思いつ  
や、突然再不斬の近くに氷の鏡が出て来て、そこから白が出て来て  
盾になった。

いきなりの事で力カシは止められず、そのまま白を貫いた。

そして白は力カシの手を掴んで固定し、力カシの動きを封じる。  
その好機を見逃さず、再不斬が「！」と力カシを斬りにかかる。

なかなか良い手だ。それなら高確率で力カシを殺れる。でも無理  
だろうな。

再不斬は無意識だと思うが白の死体を斬らないようにしてたから動  
きが遅い。多分白の死も影響してるんだろう。

だからダメなんだよ。自分以外に執着心を持つのは。

俺は自分の命に物凄い執着してるから自分以外は何でも切り捨てら  
れる。でも再不斬は鬼人とか言わてるけど典型的な人間だつた訳  
だ。

バカめ、自分以外を求めるなんて強欲過ぎ。

人間はそこまで万能じゃない。自分を守るだけで一杯一杯だ。  
だから俺は今までの人生でも寿命以外では死なかつた。  
自分だけを求めたからだ。

その後はジャンプ物が好みそうな展開だ。

冷徹に見えた再不斬は白の死に動搖してバカみたいな攻撃しかせず、  
力カシに良いようにやられていく。

そして再不斬の両手が使えなくなり、これで終わりかと思いつやそ

こに最後の難関が現れた。

ガトー率いる私軍達だ。

ガトーのやり方は普通なら間違つて無いんだけどこの世界ではダウトだ。

普通の世界ならあの数の兵達を用いれば簡単に勝てるが、この世界は人外魔境がうようよい世界。

ガトーは生まれる世界が違えばかなりの大物にもなれたかも知れないのにな。

さてクライマックスだ。

再不斬が白の敵討ち？ を仕掛ける。

ナルトからクナイを借りて、そのクナイをなんと口にくわえて大群に突っ込む。まさに特攻。

その自分の命を省みない攻勢のため、次々刀や槍などを突き刺されても進軍して後方に逃げ込んだガトーにも攻撃をかけた。

そして最後にガトーの首をハネて死んだ。

まさにカツコイイ死に方だ。

まあ、俺から見たら無駄死にだがな。

そのまま逃げる事も不可能じやなかつたのにな。

逃げて捲土重来すれば済む話なのにな。意味分かんない。

そしてもう一つの「都合主義展開として死んだ筈のサスケがこのタイミングで蘇生。

ていうか心臓が止まつてから10分以上は経つてる筈だからとつくに脳も死んでる筈何ですけど。

何それ？奇跡？

物語的にはこれでハッピーエンドだけどそつとう手くはいかない。

ガトーが死んだ事によつて入る筈だった金が無くなつたから私兵達は町を襲う現地調達に変更した。ある意味軍らしいな。

そろそろ俺の出番だから行くか。

大群の先頭部分に起爆札を仕込んだクナイを投げて先頭部分にいた数人を爆殺した。

「うわあ！！」、「ギャー————！」

など大群は突然の攻撃にビビり、止まる。

全員がクナイの飛んできた方向に目を向けると俺がいた。

「カズストオ！！」

ナルトが喜色満面な顔を向けている。

「よオ、悪いな。ちょっと遅れた」

とりあえずマンガっぽいセリフを言つ。

「実はやつぱりタズナさんの家族を人質にするために刺客が送られててたな。

そいつを尋問したら大群を引き連れて橋に向かつてるつて聞いたから急いで来たんだ」

出任せな情報を流す。まあもう事実確認は無理だがな。

何せ刺客は今頃海に浮いてるし、刺客に指示したガトーは首が無いから話せない。だからバレる事は無い。

大群はどうするか迷つてゐる。

たつた1人の加勢と言つても無傷の忍者。

オマケに人を殺す事に何の躊躇いも持つてない事はさつきの攻撃で分かる。

もしかして次は自分かも知れないからな。

更にナルトが

「よーしイ！オレも加勢するつてばよー！」

と印を結んで影分身で増えた。

「くつ…。」

これによつて大群は更に動搖する。敵が増えたんだからな。  
それを見て力カシはチャンスだと思い、残つてるチャクラを振り絞  
つて影分身で何十体も増える。

「ヒィ――ツ――！」

それを見て遂に大群は恐慌状態になる。強そうな忍者が何十人も増  
えれば当たり前だ。

「さーあ… やるかア…？」

力カシが低い声で言うと遂に大群は崩れて逃げ出す。

「やりませエ～ん！…」、「うわああ逃げとけエ～～～～～！」など  
悲鳴を上げて自分達がここまで来た船に逃げて急いで離岸していつ  
た。

「よつしゃ――！」

それを見たナルトは喜ぶ。

まあもし逃げずに来ても大して問題は無い。最悪この橋を爆断され  
ば大群を海に落として後は狙い撃ちにすれば良かつた。

最終手段として大瀑布の術で全員殺すというのもあった。勿論目撃  
者である力カシ達もな。

そして最後は何故かこの季節に雪が降るといつあり得ない異常氣  
象が起きて終わりだ。どんだけ奇跡が起くるんだよ。  
最早必然だな。

何せ1回だけなら偶然、2回起きたら奇跡、3回起きたならそれは  
必然だ。

何か必然だと分かるとこの雪もスゲエ安っぽく見えてくる。何か紙  
吹雪を見てる気分だ。

にしても…。

俺空気過ぎねえ？助けに来たのに誰も礼一つ言わないし。  
酷い…。

波の国から帰り、しばらくは簡単な任務が続いた。畠仕事やお使い、ペット捜索。どれも忍者じゃなくても出来る内容だ。

まあ、中忍試験のための最低任務経験を得るためにだけな。ていうかたがだか8任務をこなせば中忍試験を受けるとか早すぎないか？普通の下忍はほとんどが上記みたいなDランク任務で敵地侵入のCランク任務なんてほとんど無い。

これでは経験など得られる筈が無い。だから大抵は倍以上の任務をこなしてから中忍試験に参加させるんだが、何故今年はルーキーが全員参加なんだ？

頭おかしいんじゃね？

とりあえず今日も任務のために集まった。

俺が待ち合わせ場所に行つたらサクラとサスケは既にいた。何で早く来るんだろう？ どうせカカシは2、3時間は軽く遅刻するのが慣例なのに。

「よオ」

と声をかけると

「おウ」「おはよう、カズト」

と何時も通りの挨拶を交わし、後は無言だ。別に話すこと無いしな。各々ボーッとするか俺みたいに忍具の手入れや読書をしてヒマを潰す。

そして少し経つと

「グツ！モーニーン！…サクラちゃん…！…デカイ声を上げながらナルトが来た。

そしてナルトはサスケと目が合つと「……」しばらくお互に無言に

なり、「フン！」とお互に目をそらす。

まさにやつてることはガキだな。互いに意識してるんだろう。

サクラはこの雰囲気をどうにかしたいのか俺を見てくるが、俺は別にどうでも良いので無視する。

それで仕方ないのでカカシが早く来るのを期待するがそれは「じ」とく裏切られるのだった。

何時も通り3時間程経つたころ

「やーー諸君おはよう！今日は道に迷つてな……」

とこう見え見えなウソをつきながらカカシが来た。

それに「いつも真顔で大ウソつくなっ！……！」とサクラが突っ込む。最早日常だ。

そしてカカシから任務を言い渡される。今回は草むしりらしい。地味に面倒だな。

「あのさーあのさーカカシ先生さー！オレらフ班、最近カンタンな任務ばつかじやんー？」

オレがもつと活躍できる何かこうもつと熱いのねーのー？こう、オレの忍道をこうー！心をこうさあー！？」

ナルトの不満が爆発する。

そんなに死に急ぎたいのか？ それとも再不斬と戦ったAランク任務が恋しいのか？ マジ勘弁。

ガキ特有の英雄願望か？ 僕には無かつたけどな。

そして任務終了。

ナルトがサスケに敵対心剥き出しにして多重影分身で張り切った結果、早く終わつたがナルトはボロボロ。現にサクラに支えられて歩いているという情けなさ。

フ

ナルトがため息をついていると

「もう、ムチャするからよオ！」

腰を支えて、一筋のカツラが、注意する

ナヌアツバアニガ爾ニミツハ

サスケのホヤホヤが聞こえたのが、

一  
ノ  
キ  
イ  
リ  
サ  
ヌ  
ケ  
一  
ノ  
キ  
イ  
リ  
サ  
ヌ  
ケ

ナルトは簡単に切れて暴れようとするか

「これ以上暴れたらとどめますわよ！」

サクラに押さえられて終わる。

それを見て いる力カシは

「ん――。最近チームワークが乱れてるなあ……」

アーチーが口に呟く。アーチーが口に呟く。

と云ふやうに自分の事は分かってないらしい

そりや お前たゞ二三トシが子  
そんたは不思はカリを作りたくね

「ならな……オレより強くなじやいーたマガ」

サスケの言葉に互いに睨み合う。子供だねえ。

何故かガキの頃は他人に借りを作りたがらない。それが人間関係を

丹波に立つるには

ピマー、ハラロロー。ヒツジの鳴き声が響き渡る。

あれは緊急招集命令。

それを聞いたカカシは

「やーーてどー! そろそろ解散にするか。オレはこれからこの任務の報  
告書を提出せんやならん……」

۱۱۰

それを聞いてサスケは「……なら帰るぜ」と去る。それに続けて「じゃ俺も」と俺も帰る。

馴れ合つキャラぢやないから誰も止めない。止められても断るけど。

里を見渡すとちらほらとだが他国の額当てを着けた忍を見かける。完全に中忍試験が始まるらしい。

ある意味これこそが最大の死亡フラグであり、面倒なイベントだ。何せ大蛇丸がいやがるからな。アイツに目をつけられたら最後だ。だから慎重に慎重に行動しなくては…。

だつてアイツ首落としたぐらいじゃ死なないだろうからな。そんな面倒な奴の相手は原作組に任せるのが一番だ。

少し経ち、朝早くから力カシからの集合命令があつたので仕方なく集合場所に集まつたが恒例のことく力カシは大遅刻。

何故か朝つぱらからハイテンションなサクラとナルトは無視してボーッと待つ。

「やあ！お早う諸君！！今日はちょっと人生という道に迷つてな…」  
何時も通り適當な理由を上げる力カシ。

「ハイ！嘘ツ！…ちつとは反省しろ！」

サクラが叫ぶ。最近メリッキが剥がれてきたな。

「ま！なんだ…。いきなりだが、お前達を中忍選抜試験に推薦しちやつたから」

まるでコンビニに買い物に行つてくるくらいのテンションでとんでもない事を言う力カシ。ていうかやっぱ俺も入るのか？

だつて中忍選抜試験つてスリーマンセルでしか受けられないからもしかして俺か、誰か1人は受けられないかとも思つていたがそれは無かつたらしい。やっぱ特例？

「何ですつて…！」

サクラが反応する。とんでもない事だからな。

「志願書だ」

カカシが中と大きく書かれている紙を渡してくる。原作と違つて4枚だけだ。

「カカシ先生大好きーーっ！」

ナルトがカカシに抱きつぐ。そんなに出たかったのか？

「…と言つても推薦は強制じゃない。受験するかしないかを決めるのはお前達の自由だ。受けたい者だけその志願書にサインして明日の午後4時までに学校の301に来ること。以上！」

そう言つてカカシは瞬身で消えた。

ていうかこれつてこの前した俺の決意表明を完全に無視してねえか？ 明らかに早すぎるし。俺の意見など無視か…。

とりあえず家に帰り嫌だけど志願書にサインした。

だつて俺が出ないと多分アイツ等も失格だろうし。アイツ等がただのモブなら気にしないが、残念ながらモロ主役。出ないとどうなるか分からぬからとりあえず出なればいけない。全く、疫病神を背負つてる気分だ。

次の日

待ち合わせ場所に行くと案の定サクラとサスケはもういた。コイツ等真面目だよな。

サクラの元気が無いが別にどうでも良いので無視。

そして最後にナルトも来た。

4人で久々にアカデミーに行き、行列についていつて階段を昇る。

3階の301が目的地なのに、ほとんどの奴等は2階にしか上がりない。完璧幻術に引っかかってるな。情けない。

そして俺達もとりあえず行列に従つて2階に上がり、教室を目指す

とそこには受験生達の集まりがあった。

何を見ているのかと見てみれば先輩下忍が後輩達を間引いていた。ていうかチャクラ量やコントロールから変化で化けた上忍か中忍と分かる。これが第1関門なんだろ。う。

リーとテンテンがワザとやられた振りをしているのを無視してサスケは幻術を解けと迫る。

周りの奴等は「なに言つてんだアイツ…」と分かつてなかつたらしいが。

ダメ押しとしてサクラが「だつてここ2階じゃない」と看破したため、幻術は消えて教室の標示が301から201に変わった。

幻術を見破つたから次なる試験としてか変化で化けた下忍がサスケに蹴りを入れる。サスケもそれに応戦しようとしたが、その前にリーが入り、両方の蹴りを掴んで止める。

あの速さは相変わらずスゲエな。何度も訓練風景を見てたけど下忍の域を越えてるぜ。

そしてリーの行動をネジが注意するがリーはサクラを見て顔を赤くする。何て分かりやすい。

そしてリーはサクラの所に近付き、

「ボクの名前はロック・リー。サクラさんと言つんですね…。

ボクとお付き合いしましょう…死ぬまでアナタを守りますから!」

！」

歯をキラーンと光らせ渾身の告白をするがサクラは

「ぜつたい…イヤ…あんた濃ゆい…」

と完膚無きまでに断られた。

リーはガックリと肩を下ろす。それを見てナルトは笑っている。傍らではネジがサスケに

「おい、そこのお前…名乗れ……」

友好さが微塵も見えない話しかけをしていた。

「人に名を聞く時は自分から名乗るもんだぜ…」

「サスケも同じように返す。

「お前ルーキーだな…歳いくつだ?」

「答える義務はないな…」

会話になつてゐるんだかなつてないんだか分からぬ事をした後に互いに背を向けて終わりを迎えた。

「さあ！サスケ君、ナルト、カズト行くわよー！」

何故かテンションが高いサクラがナルトとサスケの手を引っ張りながら3階に行く。俺もついていく。

そして向かつてゐる途中で

「田つきの悪い君、ちょっと待つてくれ！」

リーが声をかけてきた。もしかして俺もか？ とも思つたが

「何だ？」

とサスケだけが返事した。やっぱ自覚はあるのか。

「今ここで、僕と勝負しませんか？」

「今ここで勝負だと…？」

「ハイ、ボクの名前はロック・リー。人に名前をたずねる時は自分から名乗るもんでしたよね？」

「うちはサスケ君…。」

「フン……知つてたのか」

「君と闘いたい！」

リーが構えて言う。だからジャンキーは困るんだ。面倒くさい。死ぬまでこうだからな。

何か全員の注目があつちに行つてゐるから無視して先に行く事にした。俺がいる意味無いし。

階段を上がり3階の301教室の前に行くとカカシが待つていた。

「…ほう、意外だつたな。カズトは来ないと思つてたよ」

カカシが言つ。やっぱワザとか。

「…まあ、もしこれが個人での試験なら来なかつたでしちうが、班員全員が受験しないと受けられなシスステムらしいのでね。流石に俺1人の我が仮で3人の受験資格を取り上げるのも何ですからね」

本当はなるべく原作を破壊しないように注意しただけだけどな。少なくとも俺が里にいる間は変えない。

俺に都合が良ければ変えるけど。

「へへへ、知つてたんだ?」

「調べましたからね。情報源は秘密ですけど」

これぐらいなら調べれば誰でも簡単に分かる。

「それと、個人戦になつて、もしヤバい状態なら迷わず棄権しますから。そんときや来期を目指します」

「まあ、個人戦になつたらお前の自由だからな。お前の判断に任せるよ」

その後ようやく3人も来た。

「…そうかサクラも来たか…。中忍試験…これで正式に申し込みできるな」

「…どうしたこと…?」

「実のところ、この試験、初めから3人1組でしか受験できないことになつてる…。お前らは特例的に4人1組だが」

「え?でも先生、受験するかしないかは個人の自由だ…って。

…じゃあウソついてたの?」

「…もしそのことを言つたならサスケやナルトが無理にでもお前を誘うだろ?…」

たとえ志願する意思がなくてもサスケに言われば…お前はいい加減な気持ちで試験を受けようとする…。サスケとカズト…ま!ナルトの為に…つてな」

「じゃもしサスケ君とナルト、カズトの3人だけだったら？」

「ここで受験は中止にした。この向こうへ行かす気はなかつた…」

「だがお前らは自分の意思でここに来た。オレの自慢のチームだ。さ

あ、行つてこい！」

まさにジャンプなノリだな。

「よし！…行くつてばよ…！」

何故かナルトが宣言してサスケとサクラが扉を開ける。俺は見てるだけ。

中に入ると既に大勢の下忍がいた。まあ多分俺達が最後だらうしな。

「サスケ君おつそーい！」

いきなりサスケにいのが抱きつく。

「コイツの何が良いのだろう？」

成績？ 顔？ 何かあるミステリアスさ？ まあ良いか。

サクラといのが何か言い合つていると横からシカマルとチョウジの第10班が現れ、更に奥からキバ、ヒナタ、シノの第8班が現れた。ポケモンみたいにゾロゾロ現れやがつて。

何か久々に集まつたからか割かしデカイ声で会話していると

「おい君たち！ もう少し静かにした方がいいな…。」

カブトが現れた。コイツも要注意人物なんだよな。ある意味大蛇丸よりイカれてるから。

「君たちがアカデミー出たての新人10人だろ？ カわいい顔してキヤツキヤツと騒いで…まったく。

「ここは遠足じゃないんだよ」

「誰よーーアンタ？ ホラそーに！」

「いのが不機嫌そうに言つ。

「ボクはカブト。それより辺りを見てみな

「辺り？」

全員が後ろを振り返ると雨隠れの額当てをした3人組が睨んでいた。

「君の後ろ…あいつらは雨隠れの奴らだ。気が短い。

試験前でみんなピリピリしてる。どつかれる前に注意しつつと思つてね」

カブトがそう言つと全員黙つた。

そして静かになつたのが分かつたのか睨み付けていた奴等も前を向いた。

「ま！仕方ないか。右も左も分からぬ新人さん達だしな、昔の自分を思い出すよ」

「カブトさん…でしたっけ？」

「ああ…」

「…じゃあなたは2回目なの？」

サクラが聞く。ある意味スゲエな。もつ周りの奴等の警戒心が薄れている。

「いや…7回目。1Jの試験は年に2回しか行われないからもう四年目だ」

そこまでバレないのは素直に賞賛するよ。

「へーじゃあこの試験について色々知つてんだ…！？」

「まあな」

「へーカブトさんつばさーいんだー」

その言葉に気を良くした風に見せたカブトは

「へへ…。じゃあかわいい後輩にちよつとだけ情報をあげようかな。この忍識札でね」

とカードを出してきた。

「忍識札？」

「簡単に言えば情報をチャクラで記号化して焼きつけてある札のことだ。この試験用に四年もかけてやつた。札は全部で200枚近く

ある

その後はどこかの里が何人受験者を出しているかやリーや我愛羅の情報を見せてくれた。

にしてもリーはDランク任務20回、Cランク任務11回をこなしてるのか。まあ普通これくらいの経験は必要だよな。

俺達なんてDランク任務8回、A? ランク任務1回だからな。経験少なすぎ。

そしてナルトが震えていたかと思ひきや突然

「オレの名はうずまきナルトだ!! てめーらにやあ負けねーぞ!!」

大声で教室にいる受験生達に宣言する。

当然ながら全員がこっちを注目してくる。しかしナルトは頭を後ろに組んで笑つてるだけ。どんだけハート強いんだよ。

サクラが「み…皆さん冗談です…。こいつかなりのバカでして…」とフォローする。

カブトが「フ…、まつたく…」と言つた直後に音の忍3人が動き出した。

どうせ音の里はマイナーだと言われたのがムカついたのだろう。しかし喧嘩を売る相手がカブトつてのが笑えるな。だつてカブトも実質音忍だし。

音忍の1人が集団からジャンプしてカブトに剣だかクナイだか分からぬ刃物を投げ、カブトがそれを避けるともう1人の音忍が現れて何か穴が空いている籠手を着けた右腕で殴りにかかる。

しかし当てるつもりはあまり無かつたのか大して速くなく、カブトは避ける。

しかし避けた筈のカブトのメガネが割れる。

そしてカブトはいきなり吐き出した。

確かになかなか強いよなあの攻撃。

「なーんだ…大したことないんだなあ。四年も受験してるベテラン

のくせに」

「アンタの札に書いときな、音隠れ3名、中忍確実つてな」  
あの程度の挑発に乗る奴が無理に決まつてるだろ。

ていうか何でこの世界の忍者はやたら自己主張が強い奴等ばつか  
何だろう。  
俺みたいに大した個性が無い奴こそが忍者らしいと思つんだが…。

「静かにしやがれどぐされヤローデもが……」  
「デカイ煙と一緒にデカイ声が響いた。

「な……何だ？」

周りの受験生達も驚く。

煙が消えるとそこには同じ服を着て木の葉隠れの額当てを着けた男女がかなりの数いた。

何でコイツ等もいちいちデカイことやるかな……。まあ今回は暴走を抑えるためというのもありそうだけど。

「待たせたな……。『中忍選抜第一の試験』 試験官の森乃イビキだ……」  
その雰囲気に受験生達は飲み込まれる。

イビキは音忍を指差して

「音隠れのお前ら！ 試験前に好き勝手やつてんじゃねーぞコラ。いきなり失格にされてーのか？」

「すみませんねえ……なんせ初めての受験で舞い上がつてしまいまして……つい……」

「フン……いい機会だ、言つておく。

試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとしても相手を死に至らしめるような行為は許されん。

オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かつたな」

それって結構難しいよな。殺してはダメってかなり制限つくし。  
まあ、一次試験なら問題無いけど。

「ではこれから中忍選抜第一の試験を始める……。志願書を順に提出して代わりにこの……座席番号の札を受け取り、その指定通りの席に着け！ その後、筆記試験の用紙を配る」  
まさかのペーパーテストに驚く者達もいた。

特にナルトは「ペツ…ペーパーテストオオオオ…！」と叫ぶ。

各自志願書の代わりに受け取った座席番号に従い着席すると見事に班員とバラバラになつた。

そして次に試験官が試験用紙を各席に置いていく。勿論裏表紙で。「試験用紙はまだ裏のままだ。そしてオレの言ひことをよく聞くんだ。

この第一の試験には大切なルールつてもんがいくつがある。黒板に書いて説明してやるが質問は一切受け付けんからそのつもりでよく聞いとけ」

「第1のルールだ！ まずお前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で10問。各1点…。そして試験は減点式となつてる。つまり問題を10問正解すれば持ち点は10点そのまま、しかし問題で3問間違えれば持ち点の10点から…3が引かれ7点という持ち点になるわけだ」

「第2のルール…。この筆記試験はチーム戦。つまりは受験申し込みを受け付けたチームの合計点数で合否を判断する。つまり合計持ち点をどれだけへらさずに試験を終われるかをチーム単位で競つもらつ」

幸いにも俺達は4人1組だから他チームよりも持ち点が多い。だからサクラも別に慌てない。仮にナルトが0点でも俺達でカバー出来るからな。

「第3に、試験途中で妙な行為、つまり「カンニング、及びそれに準ずる行為」を行つたとここにいる監視員たちに見なされた者は…その行為1回につき持ち点から2点ずつ減点させてもらつ。つまりこの試験中に持ち点をすっかり吐き出して退場してもらつ者も出るだろう」

「いつでもチェックしてやるぜ」

さつき変化で下忍に化けていた中忍が言つ。

「不様なカンニングなど行つた者は自滅していくと心得てもらおう。

仮にも中忍を田指す者。忍なら……立派な忍らしくすることだ」

立派な忍がいるはず無いけどな。忍なんて工作員と同じだぜ?

「そして最後のルール……この試験終了時までに持ち点を全て失つた者……および正解数0だった者の所属する班は……全員道連れ不合格とする……」

その言葉にサクラとサスケは動搖する。何せ自分達の班にはガンがいるからな。

「試験時間は一時間だ。

よし……始める……！」

その言葉と同時に全員がプリントを表にする。  
しかし第1問目が暗号文か……。

様々な書物を「コピー」してきたけどそれは忍術とか忍関係の事ばかりだからこいつ普通の勉強はサッパリ分からぬ。ヤベエ、何か学生時代を思い出す。

ていうかたかだか12～16、7ぐらいの奴等に高等数学の問題解かせるなよ。無理に決まつてるだろ?

別に問題を解く必要は無いがこのまま何もしないのはヒマだから俺もカンニングするか。

『完全なる隠匿』を発動させてる影分身を使い、堂々とカンニングする。

確かに背中に勉とか書いてある奴が答えを全部知つてた筈だからそいつの答案を全部見てきて、見終わったら分身を解いて情報を取り込めば良い。後はその通りに丸写しすれば終りだ。

しばらくして影分身が見終わったのか情報が入ってきたので答えを全部書いてプリントを裏返す。カンニング防止のためにな。

何人か俺の答えを覗こうとしていた奴等がいたからな。後はただ待つてれば良い。

「102番、立て、失格だ」

「ちつ…ちくしょう…」

「23番失格!」「

「嫌だ〜〜〜!!!」

「43番と27番失格!」

次々失格者が増えていく。

その時、バン!…というデカイ音を鳴らして砂隠れの奴が立ち上がる。

「オレが5回もカணニングした証拠でもあんのかよ!…」

アンタラホントにちゃんとこの人数を…」

抗議してきた砂隠れの下忍を瞬身で移動した木の葉の中忍が壁に叩きつける。

「ぐつあ!…」

「いいかい…私達は中忍の中でもこの試験の為に編成されたエリートなのだよ。君の瞬き一つ見落としあしないんだよ。

言つてみればこの強さが証拠だよ」

スゲエ理論だな。まあそう言うしか無いしな。

でもチエックされてない奴等のは分かつてないのだろうからそこまで実力は無さそう。

「よし!これから第10問目を出題する…。…とその前に最終問題についてのちょっとしたルールの追加をさせてもらう」

その言葉に下忍達は動搖する。突然ルールが追加されるなんて堪つたもんじやないからな。

その時、丁度カソクロウが監視員に化けた人形と一緒に戻つて来た。

「フ……強運だな。お人形遊びがムダにならずにすんだなア…?」

まあいい座れ」

「では説明しよつ。

これは…絶望的なルールだ。

まず…お前らにはこの第10問田の試験を…取けるか受けないかのどちらかを選んでもらつ…！」

「え…選ぶつて…！もし10問田の問題を受けなかつたらどうなるの…？」

「受けないを選べばその時点での者の持ち点は0となる…。つまり失格！もちろん同班の全員も道連れ失格だ」

「ど…どうこつだ…？」

、「そんなの受けれるを選ぶに決まつてゐじやない…！」

「…そして…もう一つのルール。

受けるを選び…正解できなかつた場合…その者については今後、永久に中忍試験の受験資格を剥奪する…！」

別に俺は良いんだけど。その方がありがたいし。

「そ…そんなバカなルールがあるか…！現にここには中忍試験を何度も受験している奴だつているはずだ…！」

「クク…ククククッ。

運が悪いんだよ…お前らは…今年はこのオレがルールだ。その代わりに引き返す道も「えてるじやねーか…」

「え？」

「自信のない奴は大人しく受けないを選んで…来年も再来年も受験したらいい。

……では始めよう。

この第10問田…受けない者は手を擧げる。番号確認後、ここから出でもらおつ」

「…してもやっぱ矛盾があるな。

今年はオレがルールとか言つてもたかだか特別上忍」ときが他国の

忍達の受験資格を奪うなど不可能。

もしもその国々のトップ達が出て来て宣言したらかなりの説得力があるがな。流石にそれなら誰もが信じるだろつ。

これを言えば全員合格も可能だが別にする意味無いから黙つとく。

しばらく誰も手を挙げなかつたが、遂に1人が手を挙げた。

「オ…オレはつ…。……やめる…受けないッ…！  
す…すまない…！…源内…！…イナホ…！」

初めての脱落者。

この空氣で手を挙げるのほとんどない勇気と決断力が必要だ。素直に賞賛する。

1番始めと2番には大きな大きな差がある。正直、2番目からは惰性で進む。

重さが全然違う。現に1番始めにリタイアした奴等のガックリさ半端無かつた。

次々に我も我もとリタイアしていく者が続く。1番始めの奴等みたいなガックリ感や喪失感はほとんど無く、帰つていく。所詮他者に追従していく事を選んだ奴等。

まあ、社会で生きていくならその方が生きやすいし、残れるからあながら間違つちゃ いないけど。

脱落していく奴の波が消えて、また静かな感じになつた所でナルトが手を挙げた。

リタイアかと思ひきや手を机に叩きつけて

「なめんじゃねーーーーー！オレは逃げねーぞ！」

受けてやるー！もし一生下忍になつたつて…意地でも火影になつてやるから別にいひつてばーーー！

怖くなんかねーぞーーー！」

いきなりの決意表面。そして何と自己中心的発言。他の班員の事なんて欠片も考へていないんだろう。

何でこんな奴が主人公なんだろう？ 明らかにジャンプ物に必要な友情が欠けてるぞ？

努力もしてないし。唯一合つてるのは勝利だけだ。

「もう一度訊く…。人生を賭けた選択だ。やめるなら今だぞ」

「まっすぐ自分の言葉は曲げねえ…。オレの忍道だ！…」「

だつたらお前、火影にならない方が良い。

だつて国のトップは妥協が最も大事なんだぞ。独裁者だつて妥協しないと国が成り立たない。それは歴史が物語つている。

俺が皇帝してた頃だつて好き勝手してたようで結構妥協してた。理想は叶うものじゃ無いからな。

しかし周囲はナルトの言葉に感化されてるのか不安がる顔は明らかに減つた。

「いい決意だ。

では…ここに残つた全員に………「第一の試験」合格を申し渡す

！…！

「……！」

全員がいきなりの言葉に呆然とする。

「ちょ…ちょつと、どうこうことですか！？ いきなり合格なんて

！10問目の問題は！…？」

「そんなものは初めから無いよ。…言つてみればさつきの2択が10問目だな」

さつきまでの雰囲気とさつてかわって笑顔で言つてやが。雰囲気変わります。

「え！…？」

「ちよつと…じゃあ今までの全9問は何だったんだ…！？」

「…無駄じゃないぞ。9問目の問題はもうすでにその目的を遂

げていたんだからな……」

質問したテマリはまだ分からぬ。

「君達個人個人の情報収集能力を試すという目的をなー！」

「？…情報収集能力？」

イビキがこの試験についての説明をするが受験生達はまだ納得い  
つてない。

「じゃあ…こんな2択はどうかな…キミ達が仮に中忍になつたとし  
よう…。任務内容は秘密文書の奪取…。敵方の忍者の人数・能力・  
その他、軍備の有無一切不明。さらには敵の張り巡らした罠という  
名の落とし穴があるかも知れない…。

さあ…受けるか？受けないか？」

俺一人なら受けるかもな。それなら敵も罠も無意味だ。

「命が惜しいから…。仲間が危険にさらされるから…。危険な  
任務は避けて通れるのか？

答えはノーだ！

ヒデヒな。

だから下忍以上にはなりたくないんだ。拒否権が無くなるし、責任  
問題が発生するからな。

「どんな危険な賭けであつても、おりることのできない任務もある。  
ここ一番で仲間に勇気を示し…。苦境を突破していく能力、これが  
中忍という部隊長に求められる資質だ！」

いざという時、自らの運命を賭せない者、来年があるさと不確定な  
未来と引き換えに心を揺るがせ：チャンスを諦めて行く者。  
そんな密度の薄い決意しか持たない愚図に中忍になる資格などない。  
とオレは考える…！」

まさに俺の事を言つてゐるのか？と思える言葉だな。

残念ながら俺は無理なら諦める派だけどブレではないぜ？ どん  
なときも自分優先。

道路標識みたいにこれは譲らない。

「受けたるを選んだ君達は難解な第10問の正解者だと黙つていい！これから出会いのあるう困難にも立ち向かっていくだらう…。入り口は突破した…「中忍選抜第一の試験」は終了だ。キミ達の健闘を祈る！」

「おっしゃ————！祈つてて————！」

合格と分かったのでハイテンションになるナルト。

全員がホッとして息ついている時にガシャン！…と窓を割りながら黒い塊が侵入して来た。

そして黒い塊からクナイが2本飛び出し、天井に突き刺さり、黒い布を両方に引つ張り、広げる。

そこには第2試験官、みたらしアンコ見参。

という明らかに前もって準備していたんだろう紹介文があった。

「アンタ達よろこんでる場合じゃないわよ！…

私は第2試験官！みたらしアンコ！！次、行くわよ次イ！！！

ついてらっしゃい！！！

片手を挙げてカッコ良くポーズを決めるが、いきなりの紹介に全員ポカーン状態。

いつの間にか布に追いやられていたイビキが布の端っこから半身を出して

「空氣読め…」

と言つ。

それに自覚があつたのかアンコも顔を赤める。アウェー感は分かるらしい。

アンコは会場を見渡して

「79人…！？」

イビキ！26チームも残したの！？

今回的第一の試験…甘かったのね！」

「今回は…優秀そうなのが多くてな

「フン！まあいいわ…次の「第一の試験」で半分以下にしてやるわよ…！」

ああ～～ゾクゾクするわ！

詳しい説明は場所を移してやるからつられてらっしゃい…！」

アンコに連れられて教室を後にする受験生達。

遂に本番だ。波の国なんか比較にならない程ヤバいからな。ここからはリアル忍者並みに警戒して気配を消して極力目立たないよつにしなくては。

アンコに案内された場所は田の前に金網が張られて厳重にロックされた樹海があつた。

何か屋久杉みたいな木で森が形成されてんだけど?

日本が誇る世界遺産が何か小っちゃく見える。

「ここが「第一の試験」会場、第44演習場…別名「死の森」よ!」

なんとベタな名前。必ずここに森あるよな。

「ここが死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ」

その言葉に何故かナルトがムスッとして

「死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ」

なーーんておどしてもぜんつぜんへーき!怖くないってばよ!」

「そう…君は元気がいいのね」

二コッとアンコは笑うがクナイを取り出し、ナルトに投げた。

そのクナイはナルトの頬を掠め、皮膚を切つた。そしてクナイはナルトの後ろにいた番傘を被つた下忍?の長い髪も一本切つた。

「アンタみたいな子が真つ先に死ぬのよねエ、フフフ…。

私の好きな赤い血ぶちまいてね」

ナルトの後ろに瞬身で移動したアンコはナルトの頬の傷から滴る血を舐める。

その瞬間、アンコの背後から殺氣を感じてアンコはまたクナイを取り出して攻撃しようとした

「クナイ…お返ししますわ」

長い長い舌でクナイに巻き付け、アンコにそのまま渡す。

「わざわざありがと」

アンコも笑顔で受け取る。

まさに師弟だな。発想が似てる。

ピィーンと張り詰めた空気が出来たが

「でもね……殺氣を込めて……私の後ろに立たないで。早死にしたくな  
ければね……」

アンコはクナイを受け取る。

「いえね……赤い血を見るといつにウズウズしちゃう性質でして。

……それに私の大切な髪を切られたんで興奮しちやつて……」

そう言って長い舌を口に戻す。どうやって長い舌を収納してるんだ?

「悪かったわね。

どうやら、今回は血の氣の多い奴が集まつたみたいね……。

フフ……楽しみだわ……」

何が楽しみなんだか。凡人の俺には理解不能だ。

「それじゃ、第一の試験を始める前にアンタらにこれを配つておくれ!  
ね!」

懐から紙の束を出す。そこには大きく同意書と書いてある。

「同意書よ。これにサインしてもらいうわ。

……じつから先は死人も出るからそれについて同意をとつとかないと  
ね!私の責任になっちゃうからさ~~~」

アハハ。と笑顔でアンコは告げる。受験生の大半の顔が青ざめる。

「まず第一の試験の説明をするから、その説明後にこれにサインして  
班ごとに後ろの小屋に行つて提出してね」

同意書が配られた。内容を読むと如何なる怪我、もしくは死亡した  
としても自己責任という内容だった。ヒテヒ。

「じゃー!第一の試験の説明を始めるわ」

アンコの説明によるところの森の中央の塔を田指す」と。

森は円状になつていて塔までの距離は約10km。

そして天の書と地の書の巻物を揃えて5日以内に塔に集合する。

スタートは同意書と巻物を交換する際に44個あるゲートのいずれ

かに振り分けられる。

巻物は1チームに天か地の巻物を渡すから奪い合え。  
ちなみに巻物を途中で開けてはいけない。開けた時の罰則は開けた  
のお楽しみ。

食料などは自給自足。完全サバイバルで行う。森には人食い猛獣や  
毒虫、毒草があるので注意。

失格条件は時間内に巻物を揃えて塔まで3人もしくは4人で持つ  
てこれなかつたチーム。

班員を失つたか再起不能者を出したチーム。

途中ギブアップは認めず、5日間は原則森から出られない。以上だ。

俺達は天の書を手に入れて12番ゲートに待機になつた。  
そして開始時刻になりゲートが開けられた。

「よつしゃあ！！行くぞ！！」

ナルトが何時も通り気勢を上げる。それは通過儀礼なのか？

しばらく進んでいるとうわあああ！！といつ悲鳴が聞こえた。

「！！」「……今の人悲鳴よね！？」

サスケとサクラが反応する。

「な、なんか緊張してきた……」

「ど、どーつてことねーつてばサクラちゃん！」

ナルトは強がるが確実にビビっている。

「……オレつてばちつとしょんべん……」

ナルトは目の前の草に向かって立ち小便をしようとしたがその前に  
サクラが殴つた。

「レディの前で何さらそつとしてんのよ！…草陰行きなさいよバカ

！…」

「テーーー！」

殴られたナルトは素直に奥の方の草陰に入る。

少しした後に

「あーーすっげー出た〜。すっきりーー！」

草陰から出てきたナルトは明らかに変だつた。

「だからレディの前でそーいう……」

サクラがまた殴ろうとしたらその前にサスケがナルト？ の顔に回し蹴りをかました。

「サ…サスケ君…いくらなんでもそこまでしなくたつて…」

何も知らないサクラはサスケを諫めようとする。

「な…なにすんだつてばよ！！」

ナルト？ が立ち上がる。

「本物のナルトはどこだ！」

「え！？」

「きゅ…急に何わけわか…」

ナルト？ がしゃべるうとしたらサスケが遮る。

「手裏剣のホルスターが左足についてる。あいつは右利きだ。

それに決定的な違いはさつきあの試験官につけられた傷跡がお前に

はない…。てめーはナルトより変化がへタだなニセ者ヤロー！」

サスケのその言葉にこれ以上は無理と悟ったのか変化を解き

「アンラッキー！バレちゃ仕方ねえ！！巻物持つてんのは誰だ！？」

中途半端なガスマスクを着けた雨隠れの忍が現れた。

その言葉に全員が戦闘体制を取る。

すぐに殺せるけど「イツを殺す事によってほんの僅かでも大蛇丸に注目されたくないからただ黙つて見てる。

雨隠れの忍がこっちに突つ込んで来たらサスケはジャンプして火遁、鳳仙花の術で火の玉を数個吐いて攻撃するが全部避けられ、クナイでの戦闘になつた。

サスケが敵を追撃するとそこには

「サスケーーーー！」

簾巻きにされたナルトが横たわっていた。

見捨てりや良いのにサスケはナルトにクナイを投げて渡す。

「ほらスキができたあ、ラッキー！！」

雨隠れの忍はナイフやクナイを数本投げる。

サスケは木に隠れてやり過ごすが、そのクナイには起爆札が仕込まれていたので爆発した。

それを避けるためにサスケは態勢を崩しながら着地する。

「これぞラッキー！動くと殺す！巻物をおとなしく渡せ！！」

サスケの背後に回りクナイで脅す。確かに殺したら人質にならないからそうするしかないな。

まあ、俺なら全員殺してから荷物を探るけど。

しかしその時、やつと繩から脱出したナルトが雨隠れの忍に向かってクナイを投げた。

敵はそれを避けようとジャンプした。サスケはナルトが投げたクナイに片足で乗り、チャクラで吸着させてクナイを敵に向かって蹴り上げた。

敵はそれを何とか避けたが、その機動を読んでいたサスケによって利き腕である左腕をクナイで刺された。

「サ、サスケ君…」

サスケのいきなり攻撃に戸惑うサクラ。何でこの程度に戸惑うかな？「手荒いがこうするしかなかつた…！ボケボケすんな！こいつ一人とは限らない…」

いいか！気をぬいたら本氣で殺されるぞ！！

今更な事を宣言するサスケ。いや、その前にお前こそちゃんと殺せよ。

普通に目とか首を刺せば殺れたのに。

利き腕を潰された敵は形勢不利と見たらしく去つていった。あれこそ忍者だな。勝てないなら早急に撤退すべきだ。

とりあえず全員で集まり

「いつたん4人バラバラになつた場合、たとえそれが仲間であつても信用するな。今みたいなことになりかねない」

「それじゃどーするの?」

「念のため合言葉を決めておく。いいか…合言葉が違つた場合はどんな姿形でも敵とみなせ!」

よく聞け、言つのは一度限りだ…忍歌『忍機』…と問つ。その答えはこうだ。

大勢の敵の騒ぎは忍びよし、静かな方に隠れ家なし、忍には時を知ることこそ大事なれ…敵のつかれと油断するとぞ」

「OK!」、「……」、「分かつた。」

サクラは覚えられたようだがナルトはサッパリらしい。

「…またまたあ、そんなの覚えられるわけないじやん

ちょっと焦りながらナルトは言つ。

「アンタバカね。私なんて即覚えよ」

サクラが自信満々に言つ。座学や暗記が得意だつたからな。

俺は原作から微妙に覚えてるから繋ぎ合わせれば多分イケる。

「オイ…ホントこの合言葉で…」

ナルトが無理だと言おうとしたが

「巻物はオレが持つ!」

とサスケが打ち切る。

その瞬間、いきなり風が吹いてきて、すぐに突風に変わつた。明らかに自然現象じゃない。

「新手か!?」

サスケは風が吹いてくる方向を見るが風が強すぎて全員吹つ飛ばされた。

気付いたら俺は結構飛ばされたらしいな。

と言つても精々100m前後。周りは相変わらず原生林だ。

幸いにもナルトの方とは違い、『デカイ蛇はいないから問題無い。

本来なら仲間と合流するべきだが勿論そんな事はしない。ていうか

これ待つていた。

このまま戻れば大蛇丸との戦闘に巻き込まれてしまう。

だから少なくとも俺はサスケに呪印を埋め込んで大蛇丸が退散するまでは絶対に戻らない。

ついでにその後の音忍との戦闘も参加しない。だつて覚醒したサスケのとばつちり受けたくないし。

さて、とりあえず念のために『完全なる隠匿』を使って姿を消して、あの雨隠れのチームを見つけよう。

俺達の天の書は大蛇丸に燃やされるし、地の書は音忍から貰い、原作では最後に雨隠れの奴等から天の書を奪つてクリアするんだから時間節約のためにアイツ等を狩る。

まだ1日目だから探せるだろう。多重影分身と『完全なる隠匿』の併用すれば捜索範囲は広大になる。

主人公組が地の書を手に入れる頃には見つけてる筈だ。

あの後、影分身と隠匿を併用して森中を探した結果、あの雨隠れのチームを見つけた。

まだサスケから受けた負傷が治つていなかつたからか、現在は3人で固まつてゐる。

会話を聞くと

「アイツ等よくもやつてくれたな…。この借りは必ず返してやるー」という復讐宣言をしてゐた。

残念ながらそれは無意味になるんだがな。

氣付かれてなく無いから影分身を3体配置して一斉に首をハネた。

「とりあえず今は傷の回復に専…」

会話途中に一斉に首が飛んだ様子はちょっと面白かったらしい。その後首が無い死体を漁り、天の書を手に入れた。

思つたより早く終わつたな。

まあこの森は半径10kmくらいしか無いから人海戦術を使えばこんなもんか。

さて、とりあえずあれから1時間は経つたからもう大蛇丸はいないだろう。

アイツ等探すか。

捜索して更に1時間。

ようやく発見した。

どうやら原作通りサスケに呪印が与えられたらしい。

サスケは何かうめいてるし、ナルトはただ単に氣絶している。

その一人をサクラが大木の根で出来た空間に隠れながら看護している。

でも警戒して気を張つてゐるから逆に分かりやすい。それにかなり疲れでいるらしくたまに眠りそうにもなつてゐる。

あの状態じゃあ思考能力が低下して口クに戦えないぞ？ そこいらに罠を仕掛けたるけどアカデミーレベルの下級なモノばかり。もつとベトコンみたいに殺傷力がある罠を張れば良いのに。

更に危険な事に、俺の他に音忍の奴等にも監視されてゐる。始末しても良いんだけどこここの原作部分を変える必要は無いから無視だ。とりあえずサスケが覚醒するまでは待機だ。

夜が明けて日が昇つて來た。

さつき起爆札を仕掛けられたリストがサクラの元に來たから間もなく攻撃が始まる筈だ。

音忍の1人は広範囲攻撃が得意な奴がいるから気を付けない。『完全なる隠匿』は完璧に気配を消せる代わりに攻撃はそのまま受けるからな。

相手に俺を攻撃した認識は無いけど。

サクラがまたうとうとしてきた頃、よつやく音忍が出て來た。にしても何でわざわざ全員で出でくる？

1人がサクラを相手して2人でサスケとナルトを殺せば良いのに。ていうか話しかけずに奇襲かければサクラなんて簡単に殺せる。何でこの世界の忍者は忍ばないんだろう？

ちなみに今はサクラが大蛇丸についてを聞いているところだ。大蛇丸という名前にわざわざ反応する音忍に呆れた。なに自分達のボスの名前を聞いて動搖してんの？ そこは「大蛇丸？誰？」と惚けるべきだろ？

そしてようやくお互い戦闘体制をとつた。その様子は所詮喧嘩レベルだ。

音忍がサクラが仕掛けた見え見えの落とし穴を暴露して良い気になり、一気に仕掛けようとしたら本命のトラップである大木の丸太が飛んでくる罠に引っかかった。にしてもあんな大木どうやって仕掛けたんだ？

しかし音忍の1人が丸太をいとも容易く破壊したので何ら被害は無い。

その事にサクラが驚愕していると

「はつきり言つて才能ないよ君は…。そういう奴はもつと努力しないとダメでしょ？ 弱い君がボクらをナメちゃいけないなあ…！」  
と音忍は勝ち誇る。

お前達だつて舐めすぎ。俺みたいに例え相手がガキでも本気で殺すみたいにしないと結構簡単に返り討ちにあうぜ？

ほらリーに蹴られた。

いきなり出て来て

「だつたら君達も……努力するべきですね！」

かつこつけるリー。さつきので最低1人は殺れたのに…。少なくともあの音忍の女は完全に無防備だつたから蹴りで首の骨を折るくらいは出来た。

「な…何者ですか…？」

「木ノ葉の美しき碧い野獣…ロック・リーだ！」

何ヒーローみたいにカッコつけてるん？ お前自分が忍者だつてことを忘れてねえか？ ていうかお前のどこに碧があるんだよ？

「な…何であんたがここに…」

サクラの最もな質問に。

「ボクは…アナタがピンチの時はいつも現れますよ」

サクラは「はあ？」みたいな顔をする。

「…とにかくありがと…助かつたわ！」

とりあえず礼をするサクラ。助けて貰つたのは事実だからな。

「前に一度言つたでしょ？」

「……え？」

「死ぬまでアナタを守るつて…」

ドラマじやないんだぞ？ 何戦闘中に決めゼリフかましてんだよ。確かに女を落とすには良いかも知れんが。

でもガツッポーズかますのはどうかと思うがな…。せめてそういうのは完全に1人になつた時にやれよ。

ようやくマトモな戦闘が始まった。

顔が包帯だらけな音忍がリーに「白慢の音の振動をかまそつと思つたが前に見たことのあるリーは警戒して地面に手を突き刺して大木の根を掴んで地面から引きずり出して防御する。

見事に巨大な根が大きくえぐれた。あの威力はなかなかだよな。リーは流石に3対1、更に足手まといのサクラや動けないサスケやナルトがいる状態では余裕が無いから本気でやるよつだ。

包帯を少し解いて長いヒモにした。

そして音忍が攻めてきた時に何か印を結んだ瞬間、爆発的に速くなつた。

あれが蓮華か。流石にコペーしてもあれは使わない。リスクが高すぎるし。まあ『都合の良い祝福』を使えば体は治るけど。

リーは敵を蹴り上げ、更に加速して背後に周り包帯で拘束した。手まで完璧に拘束してからありやあ解けない。

そして後ろからリー自身で拘束して完全に動けなくして更に回転をかけてる。あの回転と落下速度で頭から地面に突撃したら間違いなく死ぬ。

「あれじや受け身もとれねえ…ヤ…ヤバイ…！」

仲間の音忍が印を結んで地面に手を突き刺す。

その瞬間、リーが敵を地面に突き刺すけどその威力の割に音が小さすぎる。

童忍は犬神家みたいに地面に突き刺さったけど無事出て来た。

恐ろしい技ですね…。ザクが土をスポンジにしてくれなかつたら即死でしたね」

……」と一安心している。

一方、リーは「バ…バカな…！」と驚愕している。完璧に決まったからな。だれでも仕留めたと思うんだろう。

「次はボクの番だ……」

包羅の意がこじの籠形を出す。

そして、これは攻撃をするか、これは軽く過けるか、壁が立篠のリーは殴られさせたうごグラ

れていた。鼓膜が破れたかな？

血腫するかのよりて説明する。

何でアドバンテージを自分から捨てる？ そのまま攻撃すればまだメカニズムが分かつてないリーやサクラを簡単に殺れるのに。

更にもう一人の音忍も地面をスポンジに変えた方法や自分が出来る事を説明する。「イヤツら勝つ気あんのか?

その後はありがちな展開だ。

リーが平行バランスが取れないにも関わらず果敢に攻撃するがやはりダメージのせいか動きが鈍く簡単に見切られる。籠手がついた右腕で音忍は殴りにかかるがリーは何とか防御する。

しかしそれは防御になつておらず、音がリーを襲い、リーはたまらずつづくまり、吐く。

その後はサクラがクナイや手裏剣で攻撃するが軽く防がれる。まるでつるさい虫を相手にするように。

サクラは音忍のくの一、キンに髪を掴まれ動きが止まる。

「私よりいい艶してんじやない…」

「…忍のくせに色気付きやがつて…髪に氣を使ひヒマがあつたら修行しろこのメスブタが…」

キンが嫉妬からか更にサクラの髪を強く掴む。確かにあんな長い髪は忍には邪魔だよな。潜入するときには着者にでも変装するなら話は別だけど。

「ザク…」の男好きの田の前でそのサスケとかいう奴を殺しなよ。こいつにはちょっとした…余興を見てやるーよ」

見事に自分で死亡フラグを立てたキン。せっせとサクラの首を狩ればいいのに。

「おーいいねー！」

賛成するザク。

「オイオイ…」

面倒くさそうな声を上げる包帯の音忍。いやドスだけ？ そうしている内にサクラが何か決めたような田をしてクナイを取り出す。

「ムダよ！ 私にそんなものは効かない」

キンが嘲るが。

「何を言つてるの？」

サクラは「イッ」と笑い掴まれている髪を切つた。おかげで脇だけ長い中途半端なショートになつた。

「チイ！」

キン！ 殺れ！！

ザクが何故か驚いて動きを止めているキンに言ひ。キンもその言葉に千本を取り出してサクラに突き刺そうとするがその前にサクラが変わり身の術の印を結ぶ。

キンがサクラに千本を突き刺した瞬間、丸太に変わった。

サクラはキンを避けてザクに接近し小さいクナイを8本程投擲するが空気に弾かれ逆にサクラを襲うがまたもやその前に変わり身をやつて防ぐ。

基本通りに上に避けたサクラをザクは簡単に見抜く。サクラはまた変わり身の印を結ぶ。

「2度も3度も…通用しねーって言つてんぢろうがーー！  
てめーはこれで十分だ！！」

ザクは空気圧ではなくクナイを投げる。

それがサクラに刺さる。ザクはまた変わり身だと思い本体をまた探すがいない。そしてサクラの血が自分にかかり、本体だと悟った時には既に避けれれる距離なく、サクラはクナイで首を狙うがザクは何とか腕で防ぐ。

そしてサクラは何を思ったのか今度はザクの腕に噛みついた。

何がしたいんだアイツ？

攻撃に失敗したなら直ぐに引けば良いのに。おかげでザクに顔を殴られて血だらけだ。

まあ、噛みつかれたら誰だつて噛みついた奴の顔を殴るわな。

しばらくサクラも耐えていたが限界が来たのか殴り飛ばされ、ザクが「このガキイー！」と構えた瞬間、今まで見ていたいの達が参戦した。

と言つても参戦したのはいのとシカマルだけでチョウジはマフラーをシカマルに引っ張られて無理矢理出された。

突然、自分の前に現れて敵の攻撃を遮ってくれた存在にサクラは「いの…どうして？」

「サスケ君の前でアンタばっかり、いい格好はさせないわよーーー！」

照れ隠しなのか本音は言わないいの。

「またウヨウヨと…木ノ葉の小虫が迷い込んできましたね」  
ドスが睨み付ける。

それに反応してチョウジが自分の仲間達に抗議する。  
しかしいのとシカマルは却下する。

そこにある意味救いの言葉が来た。

「クク…お前は抜けたつていいんだぜ。おテブちゃん  
しかしチョウジには違う意味で変換されたらしく

「え？ いま何て言つたのあの人…。ボク…あんまり聞き取れなか  
つたよ……」

「あ…？ 嫌ならひつこんでろつたんだよ。」の「テブ…」

ザクの言葉にいきなりチョウジは震え出し、そして

「ボクはテブじゃない！…ポツチャリ系だ！」ラ…

ブチ切れた。

チョウジは「うオオオ…！…ポツチャリ系バンザーイ…！」と叫んで  
いる。

まあ、秋道一族なら能力的には仕方ないが、確かにテブだ。ていう  
か忍がテブで良いのか？どう考へても動きが鈍そう。

チョウジが切れた事で戦闘が勃発。

チョウジが倍化の術で肥大化してどうやつてるのか分からないが龜  
みたいに頭や手足を収納して転がりだした。

見た目は酷いが威力は凄まじい。現にザクが空気圧で止めようとした  
が回転のせいか効かない。

ドスが自分の能力である超音波なら有効だつとチョウジに近付く  
が、シカマルの影真似の術でドスの動きを止める。

それどころか両手の先を頭の上に乗せるといつぶさけた格好まで  
させられる始末。

それにはキンが「…」こんな時に何をやつてる…ドス…」と怒  
る。理不尽だろ…。

そして最後にいのがキンに心転身の術でキンの精神を操る。

木ノ葉ならいの達の勝利で間違いないだらう。

しかし相手は平和ボケした木ノ葉の忍ではなく、小国故に常に緊張状態で生活している音の忍だ。

ザクは操られているキンに向かつて空気圧を放ち、木に叩きつける。そのせいで本体であるいのも血を吐く。

更に厄介な事にシカマルの影真似の術が解けてドスが自由になつた。

この最悪な事態をどうするか悩んでいたが、また救いの手が差し伸べられる。

「フン……氣に入らないな……」

マイナーの音忍風情が、そんな2線級をいじめて勝利者氣取りかいつの間にかリーのチームメイトであるネジとテンテンがいた。だから何でわざわざ話しかける。お前らならコイツらを瞬殺するとも可能なのに。

オマケに自分が圧倒的強者であるかのような宣言。いかにも田舎者が言つ言葉だ。

「ワラワラとゴキブリみたいに出てきやがつて……」

ザクがイライラしながら言う。確かにここまで来るとウザイよな。

「そこに倒れてるオカツパくんはオレ達のチームなんだが……。

好き勝手やつてくれたな……！」

白眼を発動させて睨むネジ。あの目つて発動する度に血管が浮き出るけど、明らかに目に悪いよな。いつか失明するんじやね？  
ネジが格好良く決め、いかにもこれからネジのターンの始まりかと思いつきやアイツが起きた。

まるで何かの病氣か？ それとも趣味が悪いタトゥーを入れてるようだ。左半身に変な斑点模様が浮き出ている。微妙に格好良くもない。

「サクラ……誰だ……お前をそんなにした奴は……」

立ち上がりサクラに聞く。それにサクラは呆然として答えられ無い。

状況を分かつてないのかザクが「オレらだよ！」と何故か自慢気に言つ。明らかにヤバイフラグ立つてるのが分からぬのか？

自分が立てた死亡フラグのせいだサスケが音忍3人を標的に決める。まだいのがキンの体の中にいたから急いで心転身を解いて自分の体に戻る。

サスケは何かを溜めるように歯を食いしばる。すると左半身にしか無かつた呪印が右顔にも現れた。一気にチャクラ量がハネ上がる。ある意味ドーピングか？

「チャクラがデカ過ぎる」

ドスはヤバイと確信したが

「ドス！ こんな死に損ないにビビるこたあねえつ！！」

何故か強気なザクが印を結ぶ。

「よせ！ ザク！ 分からないのか！」

ドスが必死に止めるがそんなの関係無いと言わんばかりにザクは両手をサスケに構えて今までより遙かに威力が高い風と超音波を出す。その凄まじい威力に地面がえぐれ、線上にあつた木々がなぎ倒される。

「へつバラバラに吹つ飛んだか」

ザクが自信満々に言うがいつの間にか後ろにいたサスケによつて殴り飛ばされる。

にしてもスゲエな。あの攻撃の線上にいたサクラとナルトを抱えてザクの後ろに移動しやがつた。明らかに下忍の速さじゃない。

サスケは印を組み、火遁、鳳仙火の術をした。

それにザクはご自慢の扇風機で火をかき消すが火の中に手裏剣が混ざつており、手裏剣の攻撃をモロに浴びる。

防御体制を取つたために出来た隙間にサスケがまた速く移動した。

「！！ザク！！下だつ！！」

ドスが急いで警告するがザクが反応する前にサスケに両腕を拘束され後ろに回られた。

「クク…。お前…この両腕が自慢なのか…」

そう呟いた後に思いつきり踏み込みながら腕を引っ張りザクの両腕を破壊した。

「ゴキ！…、ボキ！…」といつ音がしたから多分関節が破壊されたりしない。でも関節を破壊するより引きちぎった方が後々楽になるのに。

「ぐおおおおああ…！」

痛みのためか叫ぶザク。

それを見て涙目になるサクラ。

何で？ 波の国で人が死ぬのを見てきたんだからそんなに驚く事か？

「残るはお前だけだな…。

お前はもつと楽しませてくれよ…」

標的をドスに変える。ドスはビビッてる。

呪印をつけても相変わらず甘ちやんだな。殺さないといつか復讐しに来るかも知れないのに。

普通の世界ならあんなふうに関節を破壊されれば障害が残つて日常生活にも支障を来す恐れがあるが、この世界の医療忍術や技術、そして忍者の体の構造なら十分短期に治せる。実戦不足により甘い見通しかな？

さて、また拷問劇場が始まるのかと思いまや

「やめて…！」

サクラが後ろからサスケに抱きつぐ。

サスケが何かと後ろを見るとサクラも見返して

「おねがい…やめて…」

という素晴らしい友情と偽善を見せてくれた。

そのおかげが呪印が引いていきサスケは元の状態に戻る。

何か見飽きた光景だな。

「くつ…」

呪印が切れたサスケは座り込む。まるで薬が切れたジャンキーだな。これをチャンスと見たドスは自分達の地の書を置いていく代わりに

仲間を抱えて撤退した。

サクラが大蛇丸の事や呪印の事をドスに問い合わせたがドスは分からぬと言つて去つた。

大蛇丸は普通勉強すれば分かるだろ？ 伝説の3忍の1人だぜ？  
案外コイツ頭悪いんじゃね？

その後、リーはテントンとネジに連れられて去り、シカマルとチョウジが寝ているナルトを無理矢理起こした後にサクラの髪を整えたいの達も去つた。

「あれ？ そういえばカズトはどうだつてばよ？」  
ナルトが辺りを見る。

「あ！ そういえばカズトの事忘れてた！！」  
酷い事を言うサクラ。俺つてそんなに空氣？

「どうすんだよ？ カズトがいねえとこのままじゃ失格だ」  
サスケは俺より失格になる方が重要らしい。泣けてくるよ。

「……俺の心配より試験の心配かよ…」

何か久しぶりにしゃべつたな。

「！？ カズト…！」

いきなり現れたから全員が驚いていた。

「無事だつたのね！？」

唯一サクラだけは気にかけてくれていたらしい。

「まあな。あの突風にかなり吹つ飛ばされたんだ。

オマケに戻ろうとしたら敵に遭遇して戦闘になつて大変だつたよ  
それらしい事を言う。これならこんなにも遅れた理由にもなる。

「…敵に遭つたのか？」

「ああ、何とか倒してこの…天の書を手に入れたけど。俺達のと被るからムダだつたな。」

懐から天の書を出して見せる。

「天の書を手に入れたのかズト！？！」

サクラがハイテンションで聞いてくる。いきなり揃つたからな。

「？ そうだけど…それがそんなに嬉しいか？ 地の書が無いと無意味だぜ？」

俺が不思議そうと聞くと

「それが…」

サクラが話そうとしたら

「待てサクラ！ まずは合言葉だ。『忍機』」

面倒くさいが言わないとサスケは信用しそうに無いんで。

「大勢の敵の騒ぎは忍びよし。静かな方に隠れ家もなし。忍には時をすることこそ大事なれ。敵のつかれて油断するとき」

「よし！ 本物らしいな」

ようやくサスケが警戒を解く。まだ早くな。これぐらいなら聞いてた可能性だつてあるのに。

「んで？ 俺がいない間に何があつたんだ？ 全員傷だらけだし、サクラの髪型が急にショートになつてるし。」

俺は知つてるがまるで始めて知つたかのよつにサクラ達の話を聞く。

ちなみに呪印の事は伏せられた。

サクラが呪印についてしゃべるうとしたらサスケが睨んで來たのでサクラは言わなかつた。

「……ふーん。大蛇丸ねえ」

知つてるかのよつなニュアンスで言つたので

「カズト、大蛇丸のこと知つてるの？」

「ああ、ていうかお前が知らない事に驚いた。」

大蛇丸は伝説の3忍の1人で極めて優秀な忍だつたらしいが、あまりに過激な思想と行動に確かに里を追放させられた筈だ」

この程度なら知つっていても不思議は無い。忍者の家系なら尚更だ。

俺の言葉に全員が成る程。と納得している。

「……伝説の3忍……。だからあんなに強かつたのね……」

サクラが何か言つてるが、普通の上忍でもお前からして見れば圧倒的だぜ？

「……それと気になるんだけどさ……お前ら大蛇丸に何かされなかつたか？」

俺の言葉にサクラとサスケが反応する。ナルトは「何か？」と疑問を出している。

「聞いた話だとただ単に俺達の天の書を焼いただけで去つていったらしいけど、

わざわざ大蛇丸が試験の巻物を焼いただけで満足するとは思えない。何かお前らに残していつたんじやないか？ 呪いとか？」

呪い発言に更にサクラは反応する。言おうか迷つてるらしいがサスケは頷かない。

「……いや、何も無かつたぜ？ なあナルト？」

「おう！ あんまり覚えてねエけど何かされた覚えは無いってばよ……」

サスケは惚けて、ナルトは自信満々に言う。ナルトは本当に分からないからな。

いや、ナルトも九尾の封印術式を弄られたからやられたっちゃやられたな。

「……そつか……。

なら良いや。

じゃあ、さつさと塔を田指そうぜ？ 巷物は揃つたんだ。この森での野宿はご免だ」

まあ、これで良いだろ？ あえて指摘するのは変だし。別に俺が知つてゐるのを知られて良い事は無い。

あの後、進もうとしたが、サクラやサスケの体力やチャクラがヤ

バかつたので仕方なく野宿。

見張りは俺とナルトがやつた。

そして翌朝、ようやく出発。

幸運にも敵や罠に遭遇すること無く進めたため、サクラやサスケといつお荷物はいたが何とか夜までには塔に到着。

その後は原作通り巻物を開いてイルカ先生を口寄せしてありがたい中忍の心得を聞いて終了。

原作と違つて3日目に着いたから後2日は休みらしい。塔にある部屋でそれぞれ休む。

良かつたよ宿泊施設があつて。流石にコンクリの床の上で寝るのは結構キツイ。

痛いし寒い。

## 2.1 第二次試験（前書き）

活動報告にも書きましたが、何とか今日中に書き終えました。

やはり2時間半で書き上げたせいか、消去前に比べると薄っぺらい。  
無念…。

塔の中でもう日過いし、原作と違ひゆつと休んだ。

『まずは「第2の試験」通過おめでとう!!

それではこれから火影様より「第3の試験」の説明がある、各自、心して聞くように!!

では火影様、お願ひします……』

何故かマイクを通してアン「はい。」こんな至近距離で必要か?

「うむ、これより始める「第3の説明」

…その説明の前にまず一つだけ…

はつきりお前たちに告げておきたいことがある……

……この試験の真の目的についてじゃ。

何故…同盟国同士が試験を合同で行うのか?

「同盟国同士の友好」、「忍のレベルを高め合う」その本当の意味をはき違えてもらつては困る…！

…この試験は言わば……同盟国間の戦争の縮図なのだ

つまり合同軍事演習の実戦版ということだろ?

演習の割には死者や負傷者がかなり多いが。

「ど…どうこうこと?」

テンテンがタメ口で聞く。

何でタメ口? 礼儀作法を知らないのか?

火影がかつての敵国との戦争を減らすためにこの中忍選抜試験が始まつた事、国力の関係や政治について長い講釈を垂れる。

つまり他国に圧力をかけ、それでいて戦力の増強や金のためだろ？  
ていうかわざわざこんなにも見せつける必要はあるのか？

戦力をつけたいならその国で極秘につけて、わざわざ他国に見せつける意味が無い。国同士で牽制し合ひのだつて平和には必要不可欠だ。

オマケにその戦力を蠱毒の壺みたいに殺し合わせ、その中の生き残った蟲を更に殺し合わせる。

そして生き残つた蟲達を今度はローマの「コロッセオよろしく、奴隸騎士みたいに衆人監視の中、殺し合わせる。

これだと優秀な駒は手に入るだろうが、数を得られないから微妙。どうせだったら下忍みたいな奴隸騎士達じゃなくて、中忍や上忍のような上級騎士達を殺し合わせれば良いのに。それなら観客がかなり喜びそうだ。

まあ、それは無理だろ？がな。

上級騎士は数が限られているから貴重だ。

一方、奴隸騎士は腐るほどいるから多少減つても大した問題にはならない。

俺達は体の良い使い捨てでしかない。

しかしその事を納得出来ないのかキバは噛みつく。

「だからってなんで！命懸けで戦う必要があんだけよ…！？」

「国の力は里の力…。里の力は忍の力…。

そして忍の本当の力とは……命懸けの戦いの中でしか生まれてこぬ…！

この試験は自国の忍という力を見てもらう場であり…見せつける場でもある。

本当に命懸けで戦う試験だからこそ意味があり、だからこそ目指すだけの価値がある夢として中忍試験を戦つてきた

だから何で見せつける？

力をつけたくて合同軍事演習をやるのは分かるが、そこにわざわざ自国の機密とも言える戦力を一般人は勿論、演習に参加していない国にまで見せつける必要がある。

ぶつちやけ、金儲けがしたいだけだろ？

じゃなかつたら大名まで呼ぶ意味が無い。

まあ、確かにこの試験は金にはなるわな。

一般人は忍の殺し合いで手軽に見れるし、他国の中は次代の戦力を簡単に見れるからわざわざ足を運ぶ。よく出来たシステムだと思うよ。

でもやり方が微妙。

だつたら初めから試験をテレビなどで受験生の勝利や脱落を放映すれば視聴率は期待出来る。

第一次試験の苦悩、第二次試験の殺し合い、第三次試験予選の間引き、本選の見せ物。

更に、誰が優勝するかの賭けでもすればかなりの収益が期待出来るのに。

それでも納得出来ないテンテンが再び質問する。

今回は敬語で。

「では、どうして…。友好なんて言い回しをするんですか…？」

「だから始めに言つたであろう…意味をはき違えてもうつては困る」と。

命を削り、戦うことで力のバランスを保つてきた慣習。じつこそが忍の世界の友好なのじや

「

つまり頭がイカれてるんだろう。

まあ、年がら年中殺し合いやつすれば一般常識なんて通用する筈がない。

「ネギま」の旧世界と魔法世界みたいに分かれられないんだ。互いを理解出来ないのだから。

「第3の試験前に諸君にもう一度告ぐ、これはただのテストではない……。

これは己の夢と里の威信を懸けた、命懸けの戦いなのじゃ」

火影の言葉に大多数の下忍は啞然。下忍はまだ一般人に近い感性だから理解出来ていらないらしい。

「納得いったぜ……」

「何だつていい……。それより早くその命懸けの試験つてヤツの内容を聞かせろ。」

ナルトと我愛羅は言つ。

一部例外がいたらしい。コイツら最早人間じゃねえ。

「フム……ではこれより「第3の試験」の説明をしたい所なのじゃが……。

実はのオ……「ホン」

火影が言いづらそうに言つ。何せ人数が多くて更に減らす何て悲惨なことをやらせるからな。

その時、一人の上忍が瞬身で出てきてひざまつぐ。

「……恐れながら火影様……」

ここからは審判を仰せつかつたこの……月光ハヤテから……

「……任せよう」

「皆さん初めてまして、ハヤテです。

えー、皆さんには「第3の試験」前に……ゴホッ、やつてもらうたいことがあるんですね……「ゴホッ」

明らかに体調が悪そうに咳をするハヤテ。

そんなにゴホゴホ言つて大丈夫かよ？

敵地でもそんな咳してたら簡単に居場所がバレるぜ。

「えー…。それは本選の出場を懸けた「第3の試験」予選です…」

「？ 予選！…？」

「予選つて…どうこいつことだよ…！」

「先生… その予選つて意味が分からんんですけど…。」

「今残つてる受験生でなんで次の試験をやらないんですか？」

下忍達から文句が出る。

「えー、今回は…第一、第一試験が甘かつたせいか…。」

少々人数が残り過ぎてしまいましてね…。」

中忍試験規定にのつとり予選を行…「第3の試験」進出者を減らす必要があるのです」

「そ…そんな…」

「先ほどの火影様のお話にもあつたよつて、「第3の試験」には沢山のゲストがいらっしゃいますから…。だらだらとした試合は出来ず、時間も限られてくるんですね…。」

お客様は大事だもんねエ？

何か戦力増強より金儲けに重点置きすぎじゃね？

「えー… というわけで…。」

体調のすぐれない方…。これまでの説明でやめたくなつた方…。今すぐ申し出て下さい。」

これからすぐに予選が始まりますので…」

「……………」これからすぐだと…！…？」

キバが騒ぐ。

お前らは俺達より早く来たんだからその分、休息はしっかり取れる筈だろ？ 何故騒ぐ。

沈黙が続いた後に、カブトが手を挙げて

「あのー…。ボクはやめとります」  
リタイア宣言をした。

原作ならナルトやサクラが驚くが、この世界では少し驚く程度。  
まあ、マトモに話したのは第一次試験前だけだったからな。

「えーーと…木ノ葉の薬師カブトくんですね…。では下がつていい  
ですよ…。」

カブトはそれを聞いて会場を後にする。

「えー他に辞退者はいませんか?」

あ…「ホツ、えー言い忘れていましたが、これからは個人戦ですか  
らね…。」

自分自身の判断で「自由にてを上げて下さい」

その言葉に俺も手を上げる。

「では俺も辞退します。」

「えー…同じく木ノ葉の北郷カズトくんですね…。

では下がつていいですよ…。」

それを聞いて列から離れようとしたら。

「カズト! 何でやめちゃうんだってばよ…!」

小声だが叫ぶようにナルトに聞かれた。

「実はお前らと合流する前に受けた負傷が思つたよりキツくてな。  
これから直ぐ始まると言われたら流石に無理だから俺はここでリタ  
イアする。」

お前らは俺の分も頑張つてくれ。」

そう言われたナルトはしようがない事を悟つたのかシュンとして黙  
つた。

「イツ単純。簡単に騙せたな。

まあ、この会場に着いてから今まで負傷していたような演技を見せ  
ていたからな。

他者サイド

「…フム、確かに奴は北郷の家の長男だつたの。」

火影が担当上忍の力カシに聞く。

「えエ、まあ、優秀な奴なんですけど…いかんせん積極性に欠けていまして。」

力カシが少し困ったように言つ。

「確かに…薬師カブトと違い、本当に負傷しているようには見えないからのウ」

北郷の偽装は火影や上忍にはバレていたのだった。

北郷サイド

会場から出ようとしたら扉の影から力カシが出てきた。  
さつきまで火影の所にいたのに…。

流石上忍つてか？ 気配がまるで分からなかつた。

「どこにいくの？ カズト」

「どこつて、帰るんですよ。

ここにいても仕方ないですから。」

一応、怪我をしてるが隠しているという演技は継続中。バレてそうだけど。

「だつたら3人や他の奴等の戦いを見ていいよ。」

「…いやー、実は怪我をしていましてね、これから病院に行こうと思つてたんですよ。」

「こりや完全にバレてるな。現に力カシの目は小搖るぎもしない。」

「だつたらここで診て貰えれば良いよ。ここなら最高レベルの医療をタダで受けれるし。」

「……」

「…ていうかそれって演技だろ？ 下忍には通用するだろ？ けど、上忍には厳しいよ？」

「…やっぱしバレてましたか…」

結構自信あつたんですけどね。」

マジでショック。かなり真剣に演技してたからな。

「まあ、お前とはそこそこ付き合いがあつたから確信を持てた。もしも初対面なら確信は持てなかつただろ？」

カカシからテストの結果を受けた気分だ。

評価は… B - かな？

仕方なくカカシに従い観覧席に移動する。

「それで？ 本当の理由は何なの？」

「そんな大それた理由は無いですよ。」

始めに宣言した通り、個人戦になつたから棄権しただけですよ。」

「確かにその通りだけどこつも言つたよね？」

『もしやバい状態なら迷わず棄権しますから』って。

見た限り特にマズイ怪我もしてないし、お前の実力なら十分勝機はあると思うけど？」

そこを突くか。オマケに一言一句違わず言いやがつて。

「…確かに特にこれといった怪我もしてませんし、自惚れになりますが自分の実力なら普通の奴と戦えば勝てると思つてます。しかし今回の試験には脅威になる奴等がいますから。」

「…脅威？」

「ええ、先ずは日向ネジ。」

日向一族始まって以来の天才と名高いですし、日向流体術の柔拳は十分脅威に値します。

「そして何より、棄権するのに決め手になつたのは、あの砂隠れの我愛羅。」

アイツは何がヤバいのか分からないがとにかくヤバい。

俺の本能とも言うべき部分が『アイツと戦うな、今すぐ逃げる』と  
ビンビン伝えて来ます。

だから急いで逃げました。』

そう伝えるとカカシも理解したのか「…そうか」と言って黙つた。

流石のカカシも人柱力には敵わないからな。

下忍に相手しろ何て言えないからこれで理解しただろう。

もしも聞かれた場合に備えた甲斐があつたな。

こういう時に化け物は利用出来る。

## 22 気分はローマ市民

カカシに無理矢理試合を観戦させられる結果になつたので仕方なく会場の2階部分に移動した。

カカシはサスケに呪印が暴走したら試合中止にすると脅し、今は何故か俺の横にいる。

ていうか何故かサクラやナルトも近くにいる。何で俺の近くにいるの？

もしかして俺がいるから何となくとか？

まあどうでも良いか。

今は第1試合のサスケ対ヨロイの試合だ。

サスケは呪印のせいでチャクラが口クに使えないし激痛に悩まされるという大ハンデを背負つてゐる。

一方、ヨロイの能力は相手を触る事で精神と身体エネルギー、つまりチャクラを吸いとる。

ヨロイの能力は良いけど俺には使い勝手が悪い。

何せ吸いとるには手のひらを相手に当てないといけない超接近技。その割りに大した量は吸えなさそうだから中途半端。

いかにもちよつとした敵キャラだな。悲惨だ。

試合が始まり、ヨロイは印を組んでチャクラ吸引の術を右手に展開し、手裏剣を投げる。

一方サスケも手裏剣を投げるが呪印の激痛のせいかコケる。

そのおかげで敵の手裏剣を避けられたという幸運があつたが、立ち上がるのがもたついたためにヨロイから追撃を受けるが何とかかわし、ヨロイの右手に腕ひしき十字固めを決めるが、チャクラを吸われて腕を固定出来なくなり、簡単に脱出された。

その後もチャクラを吸われてもうダメかと思つたが、ナルトのテ

カイ声援を受けてナルトの方を振り返るとたまたまナルトの隣にリーガーがいるのを見つけて何かを思いつく。

そしてヨロイが止めを刺そうと思い、近付くと、突然蓮華をするリーゲーのように敵を蹴り上げた。

そして影舞葉をしてヨロイの背後に移動して攻撃しようとチャクラ練つてしまい、呪印が開きかける。  
しかしそくに持ち直して呪印を抑えて落下しながらヨロイに攻撃を加え、最後には獅子連弾とか言う微妙なネーミングのカカト落としをかましてノックアウトする。

何ともまあ、『都合主義』で。

ていうか門を開ける訳でも無い癖によくあんな動きが出来るな。  
ムカつく程の才能ってか？

その後はカカシがサスケを連れて行つた。無意味な封印をしに行くんだろう。

自分の意思が無いと封じれない封印なんて無意味だ。人間の意思なんて簡単に覆るんだからな。

その後の第2試合はザク対シノ。

ザクは両腕を吊つてるが何とか使えるらしい両腕で戦うが、シノによって両手の平の噴出口を蟲に塞がれたおかげで今度は片腕が吹っ飛んだ。

かるうじて右手はまだくつついてるがもうダメだらう。完璧に障害者の仲間入りだ。

にしても何か気分は古代ローマの『ロッセオ』で奴隸戦士達の殺し合いを見る気分だ。

自分には何ら影響が無いかから気軽に見れる。

微妙に甘いけど格闘技観戦よりかはエキサイティングだらう。

サスケの封印が終わつたのかカカシも帰つてきた。

「よつ！」

何て気軽に大蛇丸に遭遇したばかりなのにその態度は凄いね。まあ、サクラを心配させないためだろ？

次の試合はツルギ対カンクロウ。

「オレはヨロイと違つてガキでも油断は一切しないぜ。

始めに言つておく。オレが技をかけたら最後：必ずギブアップしろ。速攻でケリをつける

ツルギが宣言する。やつと忍者らしい奴が現れたな。

まあ、宣言するのは甘いがな。何も言わずに殺れば良いのに。別に殺しても問題無いし。

ツルギは宣言通り速攻をかけてカンクロウの体を「自慢の軟体で締め付け、首をへし折つたが、それは傀儡人形で逆に締め付けられて骨を砕かれて終わつた。

でも首とか致命傷になる事はしなかつたから別に問題無いだろ？

アイツも何だかんだ言つて殺さないよな。

ナルトが2対1で卑怯だとわめいているがカカシとサクラによつて言い負かされる。

そして次はサクラ対いのだけど別にこれと言つた事は無い。

ダラダラと長く続いて最後はクロスカウンターでダブルノックアウト。お前らは明日のジョーかよ。

第5回戦はテンテン対テマリ。

テンテンがとんでもない量の武器を使って攻撃するが全部風に吹つ飛ばされて終わつた。

ある意味一番扱いヒデエな。

第6回戦はシカマル対キンだが、シカマルが軽く影真似の術をか

けて勝利、結局キンくて大した能力無かつたよな。

他の二人はそこそこ凄い能力あつたのに。

そしてお次はいよいよナルト対キバ。

会場的には大したこと無い試合だが、NARUTO的にはデカイ試合だ。

キバは落ちこぼれ時代のナルトしか知らないから楽勝だと思って侮っているが、アイツはAランク任務も経験してんだから簡単には負けない。

現にキバがぶつ飛ばして終わりかと思ったが、あつさり立ち上がる。しぶとさはゴキブリ並みだからな。

今度はキバは煙幕を張つて攻撃を仕掛けるが、逆に隙をつかれて赤丸に変化したナルトに噛みつかれるし、赤丸は捕らえられる。

そのスキに赤丸を殺せば良いのに。

今の赤丸なら簡単に殺れる。赤丸を殺されて動搖したキバを後ろから影分身で攻撃すれば終了だ。

でもやらないだろうな。卑怯だの何だの言つて。忍者の癖に。

ナルトの意外な強さにようやく本気になつたキバが赤丸に兵糧丸を食わせ、そして自分も食いチャクラを倍増させる。

そしてどうやつてかは分からぬが赤丸がキバに化ける。この世界の動物は何でこんなにも賢いんだろう？

そして二人？がかりでナルトをリンチして最後に牙通牙だつけ？回転しながらナルトを切り刻む。

そして何故かキバは立ち上がろうとするナルトに挑発する。そのまま追撃して終わらせれば良いのに。何でわざわざ立ち上がるのを待つ？

そのおかげで何かサクラの「立てーナルトーー！」という声を聞いて立ち上がり、何か格好良いセリフを言つという勝利フラグが立つた。

ああなるとナルトの勝ちは確定した。

予想通りナルトはキバに勝利、途中ナルトが術を氣張りすぎたせいか屁をこき、その屁を擬獣化して嗅覚が犬並みになつたキバの顔の前だつたためにキバが悶絶するというギャグ状態になつたが最後は影分身を使ってサスケのリーを真似した技を真似て終わらせた。いかにも主人公らしい勝ち方だな。

そして次はまるで仕組まれたかのよつた対戦。

ヒナタ対ネジ。どつちもウザイ奴だ。

片やもじもじして何が言いたいのか分からぬ面倒な奴と、片や何でもかんでも運命運命ウザイ思春期によくありがちな何でも自分は知つてます的な奴。

そして試合結果はヒナタがフルボッコにされて終了。ネジも立場上、ヒナタを殺せないから手加減してやつた。

まあ、最後はキレて殺そとしだが上忍達に止められて終了。そして最後に明らかに負けフラグになる言葉をナルトにかける。所詮ネジもガキだよな。ナルト何か無視すれば良いのに。

そして次はこの予選のメイン。

我愛羅対リー。

ある意味今までのは前座でしか無い。

試合開始直後、リーは何故か大声で「木ノ葉旋風！！！」と技名を言いながら攻撃するが我愛羅の砂の自動防御によつて軽く塞がれる。あの自動防御良いよな。我愛羅の意思とは無関係に防御してくれるんだからな。

でも重りを外したリーの速さに着いて行けてないのを見ると微妙なんだよな。上忍レベルなら確実に攻撃食らうじ。それと思うとあん

ま使えないよな。

リーの攻撃は全て砂に防がれてもうダメか。という空氣になつた所でガイが叫ぶ。

「リー！外せ――！」

「でもガイ先生！……それは……大切な人を複数名守る場合の時じやなければダメだつて……」

「構わーーん！！オレが許す！！」

サムズアップしながらガイは言つ。それを見たリーは笑い、足のサポーターを外す。

サポーターの下には根性と書かれている重りが付いたベルトが巻かれていた。

「よーーしイ……」れでもつと楽に動けるぞ――――――！」

リーの言葉に大多数の奴等は下らなそうに見ていた。まあ、普通少し重りを外した程度じゃほとんど変わらないからな。普通ならな。リーが捨てた重りが会場の頑丈な床に着地するとドゴツ・・・ドゴツ・・・というまるで何トンもの重さの何かを落としたかのような音を立てて床を貫通した。

それを見てほとんどの下忍は啞然。何せあんなクソ重いのを付けた状態であんなに早く動いていたんだからな。

「行け――――リー！！」

「オッス！！」

ガイの命令の直後にリーは返事をした後に消えた。まあ下忍には消えたように見えただろう。

俺や上忍連中には普通に見えてる。でも速さは完璧中忍レベル。

リーの攻撃は前半こそ砂に防がれたが、段々砂の防御を超えるようになり、遂には我愛羅の顔に回転しながらのカカト落としを食らわした。

しかしカカト落としをモロに受けて頬が思いつきり切れたというの

に我愛羅は一滴も血を流さない。

しかしリーはそれに気付かずに更に速い動きで我愛羅を攪乱して攻撃を加える。その速さに砂の防御は全く追いついて行けてない。

しかし我愛羅は全く慌てない。

何故ならばリーに思いつきり攻撃を受けた顔面が崩れた。

いや、顔面ではなく、今までの肌と同じ色をしていたから気付かなかつた砂の鎧が崩れたのだ。

その砂の鎧の下の皮膚は全くの無傷。

そしてその崩れた鎧もまた構築されて我愛羅を覆う。

でもあの砂の鎧って砂の楯と違つてかなりチヤクラ食うし、防御力も劣り、重さのせいで動きが鈍るからほとんど使えない。まあ、緊急防御用だからあんなもんか。

「それだけか……」

我愛羅が失望したかのよつた声を出す。

その声に反応したリーはガイを見る。指示を仰ぐよつに。そしてガイは笑顔で頷く。

それを見たリーも笑顔になり包帯を少し外して蓮華の体制を取る。

そしてリーは我愛羅の周りを高速で走り、我愛羅の「さつさと来い。

」という言葉に答えて思いつきり下から蹴り上げた。

そして更に蹴り上げて我愛羅が天井に届くんじやないかと言わんばかりに蹴り上げる。

しかしその途中にリーは蓮華の反動のせいか痛みに顔をしかめて目を閉じた。その瞬間を狙つて我愛羅は砂の分身を変わり身の術で入れ換えて避けた。

それに気付いて無いリーは目を開け、包帯で砂の分身を巻き付けて動けなくし、回転を加えて頭から地面に落とした。

もしもあれが本体だつたら死んでた可能性すらあつたが、その地面にめり込んだ我愛羅は崩れ落ちて砂になつた。

そして砂に隠れていた我愛羅が姿を現し、砂でリーを攻撃する。

リーは避けようとするが体内門を開いた反動のせいで避けられない。

我愛羅は遊びたいのか手加減をしているからリーは何とかまだ生きている。

バカめ。

言っちゃ悪いがお前あんま強く無いぞ？

今の戦闘を見る限り、上忍クラスなら我愛羅を殺すのはそんなに難しく無い。

2、3人で高速で攻撃を加えれば簡単に首を落とせる。そうすれば中の尾獣も死ぬだろうから問題無い。

何で砂はアソツを殺さない？

風影の息子だから？ いざといつときの兵器になるから？ でも兵器としてはあまりに不安定で使い勝手が悪そうだが？

リーが覚悟を決めたのか両手を交差して構える。

カカシやガイ、サクラが裏蓮華について言い合つてゐるが無視だ。

ていうか何故か俺には一切話しかけて来ない。俺つてそこまで空氣か？

そして遂にリーが第三の生門を開いた事によりリーの体は赤く染まつた。更にリーのチャクラが急激に何倍にも膨れ上がった。更に第四の傷門をこじ開けてチャクラが上がつたが代わりに血管が切れたのか鼻血を流す。

そして次の瞬間、一気にリーは駆けて加速して我愛羅を蹴り上げる。その速さは間違いないなく上忍クラス。あまりの速さに俺も見えなくなつた。

我愛羅は蹴り上げられ、砂が我愛羅を守りひとつ浮き上がるが全く追いつけ無い。

そして砂が追いつく前に、見えないがリーによつて様々な攻撃を加えられてまだ空中をさまよう。

あの速さは十分脅威に値する。

でも何で素手で攻撃するんだろう？

あの速さの状態でクナイを持つて攻撃すれば我愛羅の砂の鎧なんか簡単に貫ける。

そしてリーは最後の攻撃として第五の杜門も解放して更にスピードを上げる。

我愛羅を再び包帯で拘束して自分の元に引き寄せて全力で我愛羅な腹に掌底をかまして地面に叩きつけた。

首を狙えれば良かつたのに。そつすれば幾ら砂の鎧でも防げずに気道を破壊して終わつた筈だ。

我愛羅は背負つていた瓢箪を砂に変えて衝撃を防ぎ、裏蓮華のせいで口クに動けないリーの左手足を砂で覆い、思いつきり圧迫して破壊した。

「ぐわああああ！－！」

リーの悲鳴がこだました。

そして我愛羅は止めとしてリーの頭を潰そうとしたが、その前にガイによつて砂を散らされた。

ガイが片手で砂を防いだ事を見るとやつぱあの砂はそんなに脅威では無い。周囲が砂漠とかだつたら勝てないだろうが、『ソラノハ』のクリの所なら十分勝てる。

まあ、別に殺らないけど。他のオリ主やこの世界の忍者（笑）と違つて目立たない事にしてるからな。

リーは氣絶しながらも立ち上がり、まだ戦おうとする物凄い事を見せてくれたが、左手足が潰されて最早忍として生きていけないと宣言された。

それが一番良いと思うが、これからは平穏な日常を送れると思え  
ば悪くない。

でもコイツ復活するんだよなあ。

「都合主義で。可哀想に。」

次の試合はチョウジ対ドス。

チョウジが耳栓をして倍化の術をやり、ドスの衝撃波を聞かないよ  
うに工夫したのは良かつたが、人体の約7割は水で出来てるんだか  
ら関係無く、直接振動させられて終了。

前の試合に比べて何て小さい。

「えーー、では、これにて「第三の試験」予選…全て終わります!」  
ハヤテの宣言により、予選は終了した。これで帰れるかと思ったが、  
まだ誰も帰らないから仕方なく俺も残る事にした。目立ちたく無い  
からな。

「中忍試験「第三の試験」本戦進出を決めた皆さん…。ゴホッ…  
名はここにいませんが…おめでとうございます。  
えー…では、火影様…どうぞ」

「うむ…。

では、これから…本戦の説明を始める…。

以前も話したように本戦は諸君の戦いを皆の前でさうすることになる。  
各々は各国の代表戦力として、それぞれの力をいかんなく發揮し、  
見せつけて欲しい。

よつて本戦は…一ヶ月後に開始される…

「ここで今からやんじゃないの?」

ナルトが聞いた。今からやつても大した面白みが無いぞ? 何せほとんどの奴等は疲れてチャクラが枯渇気味だ。  
これじゃあ単調な殴り合い、蹴り合いで観客が楽しめない。

「これは、相応の準備期間とこつヤツじや…  
「どういつ事だ？」

ネジがタメ口訊ぐ。何でお前はそんなに偉そつなんだよ？たかだか下忍で強い方なだけで。

「つまりじや……各國の大名や忍頭に予選の終了を告げるとともに本戦への招集をかけるための準備期間…。

そしてこれは…お前たち受験生のための準備期間でもあるつまりお客様をご招待するためってことね。一応建前として受験生の体力回復や戦略を練る時間を与えるという意味もある。

「だから意味分かんなーじやんよーどついつことだ？」

カンクロウが聞く。お前、他国のトップによくそんな口訊けるな。「つまり、敵を知り、己を知るための準備。予選で知り得た敵の情報分析し…勝算をつけるための期間。

これまでの戦いは実戦ながら…見えない敵と戦う事を想定して行われた

実際忍の戦いつてそうだろ？ 敵の事を知つてる状態何か極々希だ。「しかし本戦はそうではない……。ライバルたちの目の前で全てを明かしてしまつた者もおるだろつ…。相対的な強者と当たり、傷付き過ぎた者もあるじやろうて。

公正公平を期すため、一ヶ月は各々、更に精進し励むが良い。もちろん体を休めるも良し…」

「…といつわけでじや…。

そろそろ解散させてやりたいところじやが…その前に一つ、「本戦のためにやつとかなきやならん大切な事がある

「なんだつてばよ…」

「まあ、そう焦らず…。アン口の持つとる箱の中に紙がはいつとる

からそれを一人一枚取るのじゃ」

アンコが箱を持って前に出てきた。

「私が回るから順番にね！」

アンコが左端の奴から順番にクジを引かせる。

「よし……全員取つたな……ではその紙の数字を左から順に教えてくれ！」

「8だ」「1だつてばよ」……各自番号を言い。

「では、お前たちに本戦のトーナメントを教えておく！！」

「え――――――!?」、「そのためのくじ引きだったのか！」

ナルトとシカマルが叫ぶ。それぐらいしか思い付かねえだろ？

そして組み合わせが発表される。

「では、それぞれ対策を練るなり休むなり、自由にするがよい。これで解散にするが何か最後に質問はあるか？」

「ちょっといいッスか？」

「うむ！」

シカマルが質問する。

「トーナメントってことは優勝者は一人だけって事でしょう。つ一ことは中忍になれるのはたつた一人だけってことッスか？」

「いや！ そうではない。

……この本戦には審査員としてわしを含め、風影や任務を依頼する諸国の大名や忍頭が見ることになつてある。その審査員たちがトーナメントを通してお前たちに絶対評価をつけ……中忍としての資質があると判断された者は、例え一回戦で負けていようとも……中忍になることができる

「ということは……。ここにいる全員が中忍になれる可能性があるってことか？」

テマリが聞く。どうせお前等は裏切るんだからそんなの無意味だろ？

「うむ。

じやが逆に……一人も中忍になれない場合もある……トーナメントで

勝ち上がるところ「」と自分をアピールする回数が増えるところじゅ。

分かったかのオ……シカマルくん！」

一下忍が里のトップである火影が名前を言われる何て光栄だがプレッシャーもあるな。

現にシカマルは面倒くさそうな顔をしている。

「では、御苦労じゃった！ ひと月後まで解散じゃ！」

その言葉によつやく終了した。

名々で森を越えてようやく懐かしの里に帰ってきた。にしてもまたあの森を渡る事になるとはな。

てつくり試験は終わつたから試験官が誘導したりするのかと思つたら自由解散だもんな。おかげでまたあの危険極まりない森を越えるハメになつた。

隠匿を使えば何にも問題無いが、念のために使わず普通に越えた。無いとは思うが下忍がちゃんと森を出られるか監視されてたら困るしな。

さて、ようやく面倒なイベントも終了した。後は最終段階だ。大蛇丸の前では何もおかしなことはせず、目立たずにいたから別に声をかけられる何て死亡フラグも立つてない。

まさにパーフェクト。評価はA、いやSでも良いだろつ。

後は一ヶ月、最後まで気を抜かず、怪しまれないようにしなくてはな。

## 23 摺れぬ生き方（前書き）

今回、北郷は自身の人生訓？みたいなのを語ります。

## 23 摺れぬ生き方

家に帰り、両親に一次試験で落ちたと説明した。

まあ両親も流石に1度で合格するとは思つて無かつたのか大して気にしてなく、俺の心配をしていた。

「大丈夫だカズト。中忍試験はとても難しく、誰でも一度は落ちる。始めてで合格するのは稀だから気にするな。現に俺なんか2回も落ちて3回目でようやく合格出来たんだからな」

親父が自身の体験談を出して俺を慰める。

「そうよカズト。

それにアナタはまだ12歳なんだから急ぐ必要は無いわ。また次の中忍試験を頑張れば良いわ」

母親も慰める。

この人達は普通に良い親だからな。

今までには口クな親がいなかつたからその分ありがたい。

何せネギまの時は両親とも親戚に預けてほつたらかしだし、ハンターハンターの時は母親は死んでたし、父親は自分を優先して俺を親戚に預けた。

現実の両親は俺がどうしようも無いクズだと早いうちから分かつたからか干渉しなくなつた。

高校に落ちた時も「ああ、やつぱりか。」としか言わなかつた。

まあ、普通なら両親にそんなことを言われれば荒れて家庭内暴力でも起こすんだろうが、俺は気にしなかつた。初めから自分がどういう人間か分かつてたし。

それに、何故だか生まれつき孤独が苦では無い。

何故かは分からないが小さい頃から独りが辛くなかつた。

別に家族や友達がいなくても外に出れば人がいるし、店員との短いやり取りなどのせいか孤独とは思わなかつた。

まあ、そのせいでこんな性格になつたがな。

でも俺のこの性格が無かつたら今の人生は耐えられないだろう。何せ周りは全て他人。本当の自分を知ってくれる人間は皆無。多分普通の人間なら他者との繋がりを求めて原作に介入したり、友達や恋人を作るんだろうが、俺には必要無い。

何故ならそんなモノを作れば気持ちに揺らぎが生じる。

俺の目標である木の葉を抜けるという決心にも迷いが生じるだろう。残念ながら迷いながら上手くいくほど人生は甘くない。

だから俺は常に自分を優先して他人を求めるない。

だから常に勝つて来た。

どんな世界に行こうが、この考えを貫いて来たから負けた事は無い。何せ負ければゲームオーバー。死だ。

よく二次小説のオリ主は家族や他人を求めるたり、何かしらの繋がりを重視する。だから常に予想外の事態に直面してピンチに陥る。しかし俺は自分しか求めないから常に先回り出来る。行動に矛盾が生じないからだ。

ハツキリ言って自分の命を守り、家族の命を守り、恋人の命を守り、友達の命を守り、そして尚且つ他人の意思を尊重しながら行動するなど無理だ。

そんなことしたら必ず矛盾や揺らぎが生まれる。

だから俺は自分の命と意思を絶対にして他は切り捨てた。

そして常に臆病になり、異常な程警戒して周りを伺い、必ず勝てる状況を作つてから勝負した。だから必然的に勝てる。

マンガの主人公みたいに不確定要素を無視するなど愚の骨頂だ。そんなのは主人公だけに許された特権。

俺みたいなモブは必死に必死に考えて敵を追い詰め、退路を経ち、

弱点を見定め、孤独にさせて、敵より優位に立ち、そして全力で叩き潰す。

そうしないと主人公は殺れない。

さて、何か俺の人生観についての話になってしまったがそろそろ戻るか。

両親には「ありがとう。次の中忍試験は受かつて見せるね」と答えて安心させる。

中忍試験で自信を喪失して忍者を辞める奴がたまにいるからな。両親もそれを心配してたらしい。

別に良いじゃん。息子が争いと無関係な世界を生きたいと言えばそれをお喜べよ。

それとも息子に特攻隊員みたいにいつ出撃命令が出るか分からぬ生活をして欲しいのか？

とりあえず今は一月後の事を考えよう。

木の葉崩しの時を逃せば無事に抜けられる可能性が格段に下がる。もしも遅れれば戦力増強のために試験を辞退した俺まで中忍に昇格させられる可能性すらある。力カシは俺の実力は中忍程度はあると思ってるだろうから推薦するかも知れない。

やっぱ実力をもつと下げた方が良かつたか？

でも下げすぎるとナルトみたいに足手まといになるし、動きにくくなるからある程度の強さは必要なんだよなあ……。

まあ、木の葉崩しの時に逃げれば何ら問題無いから良いか。あの戦いでかなりの忍が死んだから俺が死んでも不思議は無い。

そのためにあの術を完璧に会得しなくては。

何せこれはコピー出来ないから自力で会得するしかない。

超上級忍術だが、これを会得出来ないと誰にもバレずに里を抜けれる成功確率が低くなる。

逆に成功すれば逃亡成功は間違いない。  
だから何としてでも会得しなくては。

この術はもしもの時のために1年くらい前から練習してるが、未だに成功していない。

この1ヶ月が勝負だ。

一度でも成功すれば後はコピー出来るんだからな。

ついでにネジの修行を時々観察していた。

あのメンツの中じゃ唯一使える術を持つてる奴だったからな。  
なかなか成功していなかつたが、大会前日にようやく成功させた。  
あの全方位防御の八卦掌回天だ。

まあ、ただ単に全身の点穴からチャクラを出しただけだがな。  
それでもある程度なら防御出来るし、全方位に対して防御出来るから使える。

それに回天で出したチャクラを何重にも張れば理論的にはどんな物理攻撃も防げるようにもなる。

これで防御面もある程度は大丈夫になつた。  
さあて、明日は本番だ。

もしかして木の葉が終わるかもな…。

遂に中忍試験本戦の日になつた。

本戦の会場は満員状態。下忍など今日ヒマな忍達や高い入場料を払つて殺し合いを見に来た奴等で一杯だ。

まあ、そのせいか客層がガラが悪い奴等が多い。まるでフーリガンの集まりみたいだ。

ちなみに俺は公式には来ておらず、隠匿を使って会場にいる。

アカデミー時代の友達に誘われたが行かないと言つた。

「落ちた試験に興味無い」といじけているように言つたので相手も分かつてくれた。

何せ今日は俺は会場じゃなく、家にいた。と思われた方が後々のために良いからな。

「えー、皆様、このたびは木ノ葉隠れ中忍選抜試験にお集まり頂き、誠に有り難うござります!!

これより予選を通過した8名の『本戦』試合を始めたいと思います

!!

どうぞ最後まで御覧下さい!』

火影の開会宣言が終わり、遂に本戦が始まった。

予定では9人だったが、ドスは死んだからな。バカな奴め、我愛羅に真っ向勝負を挑むなんてな。

お行儀良く並んでた8人のうち、6人は控室に行き、会場にはナルトとネジが残つた。

お互に中央に集まり、にらみ合つ。そしてナルトがネジに拳を向けて「ぜつてー勝つ！！！」と改めて決意表明する。

「では、第一回戦、始め！！」審判の合図で試合が始まった。

下馬評では完全にネジ有利。オツズで言えばナルトは500倍以上だ。当たれば万馬券確定。

大抵の奴はネジの圧勝を疑つて無い。

ちらほら上忍もいるが、みんなネジが勝つと予想している。

確かに普通ならネジが勝つだろうが、このNARUTOの世界ではうすまきナルトは主人公だ。こんな大事な大会、更にはヒナタとの約束まであるんだ。

何があろうと必ずナルトが勝つ。それが主人公なのだ。

ナルトは多重影分身の術をやり、5人に増えた。

確かに影分身なら本体と同じだから白眼でも見分けがつかない。でもナルトとネジでは実力に差がありすぎるからバカ正直に挑んでも無意味。

結果、影分身である4体は簡単に消された。

その後、何故か少しの話し合い。

ネジの何時も通りの運命や分かつたような現実論。いい加減聞き飽きた。

そしてナルトが今度は何十体もの影分身を作り、集団で襲いかかる。しかし攻撃は簡単に見極められ、攻撃頻度が最も少ない奴を本体と思い、ネジは攻撃する。

しかしそれも影分身で別の方向にいた本体がネジに攻撃しようとすが、ネジは回天でいなす。

そして更にネジは構え、ナルトに八卦六十四掌をナルトに叩き込み、全身64個の点穴を閉じさせた。

そのままネジが追撃すれば勝負は簡単に着いたのに、何故かまたまたネジはナルトとお喋りしてる。

だから何でいちこちそな面倒をする？　お前ら友達でも何でも無いだろ？

そして聞いても無いのにネジは自分の過去を話す。

自分に呪印を刻まれ、父を身代わりとして差し出された。などなど、言つちや悪いが「だから？」としか感じない。別に珍しく無い話じやん。

分家の者は宗家のために生きる。普通じやん。

それを自分が世界で一番不幸みたいに言つちやつてさ。マジで中二病かよ。

お前的人生なんてナルトの人生に比べたら天国だぜ？

何せ頼れる者達は一杯いるし、分家と言えど名家だから食つに困ることも無い。

それに何より迫害されない。

もしもナルトがお前のセリフを言つならまだ理解出来るが、才能溢れ、名家に生まれ、愛されて生きてきたお前が言つちやダメだよ。

その後はナルトが九尾のチャクラを操り地面からのアッパークラトを食らわせて終了。

やっぱ勝ち方が主人公だよな。

次はサスケ対我愛羅だけど。

肝心のサスケはまだ来ない。忍が大事な用に遅刻とかあり得ないだろ？

観客が何時まで経つても試合が始まらないので苛つき、罵声を上げる。力カシが修行つけてるからなあ。

アイツのガキの部分まで受け継いでんのか？

普通なら失格だが、あの天下のうちは様だから試合は最後にして貰つた。良かったねえ、うちはに生まれて。

ていうかアイツ、うちはに生まれなかつたらタダのモブだつただろ

うな。写輪眼やうじはの才能が無ければタダのイケメンな下忍で終わっていた筈だ。

アイツそれ以外、何にも無いからな。

そして次はカンクロウ対シノの試合にぐり上がったが、カンクロウは棄権したのでシカマル対テマリの試合にまたぐり上がった。テマリは仕方なく会場まで降りてきてやる気を見せる。しかしシカマルはそんな気は無いから棄権しようかと思っていたが、いらない気を効かせたナルトに押されて会場に落ちてしまった。

シカマルは落ちた体勢のままボーッとしているが、観客はそれを許さず、「コラーネ、さつさと試合しろー!」、「こんな試合とつと終りせろーーー!」などなどヤジを飛ばす。そんなにサスケの試合が見たいかよ。

アイツそんなに強く無いぞ?

未だに立ち上がらないシカマルにテマリは試合開始の前に勝負を仕掛けた。

しかしシカマルはそれを軽く避ける。流石に攻撃を受ける気は無いらしい。

テマリが扇を広げて風を起こすが、シカマルは既にいなく、会場の僅かな木々に隠れた。

しばらくテマリはシカマルを見ていたが、シカマルはただボーッと空を眺めていた。

それがムカついたのかテマリは扇を思いつき振り、カマイタチを起こす。カマイタチのせいで砂ぼこりが起きたが、それが引いてくるといきなり影が伸びて来てテマリを追うが、途中で限界が来て縮んでいく。

テマリは影真似の術の射程距離を見破ったと余裕になるが、シカマルは何故か対戦中にも関わらず何か手を組み、考え出す。

対戦中に長考なんて余裕だな。実戦であんなことやつたら真っ先に死ぬ。明らかに実戦経験が無いと分からせられる。

テマリもあんなの待たずに対撃すれば良いのに。完全にスキだらけなんだから。

シカマルが長考を止めて構えを取つたのを見てテマリはまたカマイタチの術を食らわせるがシカマルは木に隠れる。

しばらく膠着状態が続いた後、会場の影が大きくなつた事を分かつシカマルはテマリにまたしても影真似を仕掛ける。

テマリは前届かなかつた場所にいるから避けようとしたが、咄嗟に思い付いて急いで下がつた。それが効をそしたのかギリギリで避けられた。

テマリは今度こそ大丈夫と思つていたらカンクロウの「テマリ！上だ！」の声に上を見るとそこには上着とクナイでパラシュートイみたいにした物があつた。

それによつて新たな影が生まれてシカマルは更に影を伸ばす。しかしそれも限界が来て影は縮む。

今度こそ終わりかと思つたテマリは扇で自分を隠し、分身の術をしようとしたら体が動かなくなつた。

何故かと見るとさつきナルトが開けた穴から影が伸びてテマリの影を掴んでいた。

シカマルはテマリに近付く。そうすれば影を縛られてるテマリもシカマルに近付く。そしてシカマルが手を上げた。もちろんテマリも手を上げる。

さあ、これで終わりかと思ひきや、シカマルが「まいつた…ギブアッブ！」と宣言。

最早チャクラが無いからもう良い。と言つてギブアップ。そのせいでテマリの勝利になつた。

あれつてかなりの屈辱だよな。テマリも勝つた気がしないからシカマルを睨み付けた後にカンクロウ達の下に戻つていった。

いよいよ先送りにされていたサスケ対我愛羅の試合順になつたが、未だに来ていなかった。

「次の試合はどうした——！ うちはまだかー！」

観客がまた騒ぎ出した。いい加減アイツ失格にしろよ。

そう思つていたら木の葉を纏つた竜巻が現れて、竜巻が止むとサスケとカカシが背中合わせで立つていた。

格好つけてるつもりか？ 遅刻野郎の分際で。

カカシは一応形だけ「いやーー、遅れてすみません…」と謝つているがサスケは無言。

審判から「名は？」と聞かれると「うちは… サスケ」と答える。あの態度を見ると殺したくなるのは俺だけだろうか？

ナルトと軽い会話をした後、試合を先送りにされたと伝えられ、ナルトとシカマルは控室に戻り、我愛羅がわざわざ階段を使って降りていった。別に飛び降りるなりすれば良いのに。その方が早いし。常人なら控室から飛び降りれば足が折れるだろうが忍なら何ら問題無い。

我愛羅も降りてきていよいよ試合が始まった。

試合開始直後、我愛羅が瓢箪から砂を出し、サスケがそれを警戒して下がる。

しかし我愛羅は攻撃せず、頭痛がするのか頭を抱え、何かブツブツ独り言を言つ。

そして再び頭痛に襲われたのか頭を抱え、少しすると落ち着いた。

サスケが手裏剣を投げると我愛羅はそれを砂の楯で防ぎ、その砂を砂分身にしたて攻撃を加えるがサスケはそれをジャンプして避ける。そしてしばらく砂分身との攻防を続け、遂には我愛羅の顔に拳を叩

き込む。その姿やスピードはリーと同じだった。

何故パンチ？ クナイを握りながら攻撃すればもしかしたら殺れとかも知れないのに。

しかしサスケはわざわざ我愛羅が立ち上がるのを待ち、来いと挑発する。

我愛羅が黙っていると自分から攻撃を開始して、さつきより速いスピードで攻撃する。

我愛羅も何とか砂で防御や攻撃しようとするが軽く避けられて逆に攻撃を食らう。

少しにらみ合い、我愛羅はこのままでは敵わないと見たのか大量の砂で自分を覆い始めた。

サスケは砂が完全に覆う前に攻撃しようと前に出て殴りにかかるが、僅に遅く、今では球体になつた砂の塊を殴るとカウンターとして砂が尖り、サスケを襲う。サスケはその針みたいな砂を紙一重で避け、球体から離れた。

サスケがその砂の固さに驚いていると球体の横の空中に砂で出来た目が飛んでいた。

サスケは何かは分からぬがとりあえず球体に攻撃をかけるがビクともしない。

サスケは会場の壁まで下がり、更には壁にチャクラで吸着して登つた。

そして壁の中腹くらいで片膝を着き、印を結び、両手を下に向けて左手で右手を掴み、何かを溜めるような体制を取る。

少しするとバチ、バチイ！-というテカイ音が鳴り出した。

そしてサスケが構えていた右手には見えるほどのチャクラが集中していた。チャクラを雷属性に変えたんだ。

膨れ上がったチャクラを溜め終えたサスケはチャクラで肉体活性

をやり、更にスピードを高めて我愛羅の下に走る。

何故か千鳥で地面をえぐりながら進み、我愛羅が引きこもつてゐる砂の球体に千鳥を食らわせた。

そのとんでもない威力のおかげか右手は球体を突き破り、中の我愛羅に攻撃を加えた。

その瞬間「うわああ！！血があ…オレの血があ…」といつ我愛羅の悲鳴が聞こえた。たかだか血ぐらいで騒ぐなよ。

サスケは腕を引き抜こうとするが抜けず、またチャクラを集中させて千鳥を我愛羅に食らわす。

「ぎやあああ！！！」

我愛羅が叫び、サスケが全力で球体から右腕を引き抜くと、サスケの右腕に何か見たことの無い生き物の腕が引っ付いていた。実際に見るとスゲエデカイ腕だな。血管浮いてマジキモノ。

何か化け物に附った時のような嫌一な感じがしたかと思つたら球体が崩れて中から我愛羅が出てきた。

肩の傷を押さえて何かに耐えている？

そう思つていたら突然周りが鳥の羽だらけになつた。

これが何か知つてゐ俺はいち早く「解」と幻術返しをして幻術を破つた。

しかし周りの観客達は分からぬのか次々寝ていく。中には下忍や中忍もいたが軒並み幻術にかかつて寝てゐる。油断し過ぎ。

そして間もなく、火影と風影がいる観覧席が煙に包まれると一斉に砂忍や音忍と木の葉の暗部が戦闘を始めた。

遠くからは何か破壊する「デカイ音」が聞こえることから大蛇丸の口寄せの大蛇が暴れてるんだろう。

風影が火影を拉致つて天井に行き、音忍の四人衆が結界を築いた。ほとんどの木の葉の暗部は結界に達する前に止まつたが、1人が間に合わず結界に触れてしまい、瞬く間に全身が燃えてしまつた。

一応あの四紫炎陣という結界忍術もコピーした。そこそこ使えそうだからな。

会場は一気に混乱状態になり、そこかしこで戦闘が始まった。

試合会場では我愛羅がうずくまつたままで、カンクロウやテマリ、砂の担当上忍が我愛羅の側に寄る。

今がチャンスと思い、俺はナルトに近づき、まだ眠っているナルトの上着をめぐり腹を出す。

チャクラを込めていないから腹には何も無いが、別に浮き上がりさせる必要は無いからこの時のために用意していた術を右手に展開してその右手をナルトの腹に当て九尾を封印している四象封印を解くため「四象解印！」とまず1つ目を解いた。

ちなみに四象封印は一つあり、一重の封印式が書いてある。解いた瞬間、膨大なチャクラが漏ってきた。

それに気付き、力カシが近くに来たが、俺の姿を認識出来ないので何故突然封印が破られようとしてるのかが分からぬ。

そんな力カシを尻目に俺はもう一つの封印も解いた。

解いた瞬間、ヤバイと分かっているので瞬身を使い全力で会場から逃げた。

最後に見た光景はナルトの腹を裂いて何かとんでもなくデカく長い爪が出ようとしていた。

会場から何かとんでもないデカイ叫び声のような、威嚇音のようなものが聞こえた事から成功したらしい。

何かデカイ音が止まないことから多分守鶴と九尾が戦ってるんだろう。

守鶴と九尾では勝負にならないから直ぐに決着が着く筈だ。

急いで家に戻ると家の中には3つの死体が転がっていた。

親父、お袋、知らないガキの3人だ。3人とも俺が朝の内に殺して家に運んだ。

里を抜ける時、俺は死んだ事にしておきたいから唯一の血縁関係である父と母を殺した。隠匿と影分身を併用して同時に殺したから何も分からずに逝つただろう。

ガキは俺と年格好が似てたから適当に殺して連れてきた。どうせコイツの親は息子は中忍試験を見に行つたと思ってるだろ？から探しでもいい筈だ。

このガキの死体を俺の死体に偽装するために元々着てた服を剥いで代わりに俺の服を着せた。

そして俺の額当てを着けさせ、更にコピートした俺の血を致死量分、ガキの死体の周りにまいた。

これで偽装は完璧だ。後はコイツの顔を誰だか分からなくすれば良い。

外からデカイ破壊音や戦つてる音が聞こえて来たからそろそろ最後の仕上げをするか。

外に出て火遁の術で家は勿論、周りの家も焼いて敵や九尾の仕業に見せかける。

火遁の猛烈な火力に木造建築の家は瞬く間に燃え広がつていった。既に家は丸焼けで例え生きてる人間がいても焼け死んでるだろ？

それを確認した俺は急いで里を出た。

そして大分遠くの山から木の葉の里を見ると、そこは地獄になつていた。

会場の方には守鶴と思しき肉の塊が横たわつていた。やっぱ守鶴は死んだか。まあ、格が違うからな。

その守鶴を殺した九尾は現在里を燃やしている。都合良く、燃やしている辺りは家があつた辺りだからこれで証拠隠滅は確実だ。

その九尾に様々な忍者が里の防衛のために攻撃を加えているが全く効いてない。それどころか、攻撃を加えた忍者は焼かれたり踏み潰されたりして大多数は死んでた。

流石、伝説の妖獸。桁外れな強さだ。

さあて、どうする木の葉？

頼りの九尾を封印した4代目はもういないし、伝説の三忍も今では自雷也しかいない。

結構な数の下忍、中忍は会場で幻術食らつて寝てたから今戦えるのは幻術を解除した上忍と国境警備に行つてた奴等ぐらい。

暗部や根の連中も戦力にはなるだろうが素直に戦力になつてくれるだろうかねえ？ それに、例え味方になつてくれても九尾に勝てるとは思えない。

大蛇丸対火影の戦いがどうなったかは知らないが、お互い無事ではいられないだろう。

さて、これで終了だ。

後は九尾が破壊し尽くしてくれるだろう。これ以上見ててもしうがないし。

さつさと火の国を出よう。

これで木の葉は終りだ。

これから火の国に進出する戦争が始まるだろうな。

巻き込まれない内に遠くの国に逃げよう。

とりあえずは岩の国にでも逃げるか。火の国が潰れれば岩の国が最大規模だ。

そこなら比較的マシだろう。

木の葉崩し、ていうか木の葉の悲劇が起きて1年。

九尾の襲撃を受けた木の葉の里は壊滅的な打撃を受けた。  
3代目火影は九尾に殺され、大蛇丸は九尾が出てきたら直ぐに火影を捨てて、配下共々音の里に逃げたらしい。

流石に大蛇丸も九尾に勝負を仕掛けるというバカな真似はしなかつたらしい。それに、このまま九尾が暴れれば木の葉は滅ぶと分かるから何もせずに帰ったようだ。

自雷也や木の葉の忍は懸命に里防衛のために奮戦したらしいがやはり敵わず、自雷也は勿論、大多数の忍や住民は死んだ。

その後、粗方木の葉の里を破壊しつくした九尾は消えたらしい。  
どつかに行つたのか？と思つたがその後は目撃されて無いし、各里も探したらしいが見つからなかつた。

多分、九尾は死んだんだろう。

何せ封印を破る時にチャクラを注ぎまくつて力任せに無理矢理破つたからな。

もしかして力を使い果たして死んだか？

だとしたらこれで一件落着だろう。

何せ暁の計画には尾獸が全部必要だつたし。

サスケやナルトも恐らく死んだだろうから原作は完璧に破壊された。  
大蛇丸が5体満足で音の里も戦力を未だ有してるのが微妙だけど、まあ、関わらなければ問題ない。

今は激動の時代に移り変わった。

最大勢力を誇った木の葉がほぼ壊滅した事により火の国の戦力は大激減。

岩の国、砂の国、雲の国、霧の国。

つまり忍び大国はこれを好機と見て一斉に火の国に侵攻を始めた。これに追従して小国の草の国や滝の国なども参戦しておこぼれに与ろづとしている。

一方、木の葉もただやられている訳では無い。

「根」の者達が政権を獲得し、暗部や残った中忍や下忍を戦線に投入して必死に防衛している。

この緊急事態に、今までには不干涉だった日向家など名家も戦争に参加させられ、予想外にも木の葉は大健闘していた。もしかしたら多少は領土を失うかも知れないが、木の葉は残るかも知れない。スゲエな。

周りの国ほぼ全てが敵に回ったというのにまだ国を守れている。むしろこの事態のせいで里は一致団結したのか？

ちなみに俺は現在、火の国から最も遠い岩の国にいる。

岩の国は火の国と戦争やつてるんだから国内は混乱していないかと思つていたが、そんなことは無かった。

まあ、戦うのは岩隠れの里だからな。

岩の国自体は別に戦つてないから里で無ければ何も変わらない。

それに岩隠れの里はかなり強い里だから他国からの侵攻はほとんど無い。

そう言えば最近、砂の国もヤバイらしいな。

何せ風影は大蛇丸に殺されてし、肝心の戦力の我愛羅も死んだから戦力がガタガタ。

木の葉に集中していた各国の視線も落ち着いて来て、今では砂の国を狙っている国も多い。

俺もこの激動の時代に乗つてどこかに国を建国しようかとも思つたが、わざわざ面倒くさい人生を歩むのも俺らしく無いと思つたので止めた。

このまま北進してまだ知られてない国にでも行こうと思つてゐる。この地域ではあんまり生きやすい所は無いし、永住したい国も無い。だから新天地を目指してしばらくは旅人になるつもりだ。

まあ、もしかしたら別の大陸やこの地域から遠い所に国を作つて、忍に頼らない近代的な軍でも創設したらこの地域に侵略するかもな。このまま忍に頼り続けたら文明が停滞しそうだし、その時は忍を滅ぼすのも良いかな？

とりあえず、今は永住できる土地を探さなくてはな。  
それからの事はその時考えれば良い。

これからは何のしがらみも気にする事は無い。

追い忍に追われる事も無い、自由を勝ち取つたんだからな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2097u/>

---

リアル忍者 北郷

2011年7月13日20時03分発行